

群馬県前橋市

石倉下宅地遺跡 紅雲村東遺跡

2001

表町石倉線遺跡調査会

群馬県前橋市

石倉下宅地遺跡 紅雲村東遺跡

2001

表町石倉線遺跡調査会

序

遺跡が所在する前橋市石倉町及び紅雲町は前橋台地上の微高地に位置し、上野国府にも近いことから古代より群馬の中心地として栄えてきた地域です。

利根川をはさんだ両地区は近年市街地の拡大に伴い、周辺の幹線道路等整備が進められ、徐々に再開発が行われています。

今回発掘調査を行った都市計画道路3・4・72表町石倉線は、利根橋をはさんで利根川を渡り前橋市表町と石倉町を結ぶ都市道路です。今回の道路改築事業は、車線の拡幅工事と同時に電線共同溝などを整備することで災害に対する都市基盤の整備を充実させることを目的としています。

工事に先だって埋蔵文化財の発掘調査を実施しましたところ、古墳時代前期の集落の一部と見られる竪穴住居跡や井戸跡などの遺構群が検出されました。この地域に古墳文化の到来とともにムラが生まれたこと、台地を開拓した人々の歴史が埋蔵文化財の調査成果を通して、いま語られようとしています。

ここに調査の成果を発掘調査報告書としてまとめ、刊行する運びとなりました。この成果が広く活用され、郷土の歴史を解明する一助になれば幸いです。

最後に、発掘調査から整理事業に至るまで、ご指導・ご協力をいただきました地元の方々、群馬県土木部都市施設課、群馬県前橋土木事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、山武考古学研究所、そして発掘調査・整理にあたられた多くのみなさんに厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

表町石倉線遺跡調査会
会長 佐藤恭一

例　　言

1. 本報告書は、前橋市石倉町および紅雲町地内に所在する石倉下宅地・紅雲村東両遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、表町石倉線道路改築事業に伴う事前調査として実施した。

3. 調査は、表町石倉線遺跡調査会の依頼を受けて、山武考古学研究所が行った。

4. 遺跡の所在地・面積および調査期間・調査担当者は下記の通りである。

遺跡名 石倉下宅地遺跡

所在地 群馬県前橋市石倉町1丁目地内

調査面積 600m²

調査期間 平成12年10月16日～同年11月17日

調査担当 矢島博文

遺跡名 紅雲村東遺跡

所在地 群馬県前橋市紅雲町2丁目地内

調査面積 250m²

調査期間 平成12年11月17日～同年11月29日

調査担当 矢島博文

5. 本遺跡から検出された遺物および記録を行った写真・図面等の資料は、報告書刊行前が山武考古学研究所、刊行後は前橋市教育委員会が保管する。

6. 報告書刊行にいたるまで、下記の諸機関に御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表するものである。(順不同 敬称略)

石倉下宅地遺跡 群馬県教育委員会 前橋市教育委員会 前橋土木事務所 三原工業 須賀工業
古環境研究所 開成測量 新成田総合社

紅雲村東遺跡 群馬県教育委員会 前橋市教育委員会 前橋土木事務所 小野里工業 須賀工業
前橋文化財研究所 新成田総合社

7. 発掘参加者は下記の通りである。

(順不同)

石倉下宅地遺跡 磯田二郎 磯田正男 小田保 奥野賢司 斎藤茂作 桜井啓一 富田信夫 黒瀧一
吉田善紀 桜井れい 宇田有紀 今井峰子

紅雲村東遺跡 磯田二郎 磯田正男 小田保 奥野賢司 斎藤茂作 桜井啓一 富田信夫 黒瀧一
吉田善紀 桜井れい

凡　　例

1. 図の中で使用したスクリーントーンは以下の通りである。



赤彩
貼床



粘土



焼土
炭

目 次

序

例言・凡例

目次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 調査の方法	3
IV 調査の経過	3
V 石倉下宅地遺跡	
1 概要	7
2 基本堆積土層	7
3 遺構・遺物	8
4 まとめ	30
VI 紅雲村東遺跡	
1 概要	31
2 基本堆積土層	31
3 遺構・遺物	32
4 まとめ	39
VII 自然科学分析	40

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第20図 4～7号井戸	22
第2図 石倉下宅地遺跡調査区位置図	4	第21図 井戸出土遺物（1）	23
第3図 紅雲村東遺跡調査区位置図	4	第22図 井戸出土遺物（2）	24
第4図 石倉下宅地遺跡全体図	5～6	第23図 土坑（1）	27
第5図 紅雲村東遺跡全体図	5～6	第24図 土坑（2）	28
第6図 基本堆積土層図	7	第25図 土坑出土遺物	29
第7図 1号住居跡・出土遺物	8	第26図 1号溝	30
第8図 2号住居跡・出土遺物	9	第27図 表採遺物	30
第9図 3号住居跡	10	第28図 基本堆積土層図	31
第10図 3号住居跡出土遺物	11	第29図 1号住居跡・出土遺物	32
第11図 4号住居跡・出土遺物	12	第30図 土坑（1）	33
第12図 5号住居跡・出土遺物	13	第31図 土坑（2）	34
第13図 6号住居跡	14	第32図 土坑出土遺物	34
第14図 6号住居跡出土遺物	15	第33図 ピット群	35
第15図 7号住居跡	16	第34図 1号溝	36
第16図 8号住居跡	17	第35図 2・3号溝・大畦畔	36
第17図 8号住居跡出土遺物	18	第36図 4～6号溝	37
第18図 9号住居跡・出土遺物	19	第37図 溝出土遺物	38
第19図 1～3号井戸	20		

表 目 次

表 1 1号住居跡出土遺物.....	8	表14 7号井戸出土遺物.....	25
表 2 2号住居跡出土遺物.....	10	表15 2号土坑出土遺物.....	29
表 3 3号住居跡出土遺物.....	11	表16 7号土坑出土遺物.....	29
表 4 4号住居跡出土遺物.....	12	表17 表採遺物.....	30
表 5 5号住居跡出土遺物.....	13	表18 1号住居跡出土遺物.....	32
表 6 6号住居跡出土遺物.....	15	表19 1号土坑出土遺物.....	35
表 7 8号住居跡出土遺物.....	18	表20 3号土坑出土遺物.....	35
表 8 9号住居跡出土遺物.....	19	表21 6号土坑出土遺物.....	35
表 9 1号井戸出土遺物.....	25	表22 1号溝出土遺物.....	39
表10 2号井戸出土遺物.....	25	表23 2号溝出土遺物.....	39
表11 3号井戸出土遺物.....	25	表24 4号溝出土遺物.....	39
表12 4号井戸出土遺物.....	25	表25 5号溝出土遺物.....	39
表13 6号井戸出土遺物.....	25	表26 6号溝出土遺物.....	39

図版目次

図版 1 - 1 石倉下宅地 1区全景	図版 4 - 1 石倉下宅地 1号土坑	- 7 紅雲村東ピット群全景
- 2 石倉下宅地 2区全景	- 2 石倉下宅地 2号土坑	- 8 紅雲村東ピット群全景
- 3 石倉下宅地 3区全景	- 3 石倉下宅地 3号土坑	図版 7 - 1 紅雲村東 1号溝
- 4 石倉下宅地 4区全景	- 4 石倉下宅地 4号土坑	- 2 紅雲村東 2号溝
図版 2 - 1 石倉下宅地 1号住居跡	- 5 石倉下宅地 6号土坑	- 3 紅雲村東 3号溝
- 2 石倉下宅地 2号住居跡	- 6 石倉下宅地 7号土坑	- 4 紅雲村東 4号溝
- 3 石倉下宅地 3号住居跡	- 7 石倉下宅地 8号土坑	- 5 紅雲村東 5号溝
- 4 石倉下宅地 4号住居跡	- 8 石倉下宅地 9号土坑	- 6 紅雲村東 6号溝
- 5 石倉下宅地 5号住居跡	図版 5 - 1 紅雲村東 1区全景	- 7 紅雲村東 6号溝
- 6 石倉下宅地 6号住居跡	- 2 紅雲村東 2区全景	- 8 紅雲村東B軽石下水田大畔
- 7 石倉下宅地 7号住居跡	- 3 紅雲村東 3区全景	図版 8 出土遺物 (1)
- 8 石倉下宅地 8号住居跡	- 4 紅雲村東 4区全景	図版 9 出土遺物 (2)
図版 3 - 1 石倉下宅地 9号住居跡	- 5 紅雲村東 5区全景	図版10 出土遺物 (3)
- 2 石倉下宅地 1号井戸	- 6 紅雲村東B軽石下水田	
- 3 石倉下宅地 2号井戸	図版 6 - 1 紅雲村東 1号住居跡	
- 4 石倉下宅地 3号井戸	- 2 紅雲村東 1号土坑	
- 5 石倉下宅地 4・5号井戸	- 3 紅雲村東 2号土坑	
- 6 石倉下宅地 6号井戸	- 4 紅雲村東 3号土坑	
- 7 石倉下宅地 7号井戸	- 5 紅雲村東 5号土坑	
- 8 石倉下宅地 1号溝	- 6 紅雲村東 6号土坑 古銭出土状況	

I 調査に至る経過

平成12年9月、群馬県前橋土木事務所から前橋市石倉町地内における都市計画道路表町石倉線の改築事業について事業の照会があり、群馬県教育委員会文化財保護課は、事業予定地において9月21日と10月4日および10月24日に試掘調査を行った。調査の結果、事業地の一部から古墳時代前期の集落跡と思われる遺構群が検出されたことから、発掘調査を実施する必要があると判断された。

事業地では整備工事が既に始まっていたことから、調査対象地域については工事を一時中止してもらい、早急に発掘調査を実施することが求められた。群馬県教育委員会は、文化財保護課内に事務局を置く遺跡調査会を設立し、県土木部都市施設課から委託をうけ、発掘調査業務を民間調査機関に再委託することで発掘調査を実施する事となった。

表町石倉線遺跡調査会 組織表

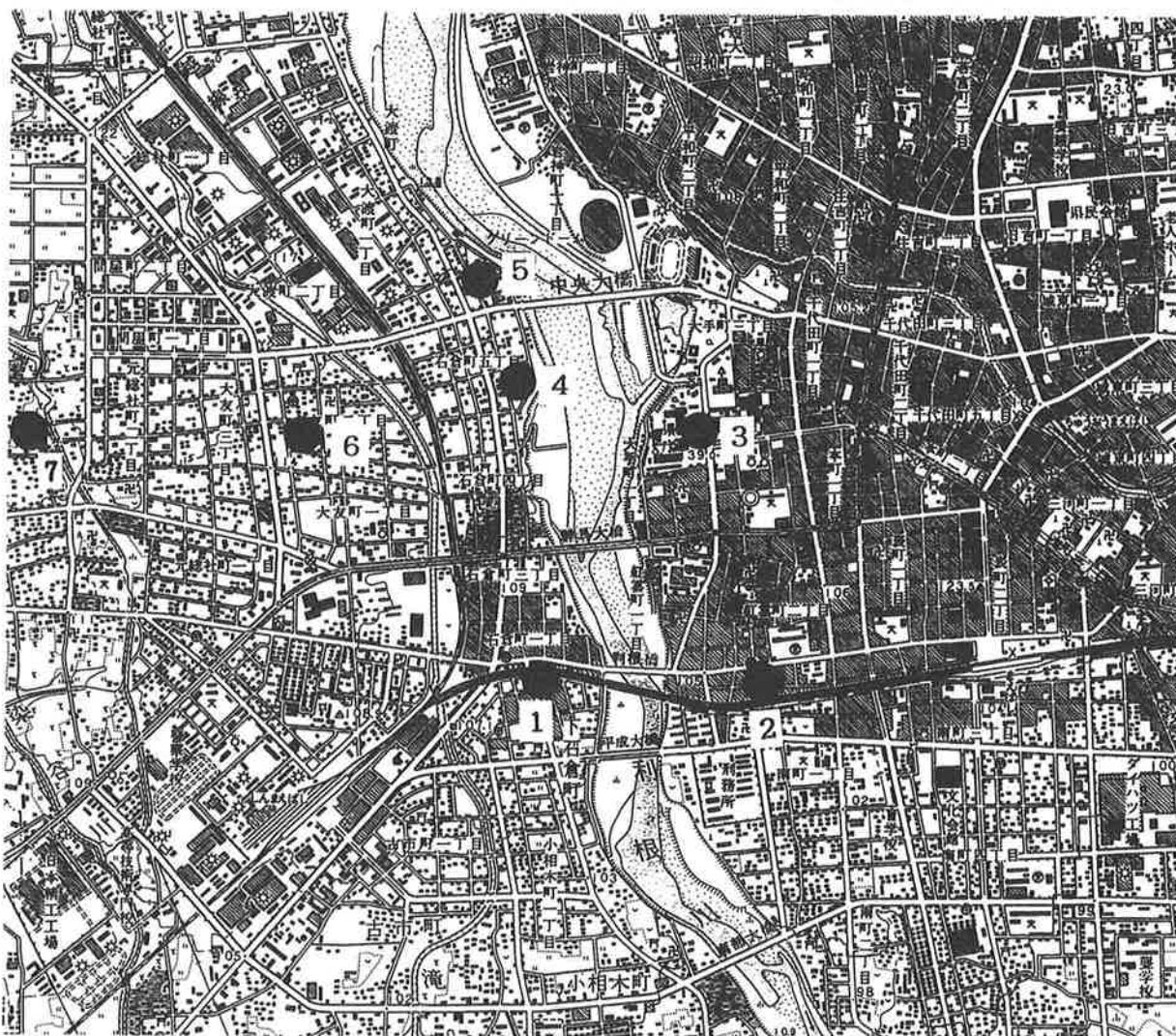
区分	職名	氏名
会長	群馬県教育委員会文化スポーツ部長	佐藤 恭一
副会長	群馬県教育委員会文化スポーツ部文化財保護課長	石井 英雄
理事	群馬県教育委員会文化スポーツ部文化財保護課次長 群馬県土木部都市施設課次長 群馬県前橋土木事務所次長 前橋市教育委員会事務局文化財保護課長	野田 明男 飯塚 敬 中曾根 道 石川 克博
監事	群馬県教育委員会文化スポーツ部文化財保護課専門員 前橋市教育委員会事務局文化財保護課埋蔵文化財係長	飯塚 聰 井野 誠一
事務局長	群馬県教育委員会文化スポーツ部文化財保護課課長補佐	巾 隆之
事務局員	群馬県教育委員会文化スポーツ部文化財保護課主幹兼専門員 群馬県教育委員会文化スポーツ部文化財保護課主任	関 晴彦 矢口 裕之

II 遺跡の位置と環境

石倉下宅地遺跡と紅雲村東遺跡は、前橋市の西南部に位置し、石倉下宅地遺跡はJR前橋駅より西へ1.6kmの前橋市石倉町1丁目地内、紅雲村東遺跡はJR前橋駅より西へ0.9kmの前橋市紅雲町2丁目地内にそれぞれ所在する。

前橋市西南部は、榛名山南東麓から発達した相馬原扇状地末端より始まる前橋台地が広がり、中世以降に利根川が現利根川へと流路を変え、本地区の前橋台地を流下分断している。この分断された前橋台地の利根川西岸に石倉下宅地遺跡が、東岸に紅雲村東遺跡が存在する。石倉下宅地遺跡周辺は標高が106mで、南西方向へ緩やかに傾斜しており、紅雲村東遺跡周辺は標高が104mで、南西方向へ緩やかに傾斜する。

両遺跡周辺は、古代において上野国の中核地域となっており、石倉下宅地遺跡の西方約1.5kmに上野国府が、北方には大型前方後円墳である王山古墳などが存在する。中近世では紅雲村東遺跡の北方にある前橋城をはじめとして両遺跡周辺には石倉の砦跡・大友屋敷・蒼海城など数多くの城館施設が存在する。



1：石倉下宅地遺跡 2：紅雲村東遺跡 3：前橋城 4：石倉の砦跡 5：王山古墳
6：大友屋敷跡 7：上野国府

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

III 調査の方法

石倉下宅地遺跡・紅雲村東遺跡両遺跡の調査区は、商店街に面した道路沿いに位置するため、工事用バリケード等により安全対策を配慮し、各商店の出入りを確保するため各遺跡とともに3～4区に分割し、切り替えし調査を実施、各地区調査終了時点で隨時碎石による埋め戻し及び整地を行った。

調査は、試掘調査の結果に基づき重機による表土除去を実施し、この後人力による遺構確認・遺構調査を行った。各遺構の掘り下げは遺構埋没状況・重複関係等を把握するため土層観察用の畦を設定し、隨時観察をしながら実施した。調査した各遺構は実測図・写真により記録保存をした。実測図は平・断面図とともに1/20縮尺を基本とし、カマド等の微細図が必要とする場合に1/10縮尺、全体図を1/100とした。写真撮影は調査過程で隨時行い、白黒35mm・カラー1リバーサル35mm・白黒6×7・カラー35mmの4種類を用いた。

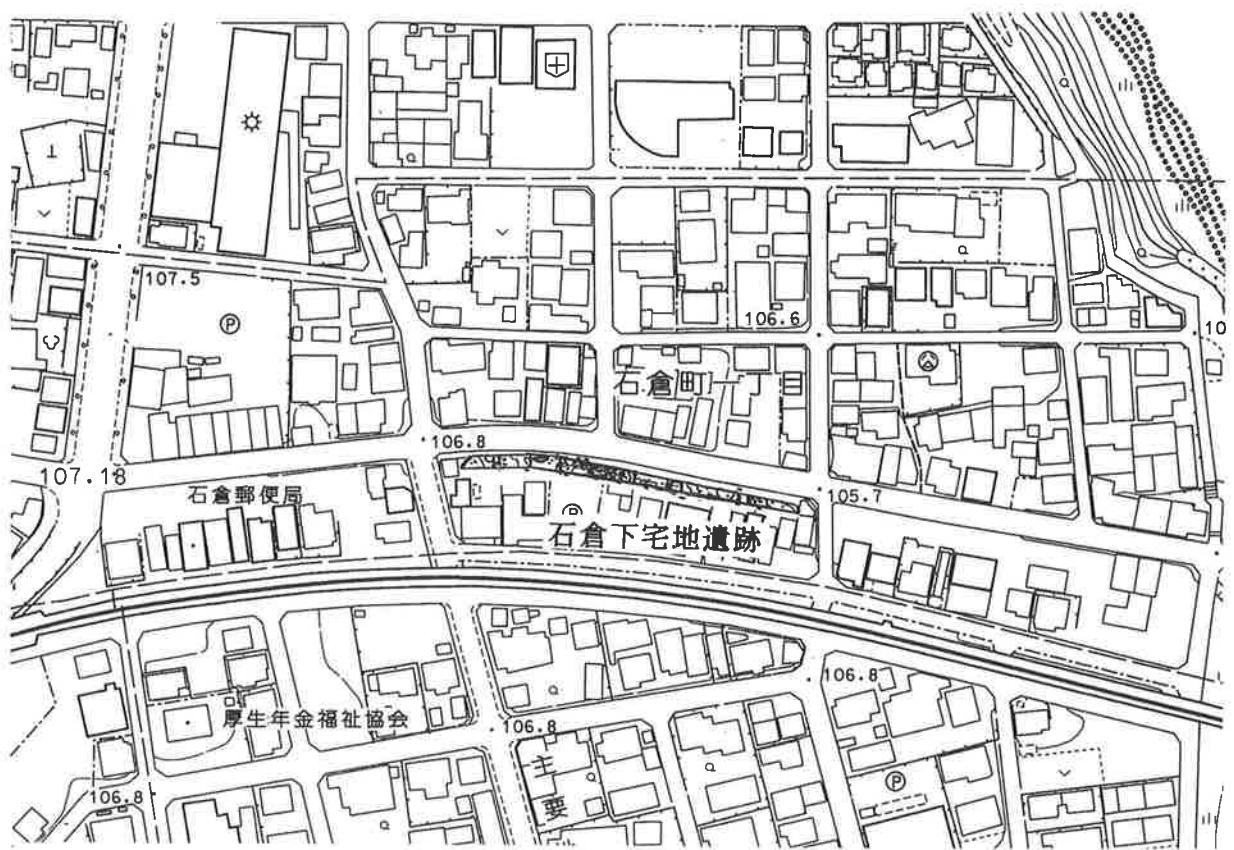
IV 調査の経過

石倉下宅地遺跡

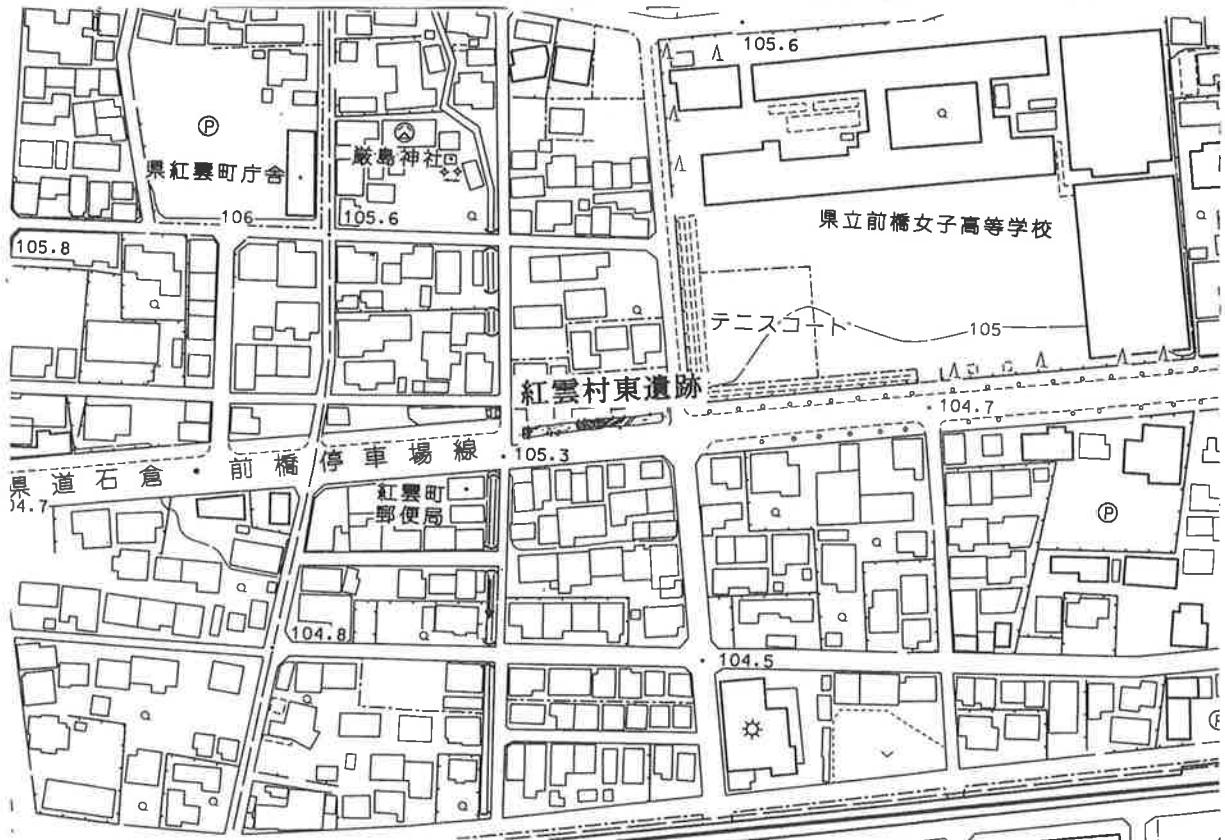
- 10月中旬 機材搬入・安全対策を実施した後、表土除去を調査区西端部より開始、遺構調査を開始する。
- 10月下旬 調査区西部の調査を終了・埋め戻しし、調査を調査区中央部東側へと移行する。調査区中央部東側の調査を終了・埋め戻しし、調査を調査区中央部西側へと移行する。
- 11月上旬 調査区中央部西側の調査を終了・埋め戻しし、調査を調査区東部へと移行する。これまでに調査の終了した地区に碎石を敷き整地する。
- 11月中旬 調査区東部にて土層堆積状況を把握するための科学分析（テフラ分析）用資料の採取を行う。調査区東部の調査を終了し、埋め戻し・碎石を敷き整地する。調査区の安全対策機材の撤去および機材の撤収をし、石倉下宅地遺跡の全ての調査を終了する。

紅雲村東遺跡

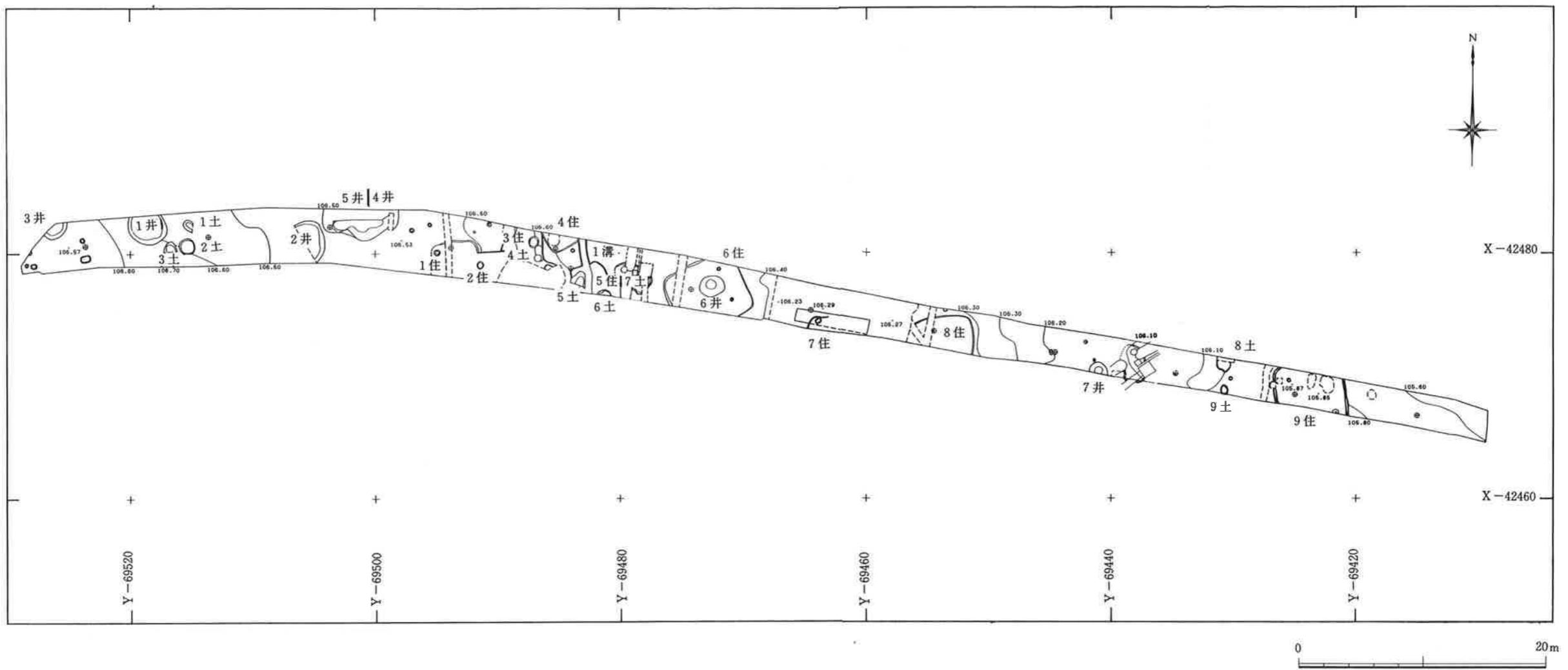
- 11月中旬 機材搬入・安全対策を実施した後、表土除去を調査区東西両端部より開始する。
- 11月下旬 調査区東西両端部の遺構調査を開始・終了し、埋め戻しする。調査区中央部を表土除去後遺構調査を開始・終了、埋め戻しする。これまで調査した全地区に碎石を敷き、整地する。調査区の安全対策機材の撤去および機材の撤収をし、紅雲村東遺跡の全ての調査を終了する。



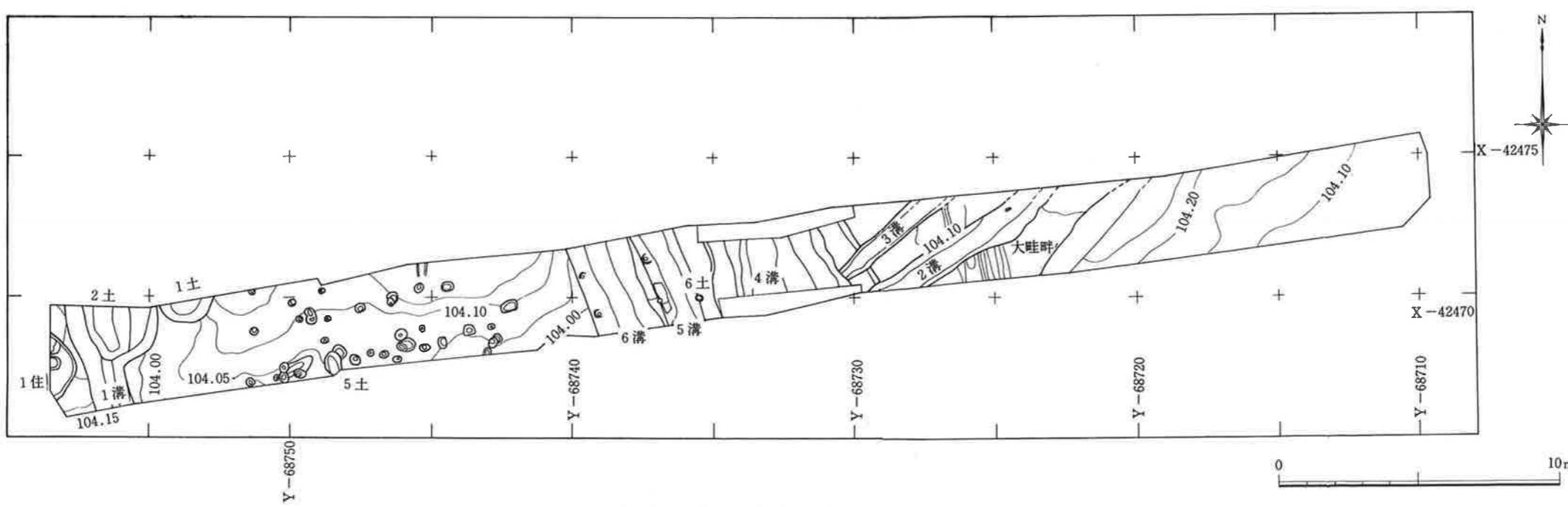
第2図 石倉下宅地遺跡調査区位置図（前橋市現形図No.43 前橋市役所作製 1/2,500）



第3図 紅雲村東遺跡調査区位置図（前橋市現形図No.43 前橋市役所作製 1/2,500）



第4図 石倉下宅地遺跡全体図



第5図 紅雲村東遺跡全体図

V 石倉下宅地遺跡

1 概要

今回の発掘調査では、古墳時代前期の集落址・平安時代の集落址・近世の井戸・近代の井戸・時期不明の遺構が検出されている。古墳時代前期の集落址は調査区の中央部やや西寄りの地点から東部にかけて存在している。平安時代の集落址は調査区の中央部やや西寄りの地点から中央部にかけて存在している。近世・近代の井戸は調査区の西部に集中している。この他に時期不明の井戸・土坑・溝は調査区に散在して存在している。

2 基本堆積土層

今回の調査では、調査区内の基本堆積土層をI～IX層まで確認している。この内、I層が近世以降の遺物包含層、II層が古墳時代～平安時代の遺物包含層となり、III層の上面が遺構確認面となる。また、I層の直上には近代以後の盛土が調査区全体に見られ、II層は近現代の搅乱等により部分的に残存するだけである。

I層 褐灰色土 7.5YR4/1 浅間C軽石（1～2mm）少量。浅間C軽石（2～5mm）少量。粘性・締まりともに有り。

II層 黒色土 7.5YR2/1 浅間C軽石（1～2mm）まばら。浅間C軽石（2～5mm）少量。粘性・締まりともに有り。

III層 浅黄橙色土 7.5YR8/6 酸化鉄（2～4mm）少量。粘性有り、締まり強。

IV層 浅黄橙色土 7.5YR8/4 黄色軽石（YP? 2～5mm）微量。炭化物（1mm）微量。粘性有り、締まり強。

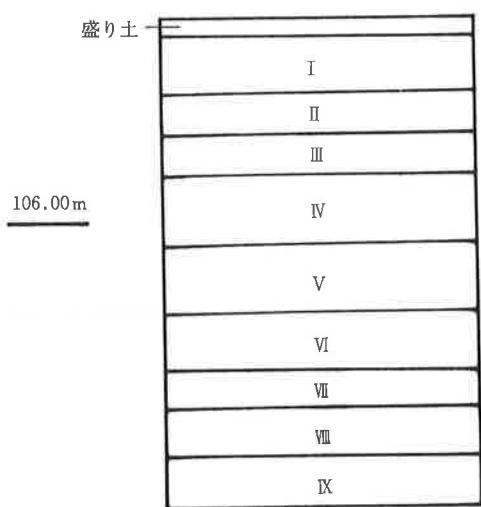
V層 浅黄橙色土 10YR8/3 黄色軽石（YP? 2～5mm）微量。炭化物（1mm）微量。粘性有り、締まり強。

VI層 黄橙色土 7.5YR8/8 橙軽石（BP? 1～2mm）多量。黒色粒（2mm）多量。粘性有り、締まり強。

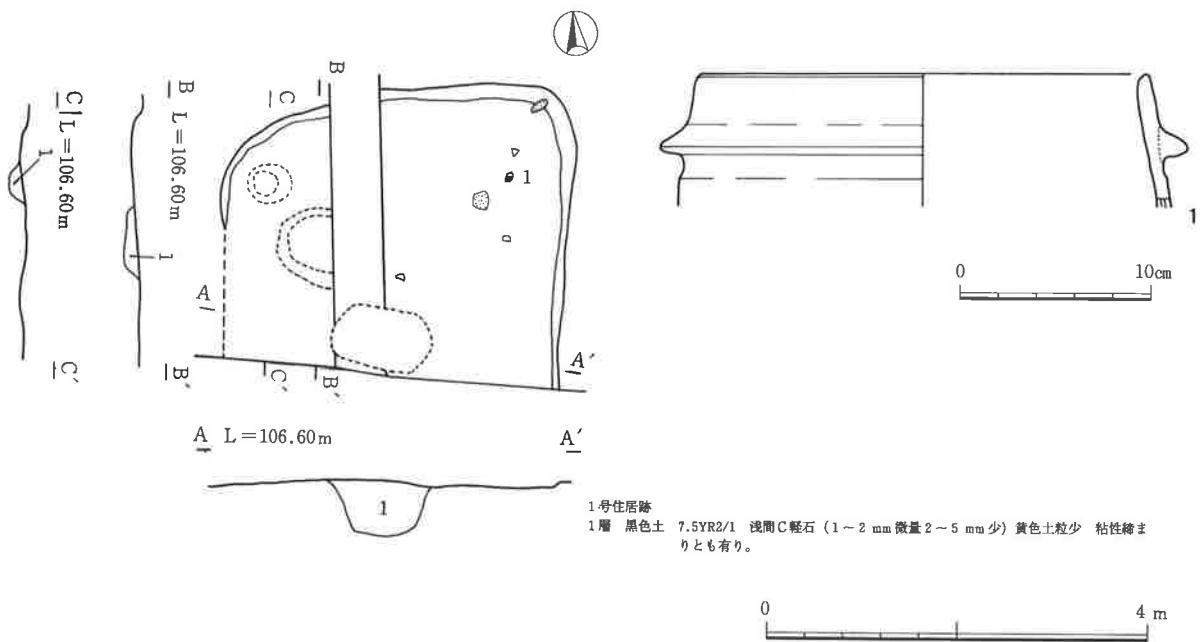
VII層 灰白色砂質土 7.5YR8/1 砂粒（2mm以下）多量。粘性やや弱く、締まり有り。

VIII層 灰白色砂質土 7.5YR8/1 砂粒（2mm以下）多量。粘性弱く、締まり有り。

IX層 灰白色シルト質土 5 YR8/1 粘性、締まりともに強。



第6図 基本堆積土層図



第7図 1号住居跡・出土遺物

3 遺構・遺物

1号住居跡（第7図 図版2-1・8）

本遺構は、調査区の中央部西寄りに位置し、2号住居跡と重複する。新旧関係は本遺構が2号住居跡よりも新しくなる。

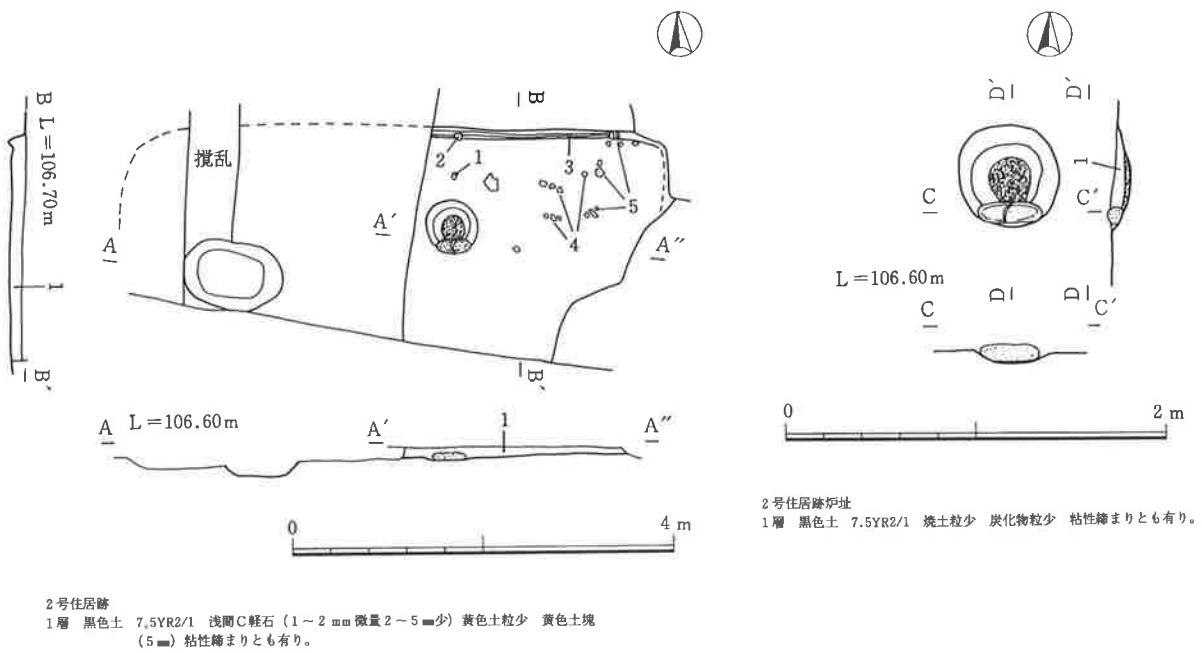
規模形状は長軸長3.67m×短軸長3.18m以上の方形基調となる。床面はほぼ平坦で、一部貼床となっている。貼床下には床下土坑2基と2号住居跡の貯蔵穴1基が検出されている。北西隅の床下土坑は長軸長47cm×短軸長42cmの楕円形を呈し、深さが18cmの鍋底状となる。西部の床下土坑は東部に搅乱があるため規模形状は不明だが、長軸長61cm以上×短軸長83cmの楕円形を呈すると思われ、深さが15cmの鍋底状となる。壁は高さ5cmで、ほぼ直立する。柱穴・周溝は検出されていない。炉址・竈などは不明である。

本住居跡の構築時期は、出土土器より平安時代と思われる。

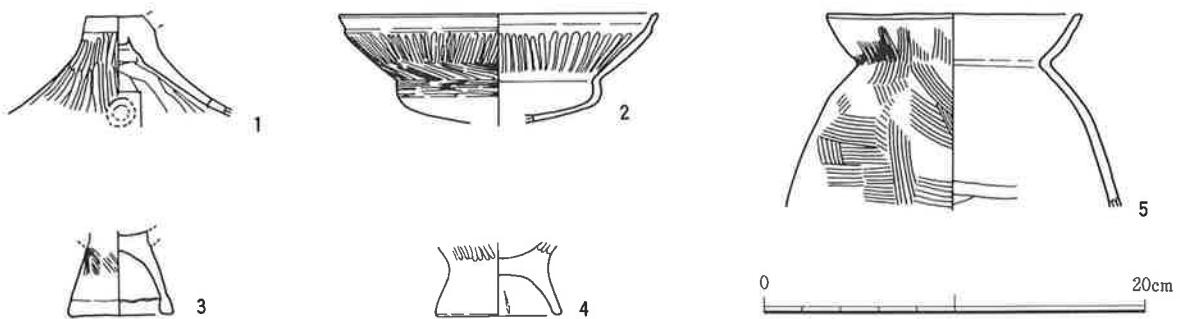
遺物は、土師器が床面直上より出土している。

表1 1号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	土師器 羽釜	口 (23.4) 高 - 底 -	酸化	暗赤橙色	砂粒多量	やや内傾して立ち上がる 口縁部。 やや下方気味に延びる 鍔。	口縁部内外面横撫で。	



2号住居跡
1層 黒色土 7.5YR2/1 浅間C軽石 (1~2 mm微量 2~5 mm少) 黄色土粒少 黄色土塊
(5 mm) 粘性繩まりとも有り。



第8図 2号住居跡・出土遺物

2号住居跡 (第8図 図版2-2・8)

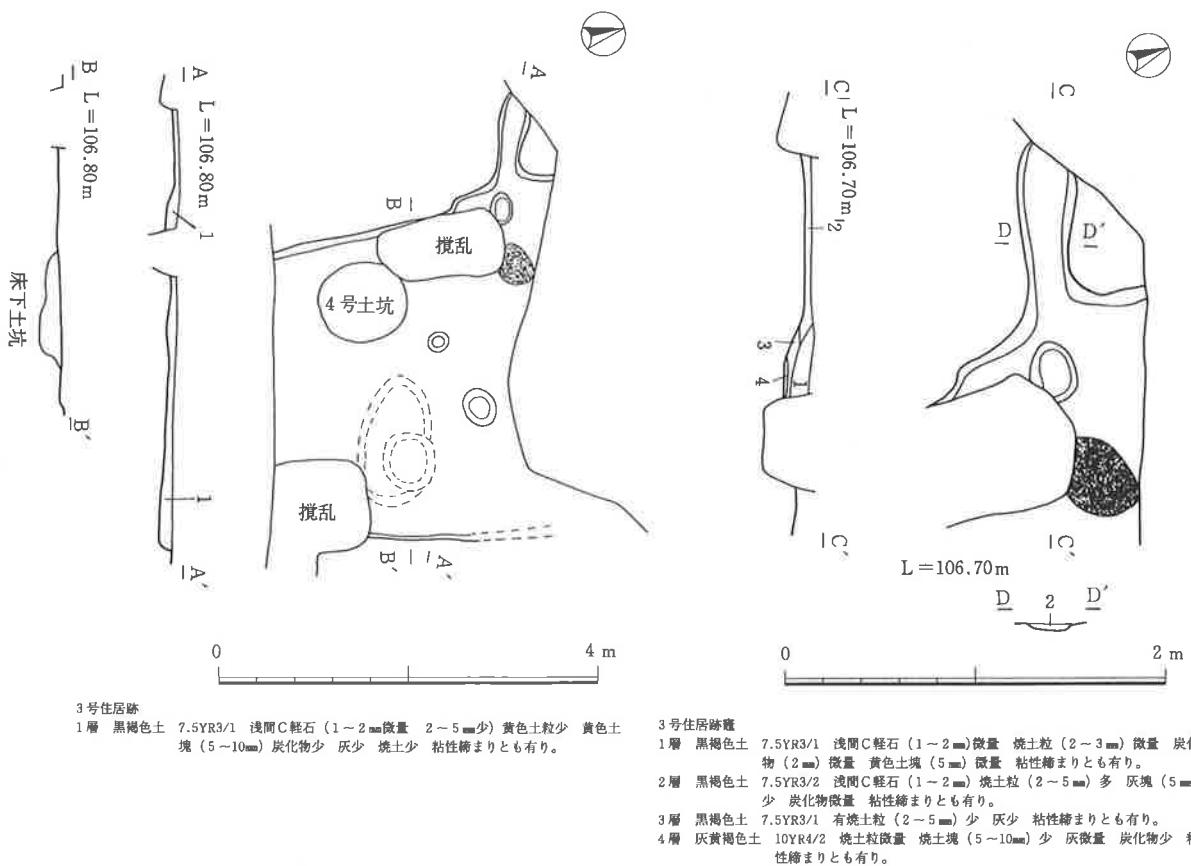
本遺構は、調査区の中央部西寄りに位置し、1号住居跡と重複する。新旧関係は本遺構が1号住居跡よりも古くなる。

規模形状は南部が調査区外となり、西部が1号住居跡により削平されているため不明だが、長軸長5.00m以上×短軸長2.50m以上の方形基調となる。床面はほぼ平坦である。壁は高さ5cmで、ほぼ直立する。柱穴は検出されていない。周溝は北壁に残存しており、幅5cm・深さ5cmのU字状断面となる。貯蔵穴は住居西部の1号住居跡床面下より検出されている。規模形状は長軸長103cm×短軸長70cmの橢円形を呈し、深さが60cmの鍋底状となる。炉址は住居北部の中央に位置したと推定される。規模形状は径55cmの円形を呈し、深さが9cmの皿状断面の掘り込みを有し、南端に棒状の自然石が設置されている。本住居跡の構築時期は出土土器より古墳時代と思われる。

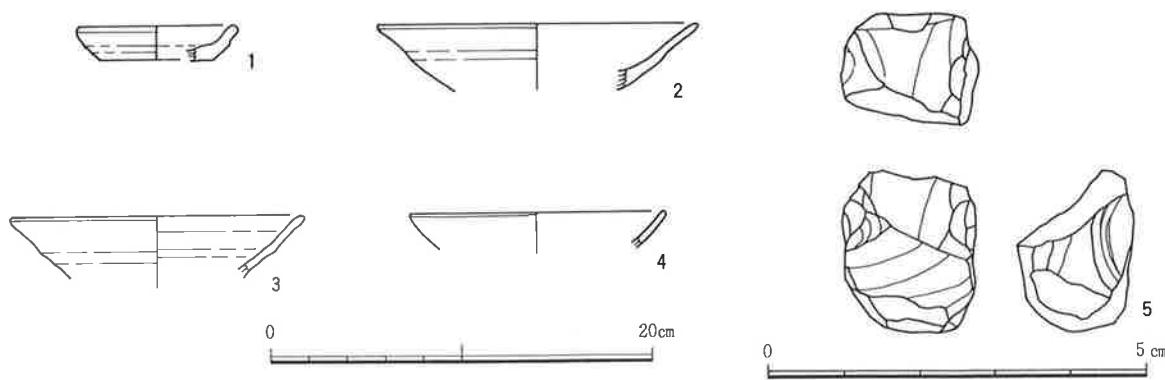
遺物は、土師器が出土している。1~5は覆土中より出土している。

表2 2号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	土師器 高 壱	口一 高一 底一	酸化	暗黄橙色	砂粒 礫少	八の字状に開く脚部。やや大きめの孔を有す。四方向と推定される。	脚部外面縦位の磨き。内面カキ取り後、撫で。	
2	土師器 埴	口(16.6) 高一 底一	酸化	橙褐色	砂粒礫少	口唇部に段を有し大きく開く口縁部。口縁部に比して小さく扁平な体部。	口唇部横撫で。口縁部内外斜位の磨き。内面カキ取り後、体部外面上半横位の磨き、下半削り。体部内面撫で。	
3	土師器 台付甕	口一 高一 底 5.5	酸化	黒褐色	細砂粒多量	直線的に開く脚部。	胴部～脚部外面縦位の磨き。脚部内面ヘラ撫で後、撫で。	
4	土師器 台付甕	口一 高一 底 6.7	酸化	橙褐色	砂粒多量	端部を内側に折り返し、直線的に開く脚部。	脚部外面ハケ目、脚部内面撫で。	
5	土師器 甕	口(13.2) 高一 底一	酸化	橙褐色	砂粒 礫少	球形の胴部。内湾気味となり、外傾する口縁部。	口縁部横撫で後、胴部～口縁部下端の外面にハケ目。胴部内面指撫で。	



第9図 3号住居跡



第10図 3号住居跡出土遺物

3号住居跡（第9・10図 図版2-3・8）

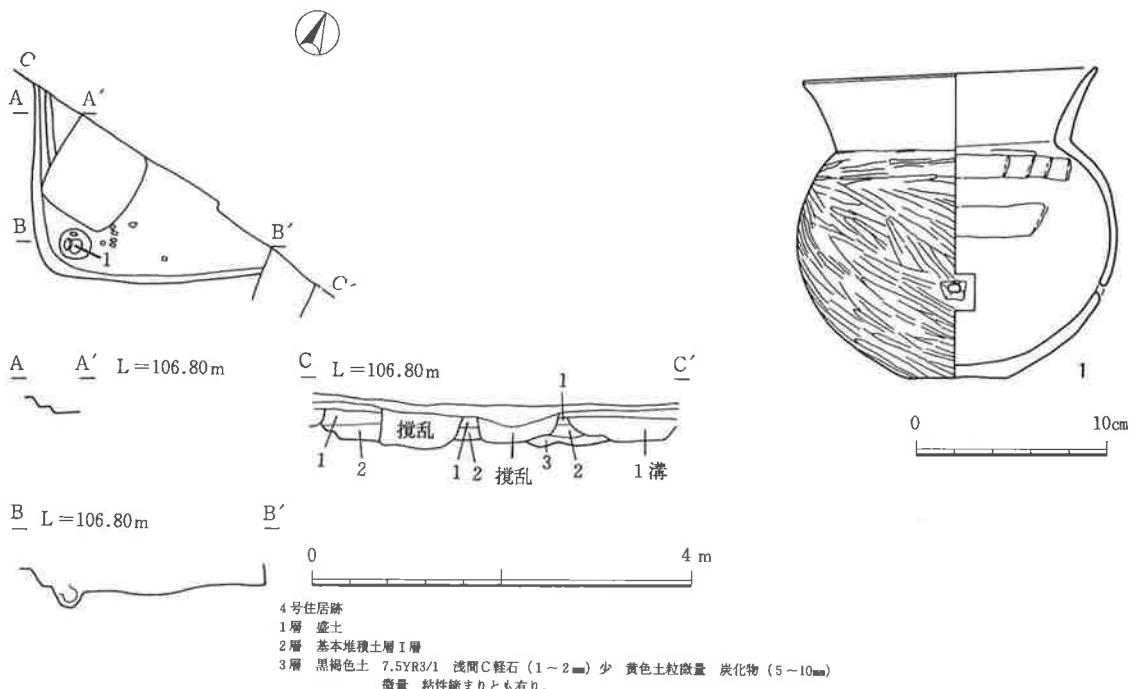
本遺構は、調査区の中央部西寄りに位置し、4号住居跡・4号土坑と重複する。新旧関係は本遺構が4号住居跡を切り、4号土坑に切られる。

規模形状は南部が調査区外となり、北部が搅乱により削平されているため不明だが、長軸長4.20m以上×短軸長4.20mの方形基調となる。床面はほぼ平坦で、一部貼床が認められる。貼床下には長軸長139cm×短軸長79cm×深さ27cmの楕円形の土坑が存在する。壁は高さ15cmで、ほぼ直立する。柱穴・周溝は検出されていない。竈は東壁の北部に位置したと推定される。燃焼部は住居内に存在し、長軸長57cm×短軸長40cmの楕円形を呈す深さ12cmの皿状断面の掘り込みを有すが、袖などは無い。燃焼部前面の床面には竈より掻き出されたと思われる炭化物が存在している。煙道部は幅22~32cm×長さ85cm以上の溝状を呈し、水平に延びている。

本住居跡の構築時期は出土土器より平安時代と思われる。遺物は、土師器・須恵器が出土している。4・5は覆土中、1・2は竈内、3は床下土坑より出土している。

表3 3号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	土師器 壺	口(8.4) 高— 底(5.9)	酸化	暗赤橙色	砂粒 礫少	小型。	ロクロ。回転糸切り。	
2	土師器 壺	口(16.6) 高— 底—	酸化	黄橙褐色	砂粒 礫少	外反する口縁部。	ロクロ。	
3	土師器 壺	口(15.4) 高— 底—	酸化	黄橙褐色	砂粒 礫少	外反する口縁部。	ロクロ	
4	須恵器 壺	口(13.4) 高— 底—	還元	灰色	黒色粒少	内弯気味となる口縁部。	ロクロ。	
5	石核	石英製で、全面に加工痕を有す。長さ2.1cm 幅1.8cm 厚さ1.4cm 重さ6.3g						



第11図 4号住居跡・出土遺物

4号住居跡 (第11図 図版2-4・8)

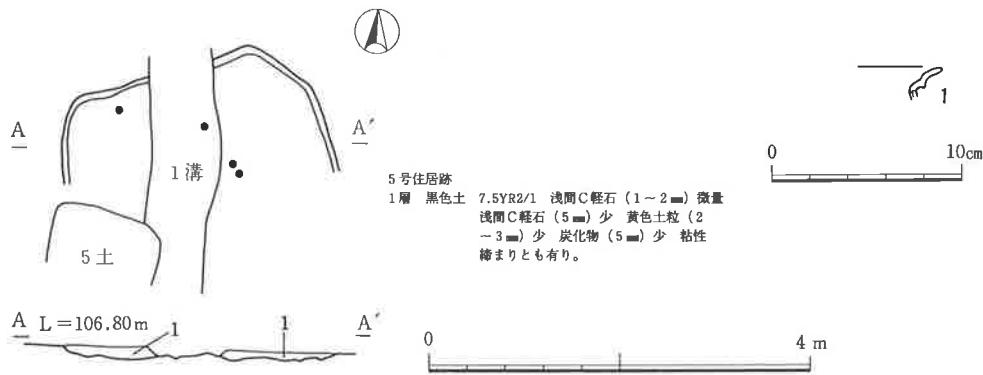
本遺構は、調査区の中央部西寄りに位置する。3号住居跡と重複し、本住居跡が切られている。

本住居跡は、南西隅が検出されたにすぎず、規模は不明、方形基調の平面と考えられる。壁は高さ20cm、ほぼ直立するが、西壁の一部が階段状となる。床面はほぼ平坦で、締まっている。柱穴・周溝は検出されていない。住居跡の西南部より貯蔵穴が検出されている。貯蔵穴は長軸長35cm×短軸長32cmの橢円形を呈し、深さ17cmの鍋底状断面となる。炉址は検出されていない。

遺物は、貯蔵穴内より、土師器が出土している。

表4 4号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	土師器 甕	口 15.4 高 16.4 底 5.2	酸化	黄橙色	砂粒 礫や多	平底。球形の胴部。直線的につながる口縁部。	口縁部横撫で。胴部外側斜位の磨き。胴部内側ヘラ撫で。	焼成後胴部中央に穿孔



第12図 5号居住跡・出土遺物

5号居住跡 (第12図 図版2-5・8)

本遺構は、調査区の中央部に位置する。1号溝と5・6号土坑に切られている。

規模形状は、東西長2.85m×南北長1.50m以上の隅丸の方形を基調とすると考えられる。壁は最も残る部分で高さ7cmである。床面は凸凹が激しく、あるいは掘り方の底面かもしれない。柱穴・周溝・炉址は検出されていない。

遺物は、土師器が出土している。1は覆土より出土している。

表5 5号居住跡出土遺物

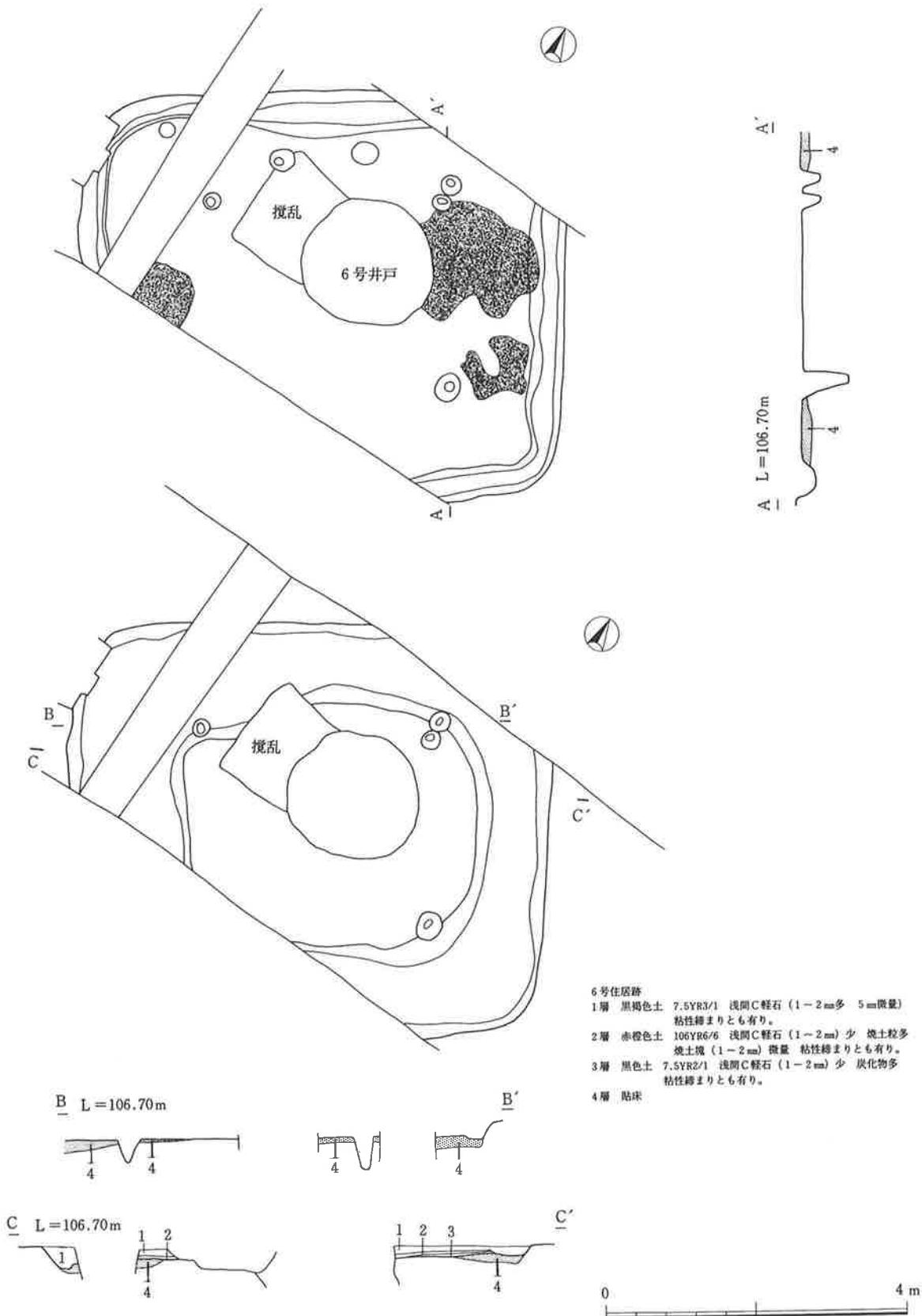
番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	土師器 台付甕	口 高 底	一 一 一	酸化	橙褐色	細砂粒	S字状口縁部	

6号居住跡 (第13図 図版2-6・8)

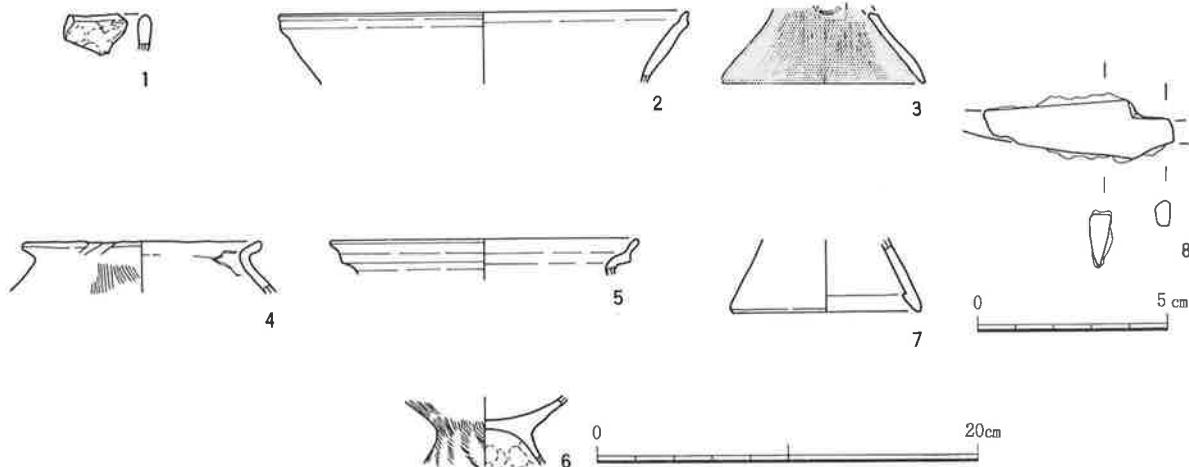
本遺構は、調査区の中央部に位置し、6号井戸と重複する。新旧関係は本遺構が6号井戸よりも古い。

規模形状は長軸長6.50m以上×短軸長5.50mの長方形を呈する。床面はほぼ平坦で、柱穴の外側は貼床となっている。貼床下は幅1~1.60m、深さ20cmの掘り込みが見られる。壁は高さ20cmで、ほぼ直立する。柱穴は南西部が調査区外となるため未検出であるが、4本存在したと考えられる。周溝は南西部と北東部が調査区外となるため不明だが、調査された範囲では全周する。形状は幅10~45cm・深さ7cmのU字状断面となる。炉址は未検出であるが、住居跡西壁際中央部と住居跡東側の柱穴間から東壁にかけて焼土が広範囲に存在している。本住居跡の構築時期は出土土器より古墳時代と思われる。

遺物は、土師器が出土している。4は掘り方より、他は覆土中より出土している。



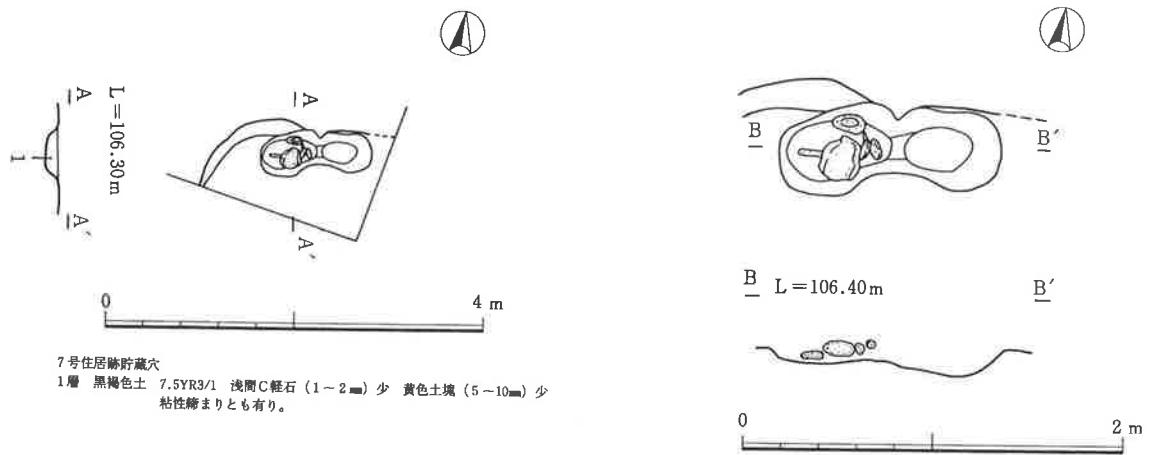
第13図 6号住居跡



第14図 6号住居跡出土遺物

表6 6号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	土師器 手すくね	口 高 底	一 一 一	酸化	黒灰色	細砂粒	口唇部肥厚。	手すくね。
2	土師器 埴	口 高 底	(21.4) 一 一	酸化	橙褐色	砂粒 礫少	口唇部に段を有し大きく開く口縁部。	口縁部横撫で。
3	土師器 器台	口 高 底	一 — (10.7)	酸化	橙褐色	砂粒	直線的に開く脚部。孔を有す。	脚部内外面縦位の磨き。
4	土師器 甕	口 高 底	(12.4) 一 一	酸化	橙褐色	砂粒	短く外傾する口縁部。	口縁部横撫で後、胴部外面にハケ目。胴部内面指撫で。接合痕。 外面胴部上端～口縁部に煤。
5	土師器 台付甕	口 高 底	(16.4) 一 一	酸化	明橙褐色	砂粒	S字状口縁部。	口縁部横撫で。
6	土師器 台付甕	口 高 底	一 一 一	酸化	橙褐色	砂粒	薄い器肉。	脚部外面ハケ目後、一部撫で消し。胴部ハケ目。 脚部内面指おさえ。
7	土師器 台付甕	口 高 底	一 一 (9.8)	酸化	橙褐色	砂粒 礫少	折り返す脚端部。	脚部内外面撫で。
8	刀子	鉄製である。棟間は明確であるが、刃関は不明瞭である。小型で、鋒と茎端部を欠損する。						



第15図 7号住居跡

7号住居跡（第15図 図版2-7）

本遺構は、調査区の中央部に位置する。周囲は搅乱が激しく、また住居跡の大部分が調査区外となるため北西隅を検出したにすぎない。

規模形状は、不明だが隅丸方形基調と思われる。床面はほぼ平坦である。柱穴・周溝は検出されていない。北西隅には貯蔵穴が存在する。貯蔵穴は長軸長120cm×短軸長45cmの瓢形を呈し、深さが10~15cmとなる。貯蔵穴の西部には集石が認められる。本住居跡の構築時期は、出土土器より古墳時代と思われる。

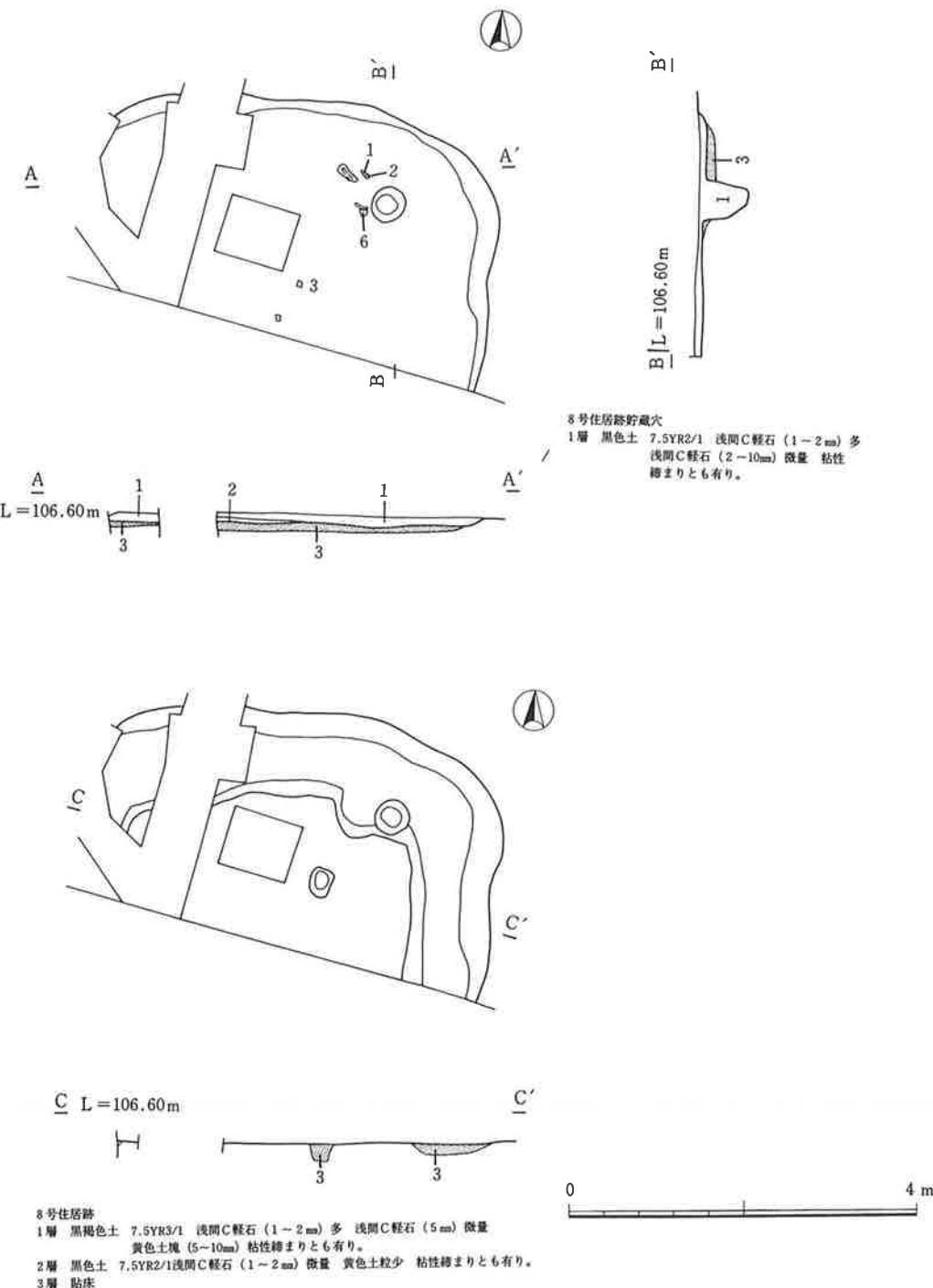
遺物は、土師器細片が出土しているにすぎない。

8号住居跡（第16・17図 図版2-8・8）

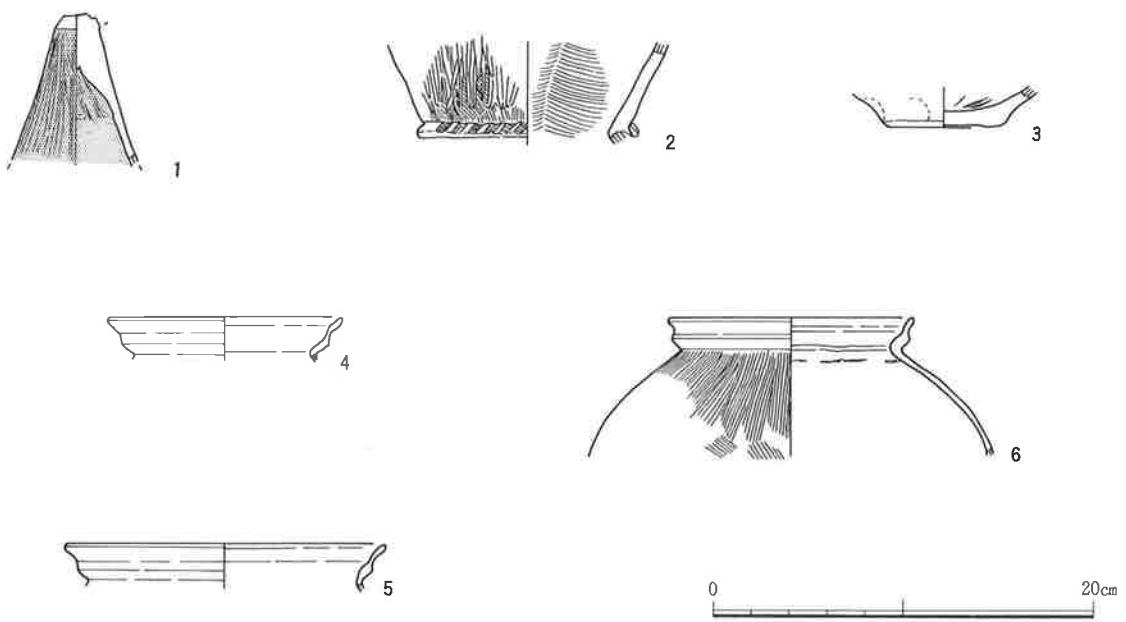
本遺構は、調査区の中央部東寄りに位置する。

規模形状は南部が調査区外となり、西部が搅乱により削平されているため不明だが、東西長4.50m以上×南北長3.00m以上の隅丸方形の基調と考えられる。床面はほぼ平坦で、壁際に幅60~120cmの範囲で貼床が認められる。貼床下には壁際に沿って幅60~120cm、深さ15cmの溝状の掘り込みとなっている。壁は高さ10cmで、やや傾斜して立ち上がる。柱穴は北東部より1本が検出されているが、北西・南西・南東の柱は搅乱の存在等により不明である。周溝・炉址は検出されていない。本住居跡の構築時期は出土土器より古墳時代と思われる。

遺物は、土師器が覆土中より出土している。



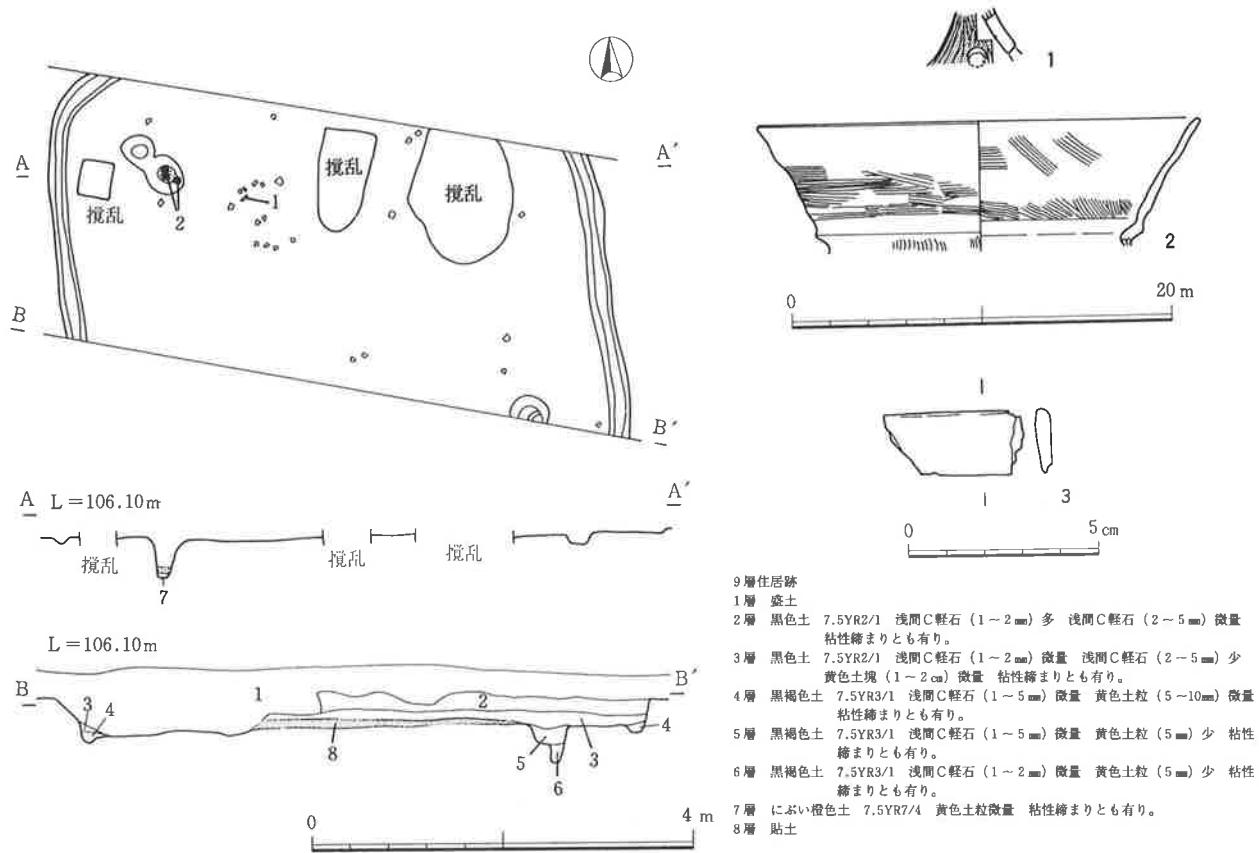
第16図 8号住居跡



第17図 8号住居跡出土遺物

表7 8号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	土師器 高 壕	口 高 底	一 一 一	酸化	赤褐色	細砂粒	直線的に開く細い脚部。	脚部外面縦位の磨き。脚部内面絞り込み後撫で。
2	土師器 壺	口 高 底	一 一 一	酸化	暗橙褐色	砂粒 礫少 雲母	頸部に突帶。	口縁部外面斜位のハケ目後、縦位の磨き。突帶に櫛の刺突。口縁部内面横位のハケ目。
3	土師器 甕	口 高 底	一 一 5.6	酸化	橙褐色	砂粒	突出する平底。	胴部内面ヘラ撫で。
4	土師器 台付甕	口 高 底	(12.4) 一 一	酸化	黄橙褐色	砂粒	S字状口縁部。	口縁部横撫で。
5	土師器 台付甕	口 高 底	(17.0) 一 一	酸化	暗橙褐色	砂粒	S字状口縁部。	口縁部横撫で。
6	土師器 台付甕	口 高 底	(13.0) 一 一	酸化	橙褐色	砂粒	S字状口縁部。	口縁部横撫で。胴部外面ハケ目。



第18図 9号住居跡・出土遺物

9号住居跡（第18図 図版3-1・8）

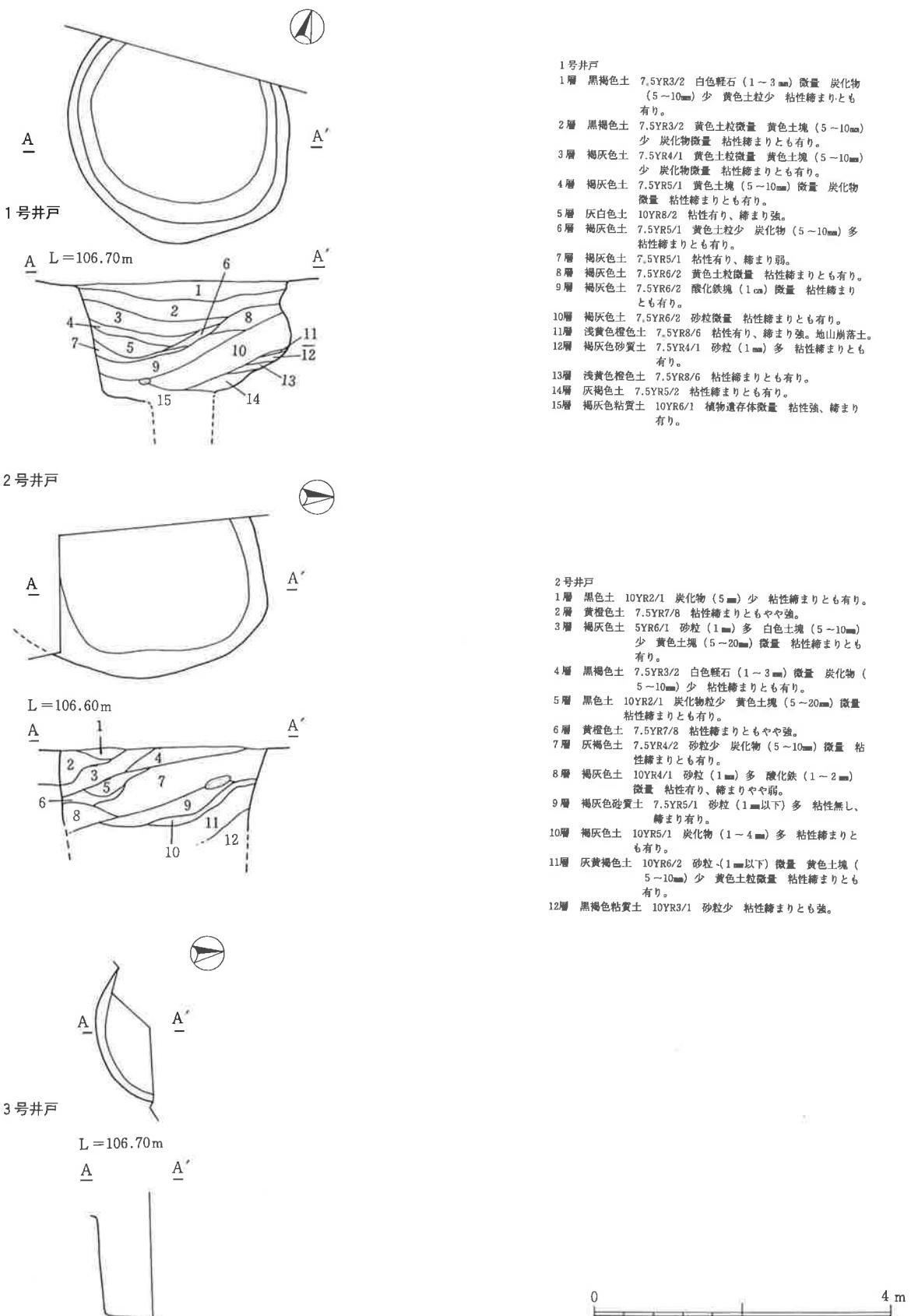
本遺構は、調査区の東部に位置する。

規模形状は、南部と北部が調査区外となるため不明な点が多いが、長軸長5.78m×短軸長5.00m以上の隅丸方形を基調とする。壁は高さ20cmではほぼ直立する。床面はほぼ平坦で、薄く全体に貼床が認められる。柱穴は北西部と南東部に各1本検出され、調査区外の北東部と南西部にも各1本存在すると予想される。周溝は調査された範囲では全周し、幅20cm・深さ15cmのU字状断面を呈する。炉址は未検出である。本住居跡の構築時期は出土土器より古墳時代と思われる。

遺物は、土師器が出土している。1・3は覆土中、2は北西部の柱穴より出土している。

表8 9号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	土師器 器台	口一 高底一	酸化	赤褐色	砂粒	孔を有す脚部。	脚部外面縦位の磨き。 脚部内面後撫で。	
2	土師器 壺	口(23.2) 高一 底一	酸化	暗橙褐色	砂粒 礫少 雲母		口縁部内外面ハケ目 後、横撫で。	
3	鉄器	不明鉄器。幅1.6cmの板状を呈する。両端部および表裏剥落している。						



第19図 1～3号井戸

1号井戸（第19図 図版3-2・9）

本遺構は、調査区の東部に位置し、北部が調査区外となる。

形状は、上下二段となり、上段が上場径3m×下場径2.35m×深さ1.64mの円筒形を呈し、下段は上段の底面の中央に径0.90mの円筒形に掘り込まれているが、深さは湧水等により調査不能であったため不明である。本井戸は遺物より近世以降と考えられる。

遺物は、陶磁器類と土師器が出土している。

2号井戸（第19図 図版3-3・9）

本遺構は、調査区の東部に位置し、西部が攪乱により削平されている。

形状は、西部が攪乱のため不明な点が多いが、上場径3.30m以上の円筒形が考えられ、深さは湧水等により調査不能であったため不明である。本井戸は遺物より近世以降と考えられる。

遺物は、陶磁器類と土師器が出土している。

3号井戸（第19図 図版3-4）

本遺構は、調査区の東端に位置し、攪乱により削平されているため南部1/3が検出されたにすぎない。

形状は、攪乱のため不明な点が多いが、上場径2.00m以上の円筒形が考えられ、深さは湧水等により調査不能であったため不明である。本井戸は遺物より近代以降と考えられる。

遺物は、陶磁器類と土師器が出土している。

4号井戸（第20図 図版3-5・9）

本遺構は、調査区の東部に位置し、北部が調査区外に、西部が5号井戸に切られる。

形状は、不明な点が多いが、東西長3.50m×南北長が2.00m以上の不整形を呈し、深さは湧水等により調査不能であったため不明である。本井戸は遺物より近代以降と考えられる。

遺物は、陶磁器類と土師器が出土している。

5号井戸（第20図 図版3-5）

本遺構は、調査区の東部に位置し、北部が調査区外に、西部が4号井戸を切る。

形状は、上場が長軸長2.20m×短軸長1.00m以上の楕円形を呈するが、東壁が崩壊したための形状と思われ下場が径1.15mの円形を呈することより本来は円筒形をしていたと考えられる。深さは湧水などにより調査不能であったため不明である。本井戸は遺物より近代以降と考えられる。

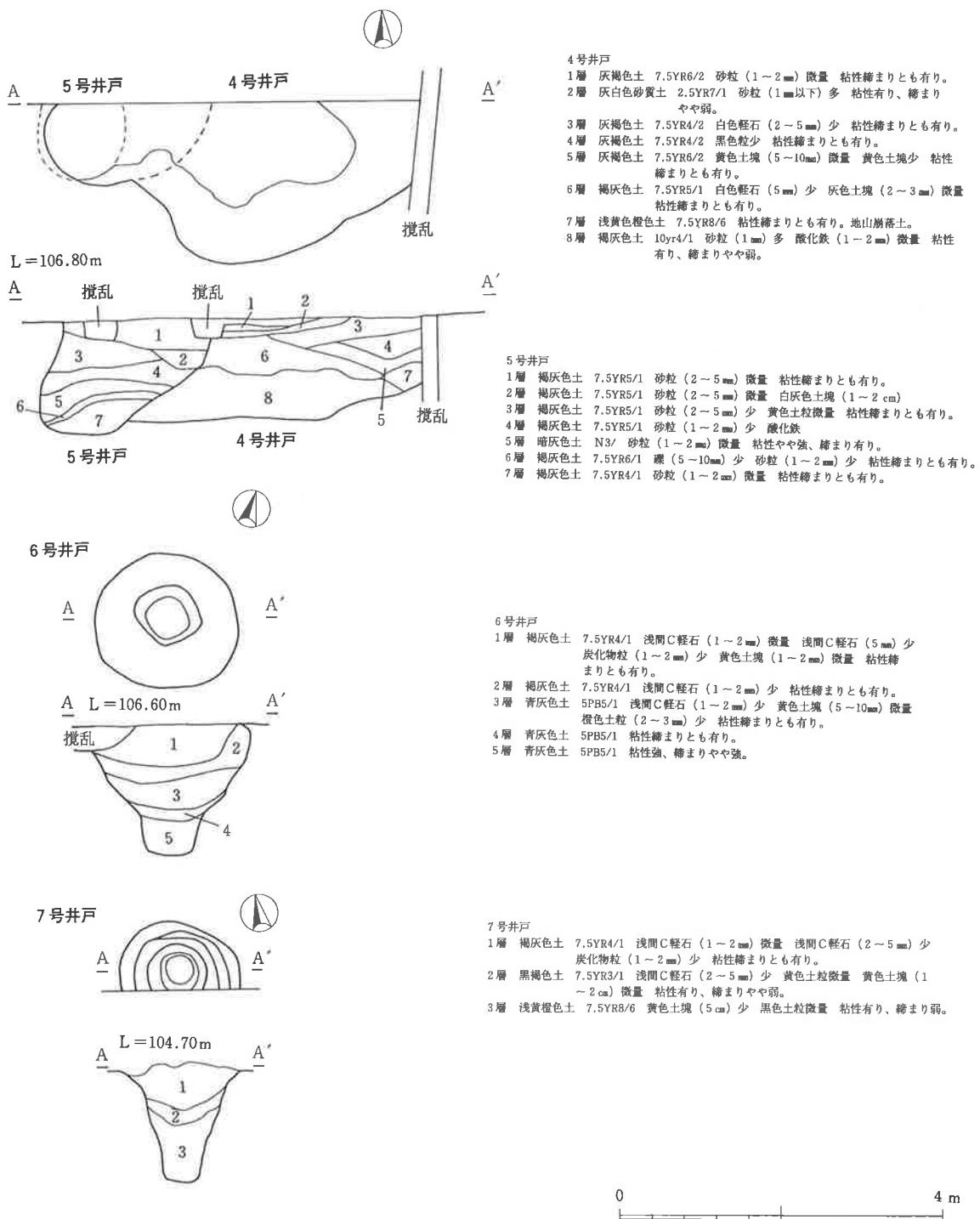
遺物は、出土していない。

6号井戸（第20図 図版3-6）

本遺構は、調査区の中央部に位置し、6号住居跡を切っている。

形状は、上場が径3.43mの円形、下場が長軸長1.05m×0.99mの方形を呈し、断面形は深さ1.63mの漏斗状となる。本井戸は遺物より平安時代と考えられる。

遺物は、土師器が出土している。



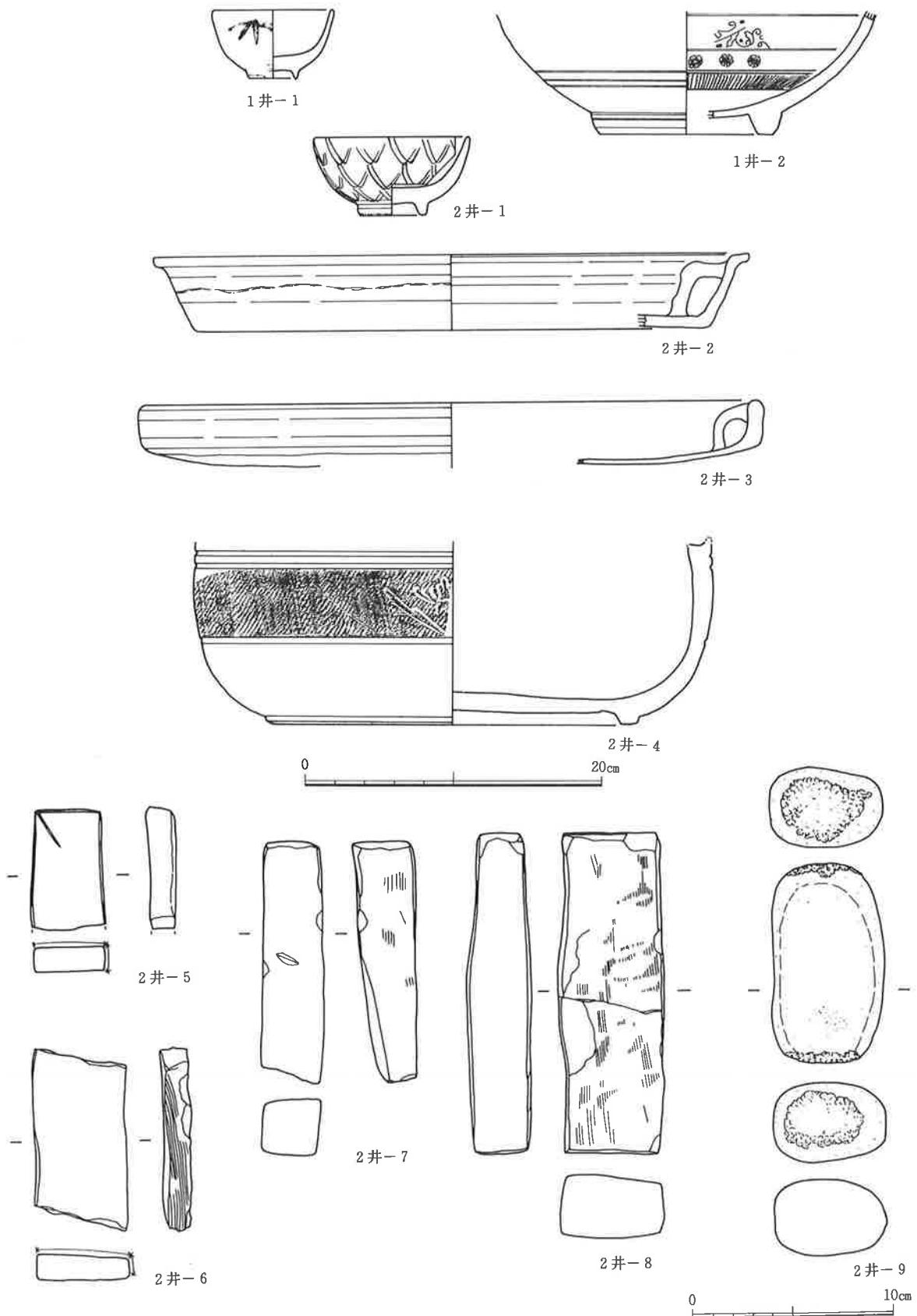
第20図 4～7号井戸

7号井戸（第20図 図版3-7・9）

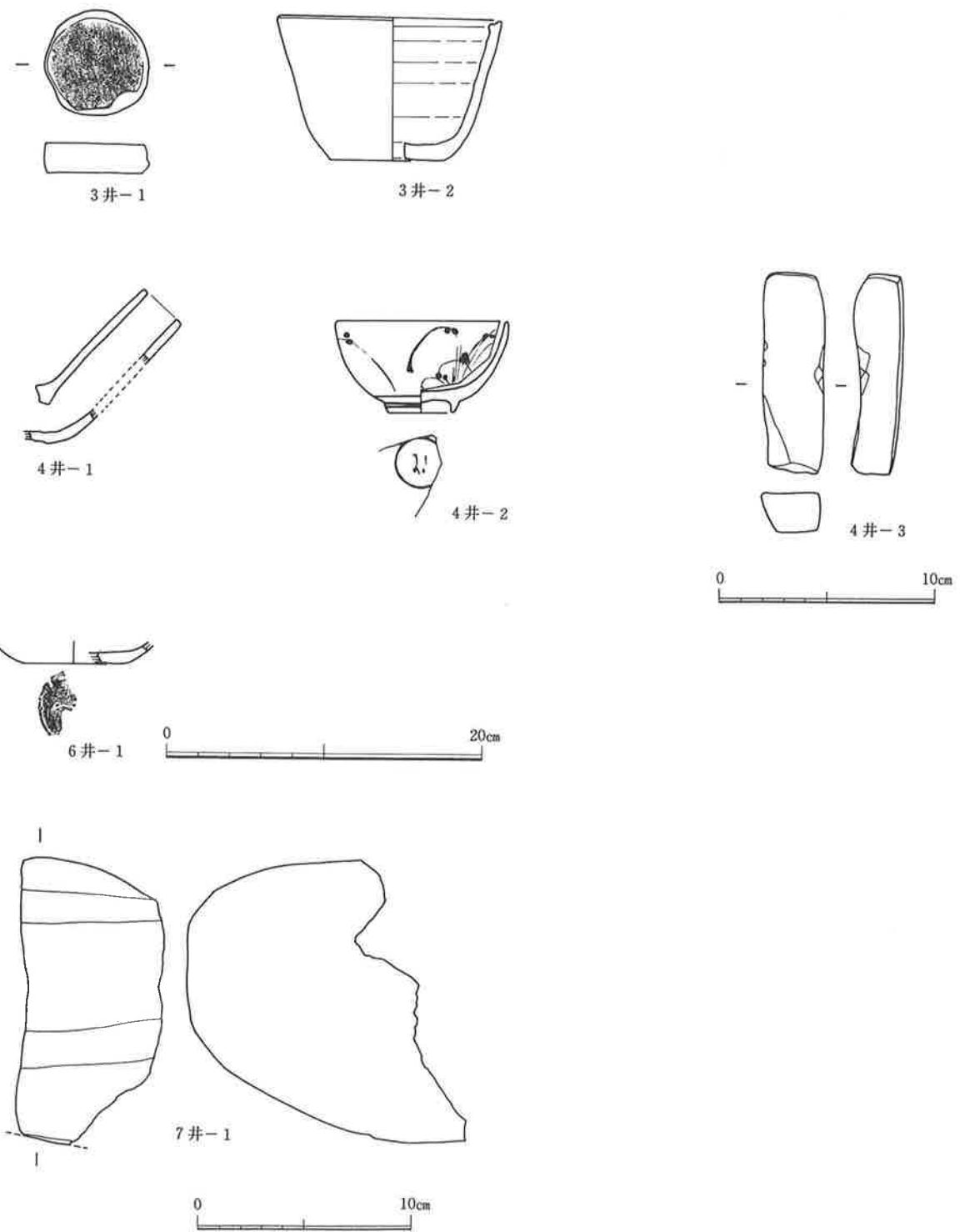
本遺構は、調査区の中央部に位置し、南部は調査区外となる。

形状は、上場径1.48m×下場径0.60m×深さ1.40mの載頭円錐形を呈する。本井戸は時期不明である。

遺物は、土師器が出土している。



第21図 井戸出土遺物（1）



第22図 井戸出土遺物（2）

表9 1号井戸出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	特徴	備考
1	磁器 碗	口 (8.2) 高 — 底 (3.2)	還元	白色地	黒色粒多	丸腕。豊付露胎。笹の染付。	
2	陶器 鉢	口 — 高 — 底 (11.7)	酸化	暗橙褐色	砂粒 礫少 雲母	三島手の文様。	

表10 2号井戸出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	特徴	備考
1	染付 碗	口 10.6 高 5.2 底 4.4	還元	灰白色地	黒色粒微量	丸碗。二重網目文の染付。	
2	内耳鍋	口 (40.2) 高 5.0 底 (34.8)	酸化	橙褐色	砂粒多	平底。水平に屈折する口縁部。体部外面に粘土接合痕。	口縁部～ 体部内外面に煤。
3	内耳鍋	口 (41.4) 高 — 底 (41.6)	酸化	赤橙褐色	砂粒	丸底状。丸い口唇部。	
4	火鉢	口 — 高 — 底 (25)	還元	灰色	砂粒 礫	高台を持つ底部。片切彫りの菊文。	
5	砥石	刃痕。					
6	砥石	側面1面・裏面に鋸刃痕。					
7	砥石	側面3面に鋸刃痕。					
8	砥石	表裏面・側面3面に鋸刃痕。側面1面が研ぎべり。					
9	叩石	両端部に打痕。繩文。					

表11 3号井戸出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	特徴	備考
1	円盤	径 6.6	還元	灰色	砂粒	瓦片を円形に打ち欠き整形している。	
2	植木鉢	口 14.2 高 8.9 底 7.4	還元	灰色	砂粒	小孔を有す平底。	

表12 4号井戸出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	特徴	備考
1	水差し?	口 — 高 — 底 —	酸化	淡赤褐色	砂粒	注口をもつ浅い器。	
2	磁器 碗	口 (11.0) 高 5.8 底 (4.3)	還元	白色地	黒色粒少	草木の染付。	
3	砥石	岩製。表裏面が研ぎべり。					

表13 6号井戸出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成整形の特徴	備考
1	土師器 壺	口 — 高 — 底 6.0	酸化	淡黄褐色	砂粒	開く体部。	回転糸切り無調整。	

表14 7号井戸出土遺物

1	摩石	自然石の側面に摩耗痕あり。
---	----	---------------

1号土坑（第23図 図版4-1）

本遺構は、調査区の東部に位置し、東側を搅乱により削平される。

形状は、不明な点が多いが、長軸長1.05m×短軸長0.85mの楕円形を呈し、深さが40cmのU字状断面となる。本土坑の構築時期は不明である。

遺物は、出土していない。

2号土坑（第23図 図版4-2・9）

本遺構は、調査区の東部に位置する。

形状は、長軸長1.20m×短軸長1.17mの不整方形を呈し、深さが27cmの鍋底状断面となる。本土坑の構築時期は出土遺物より近世以降の所産と思われる。

遺物は、陶磁器と土師器が出土している。

3号土坑（第23図 図版4-3）

本遺構は、調査区の東部に位置し、南部を搅乱により削平される。

形状は、不明な点が多いが、南北長0.95m×東西長1.10mの楕円形を呈すると思われ、深さが20cmの鍋底状断面となる。本土坑の構築時期は不明である。

遺物は土師器の細片が僅かに出土している。

4号土坑（第23図 図版4-4）

本遺構は、調査区の中央部東寄りに位置する。

形状は、長軸長0.95m×短軸長0.85mのほぼ円形を呈し、深さが16cmの皿状断面となる。本土坑の構築時期は不明である。

遺物は、土師器の細片が僅かに出土している。

5号土坑（第23図）

本遺構は、調査区の中央部東寄りに位置し、南部が調査区外となる。

形状は、不明な点が多いが、南北長1.17m×東西長1.20mのほぼ楕円形を呈し、深さが100cmの鍋底状断面となる。本土坑の構築時期は不明である。

遺物は、出土していない。

6号土坑（第23図 図版4-5）

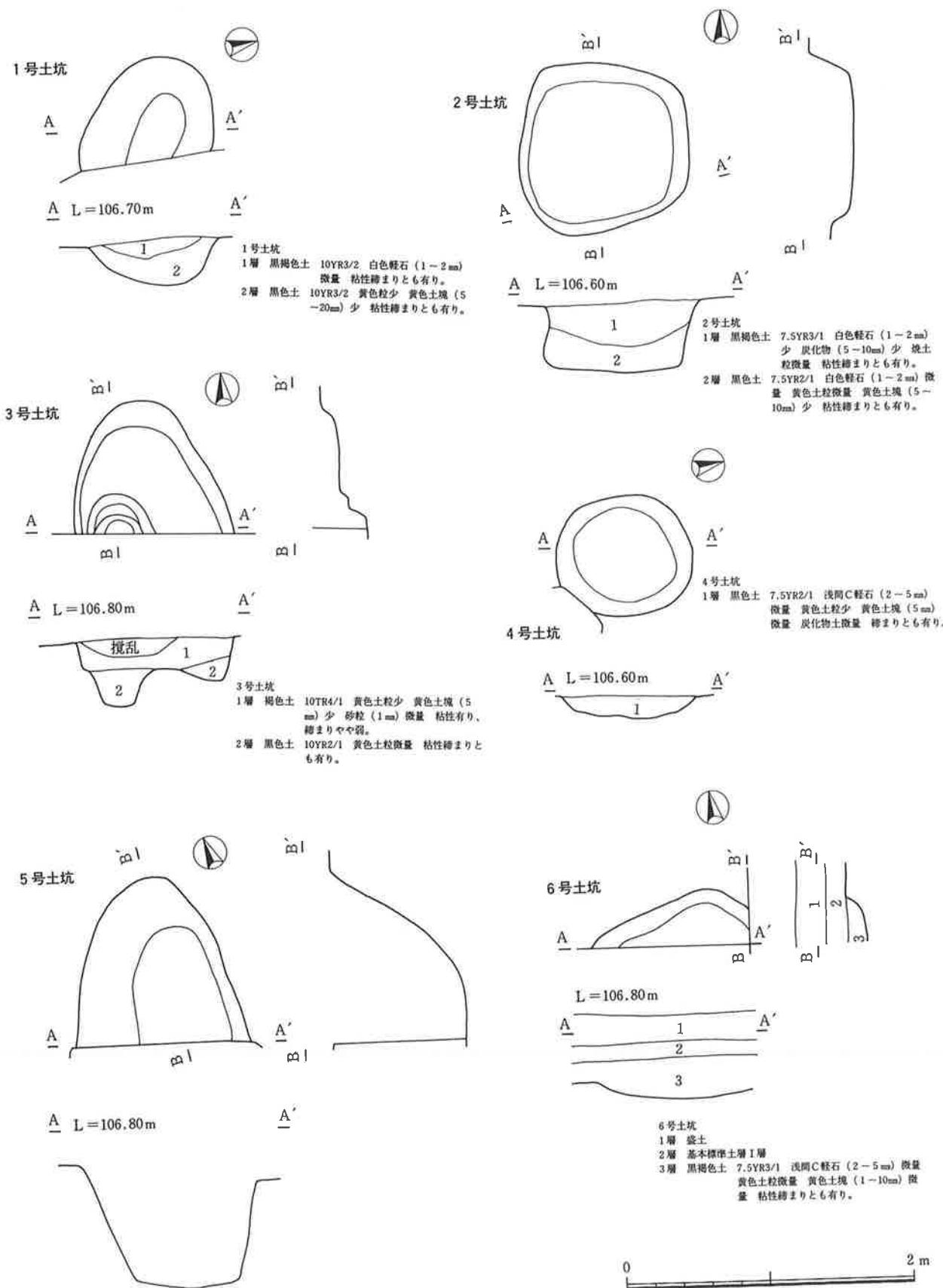
本遺構は、調査区の中央部東寄りに位置し、南部が調査区外となる。

形状は、僅かな部分の調査のため不明である。断面形状は深さ12cmの皿状となる。本土坑の構築時期は不明である。

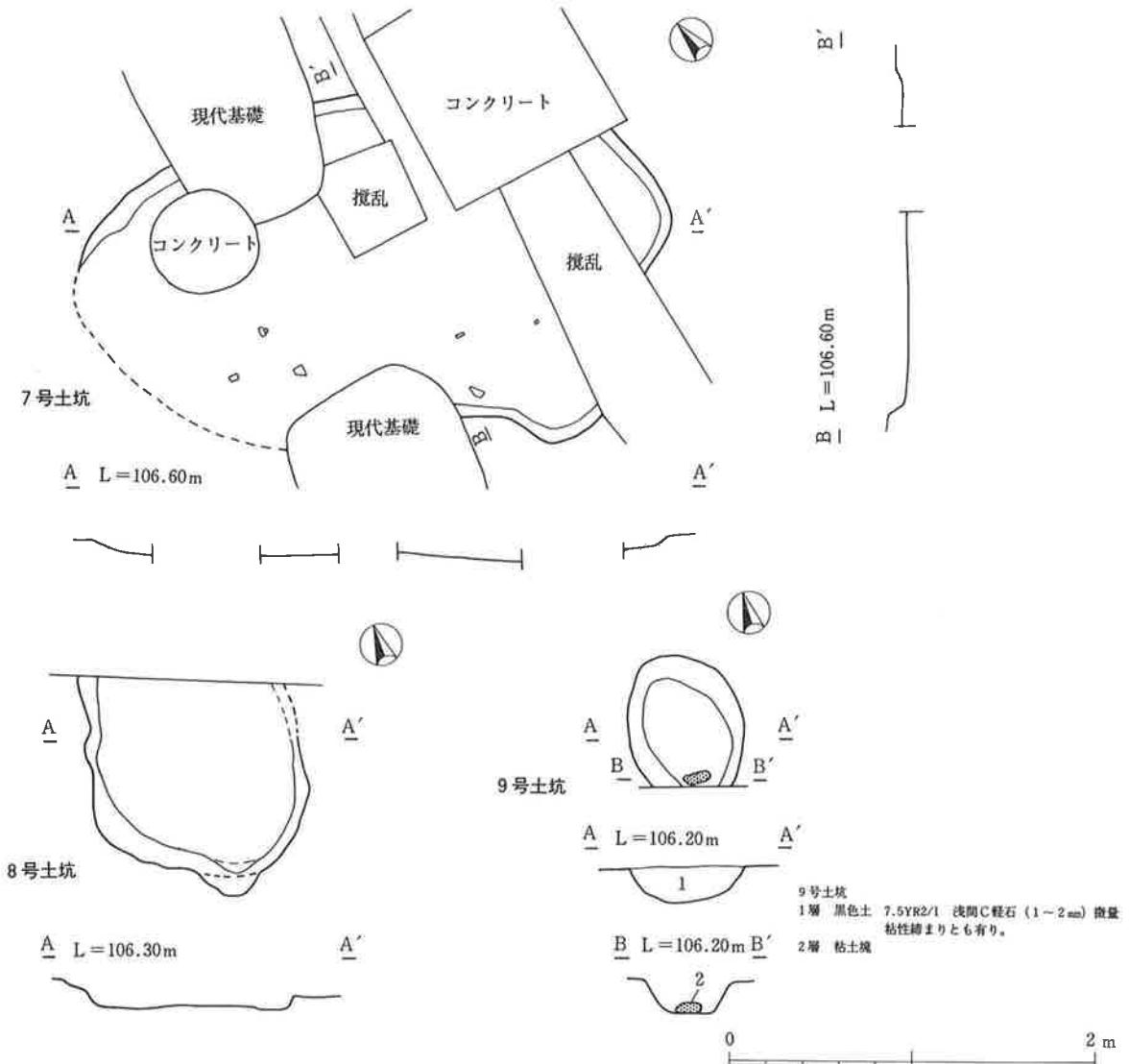
遺物は、出土していない。

7号土坑（第24図 図版4-6）

本遺構は、調査区の中央部に位置する。



第23図 土坑 (1)



第24図 土坑(2)

形状は、長軸長3.27m×短軸長1.80mの不整形を呈し、深さ10cmの皿状断面となる。本土坑は時期不明である。

遺物は、土師器が出土している。

8号土坑（第24図 図版4-7）

本遺構は、調査区の西部に位置し、北部が調査区外となる。

形状は、不明な点が多いが、南北長1.22m以上×東西長1.10mの楕円形を呈すると思われ、深さ10cmの鍋底状断面となる。本土坑は時期不明である。

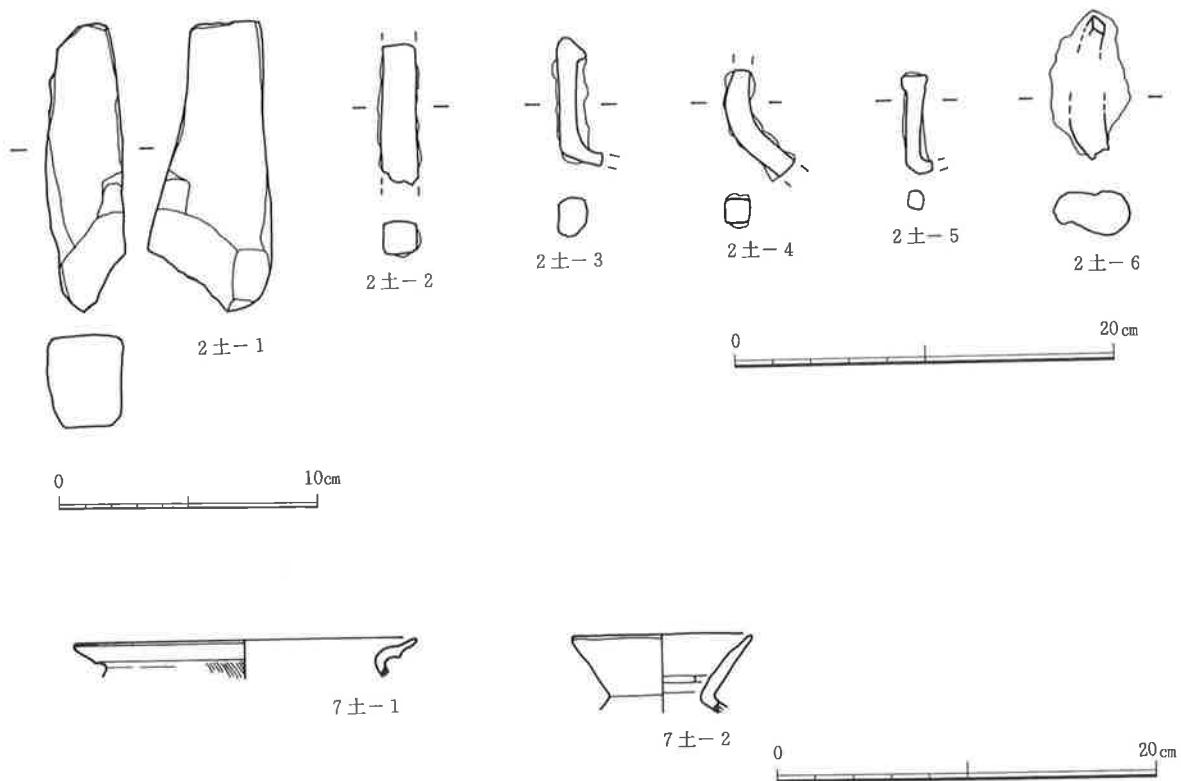
遺物は、土師器の細片が僅かに出土しているにすぎない。

9号土坑（第24図 図版4-8）

本遺構は、調査区の東部に位置し、北部が調査区外となる。

平面形状は、不明であるが、長軸長0.73m×短軸長0.64mの楕円形を呈し、深さ29cmの鍋底状となる。本土坑は時期不明である。

遺物は、出土していない。



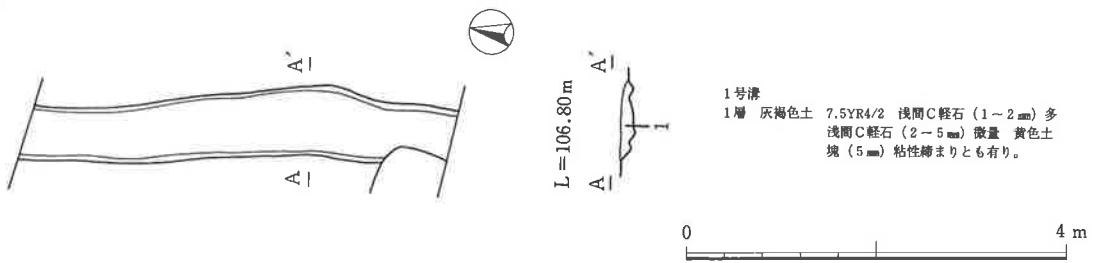
第25図 土坑出土遺物

表15 2号土坑出土遺物

番号	器種	特徴
1	砥石	凝灰岩製。表裏面が研ぎベリ。側面欠損。
2	鉄釘	上下両端を欠損する。方形断面。
3	鉄釘	先端が欠損する。方形断面。L字形に折り曲げられている。頭部は逆L字形に折り曲げられているらしい。
4	鉄釘	上下両端を欠損する。方形断面。L字形に折り曲げられている。
5	鉄釘	上下両端を欠損する。方形断面。先端が欠損する。方形断面。L字形に折り曲げられている。頭部は三角形。
6	鉄釘	上下両端を欠損する。方形断面。鋸のため形状不明。

表16 7号土坑出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	土師器 台付壺	口 (17.8) 高 - 底 -	酸化	明澄褐色	砂粒 礫少	S字状口縁部。	口縁部横撫で。胴部外 面ハケ目。	
2	土師器 壺	口 (9.2) 高 - 底 -	酸化	赤褐色	砂粒多 礫	外傾する口縁部。	口縁部内横撫で。	



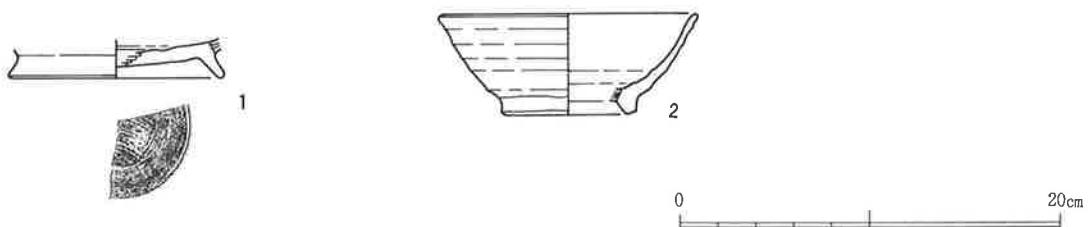
第26図 1号溝

1号溝 (第26図 図版3-8)

本遺構は、調査区中央部のやや西寄りに位置し、1・2号住居跡を切る。

規模形状は、幅44cm×深さ5cmの皿状断面を有し、ほぼ南北方向に走行しているが、その長さは本溝の南北両端が調査区外に延びるため不明である。所産時期は不明である。

遺物は、出土していない。



第27図 表採遺物

表17 表採遺物 (図版10)

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	須恵器 高台付 壺	口 高 底 (11.2)	還元	灰色	砂粒 礫少 黒色粒	高い高台	回転糸切り。	
2	須恵器 高台付 壺	口 (13.6) 高 底 (7.1)	還元	灰色	砂粒・礫多 白色針状物質	外反する口縁部。	ロクロ調整	

4まとめ

石倉下宅地遺跡では、当初の予想よりも遺構数が多く、中でも古墳時代前期の竪穴住居跡は調査区のほぼ全域にわたり存在し、特に調査区中央部においては密集して検出されている。この状況より本遺跡には同時期の比較的大きな集落が展開していたと推定され、本遺跡周辺に本時期の集落が数多く存在していた可能性を予想させる。

VII 紅雲村東遺跡

1 概要

今回の発掘調査では、平安時代の住居跡・水田址、中世の土坑・溝・ピット、時期不明の土坑が検出されている。平安時代の住居跡は調査区の西端より、水田址は調査区の東半部に存在する。中世の土坑、ピットは調査区の西半部に存在し、溝は調査区の中央部と東端部に存在する。この他に時期不明の土坑は調査区の西半部に分布する。

2 基本堆積土層

今回の調査では、調査区内の基本堆積土層を I ~ XIIIまで確認している。X層上面が遺構確認面となる。

- I層 灰褐色土 7.5YR4/2 白色粒少。炭（5~10mm）少量。粘性・締まりともに有り。
II層 灰褐色土 7.5YR4/2 白色軽石（1~2mm）微量。粘性・締まり
III層 灰褐色土 7.5YR4/2 白色軽石（1~2mm）多量。白色軽石（1~2mm）微量。粘性・締まりともに有り。
IV層 褐灰色土 4.5YR4/1 白色軽石（1~2mm）少量。酸化鉄（2~3mm）微量。粘性・締まりともに有り。
V層 褐灰色土 7.5YR4/1 白色軽石（1~2mm）微量。酸化鉄（2~3mm）多量。粘性・締まりともに有り。
VI層 灰色砂質土 N/6 浅間B軽石（1mm以下）多量。青灰色土塊（1~2cm）多量。粘性弱く、締まり有り。

VII層 灰色砂質土 N/6 浅間B軽石赤色灰層塊（1~5cm）
多量。浅間B軽石（1~2mm）少量。粘性弱く、締まり有り。

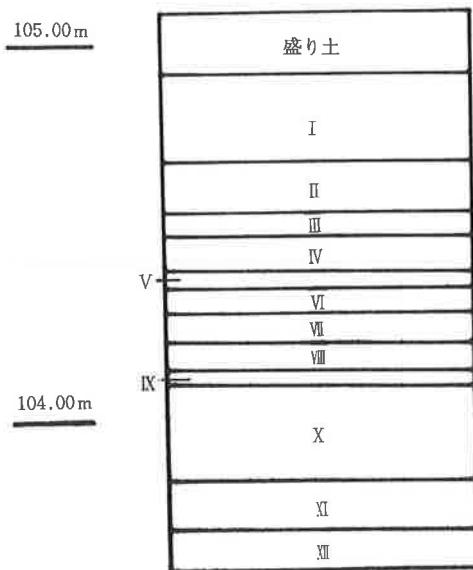
VIII層 灰色砂質土 N/6 浅間B軽石（1~2mm）多量。浅間
B軽石（2~3mm）少量。粘性弱く、締まり有り。

IX層 黒褐色土 5YR2/2 粘性・締まりともに強。水田耕作
土。

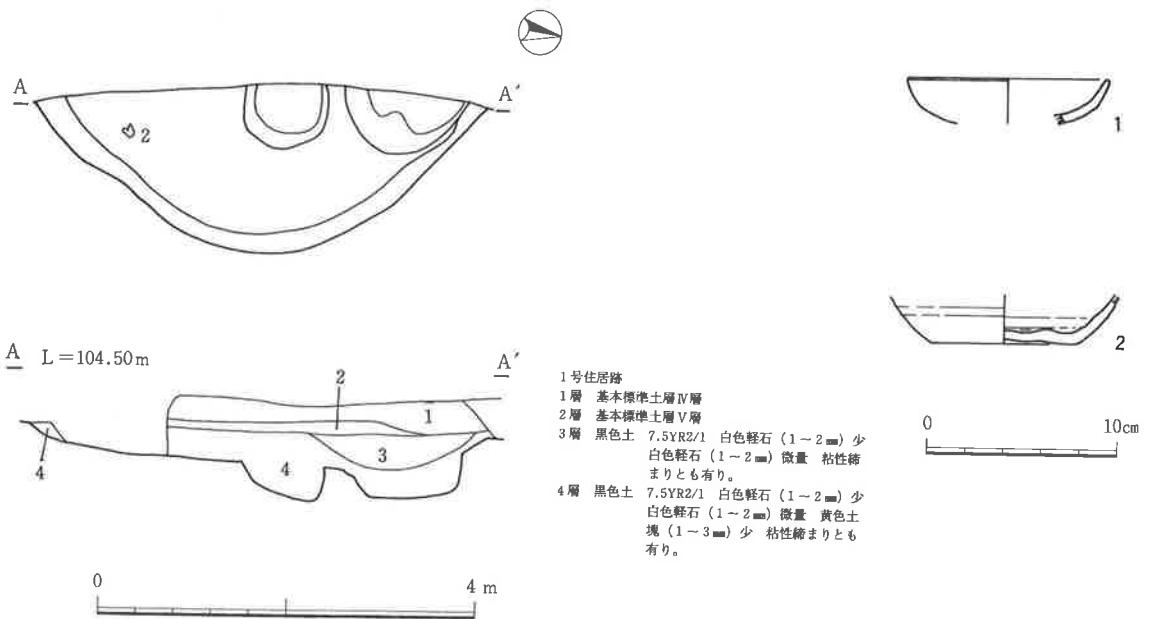
X層 褐灰色粘質土 10YR5/1 浅間C軽石（1~5mm）微
量。炭（2~5mm）少量。
粘性・締まりともに強。

XI層 灰色砂質土 N/6 灰色砂（1mm）多量。粘性弱く、締
まり有り。

XII層 褐灰色粘質土 10YR5/1 粘性・締まりともに強。



第28図 基本堆積土層図



第29図 1号住居跡・出土遺物

3 遺構・遺物

1号住居跡 (第29図 図版6-1・10)

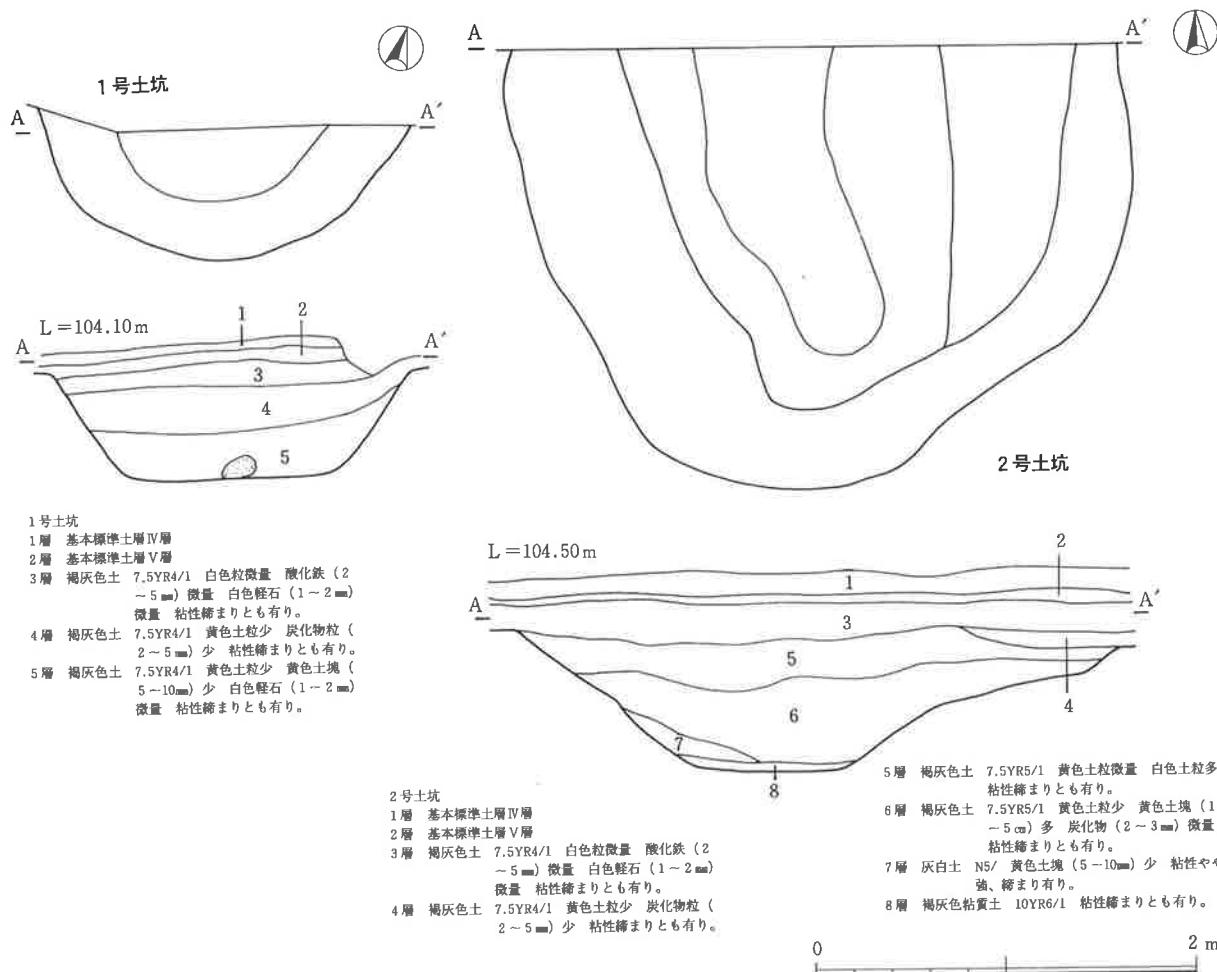
本住居跡は、調査区の西端に位置し、住居跡西部は調査区外となる。

形状は、住居跡南東隅が検出されただけのため規模は不明だが、隅丸の方形を基調とすると考えられる。床面はほぼ平坦である。壁は高さ22cmで、傾斜して立ち上がる。柱穴・周溝・炉は検出されていない。住居跡の北壁に接し1基と住居中央に1基の性格不明の土坑が存在する。北壁に接する土坑は土坑の北側が調査区外となるため不明な点があるが、径130cmの円形を呈すると思われ、深さ40cmの鍋底状となる。中央の土坑は径94cmの円形を呈すると思われ、深さ35cmの鍋底状となる。本住居跡は平安時代の所産である。

遺物は、須恵器・土師器が出土している。

表18 1号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	土師器 壺	口 (10.6) 高 (2.3) 底 -	酸化	明赤褐色	砂粒 礫	外反気味の口縁部。	口縁部横撫で。胴部外 面削り。	
2	須恵器 壺	口 - 高 (2.6) 底 (7.5)	還元	灰色	砂粒 礫 黒色粒	丸みをもつ体部	回転ヘラ切り。	



第30図 土坑 (1)

1号土坑 (第30図 図版6-2)

本遺構は、調査区の東部に位置し、土坑の北側は調査区外となる。

形状は、未調査部分があるため不明な点多いが、円形を呈すると思われ、深さが60cmの鍋底状断面となる。本土坑は時期不明である。

遺物は、土師器が僅かに出土している。

2号土坑 (第30図 図版6-3)

本遺構は、調査区の東部に位置し、2号溝を切っている。

形状は、南北長2.35m以上×東西長3.25mの不整形を呈し、深さ75cmの鉢底状断面となる。本土坑は時期不明である。

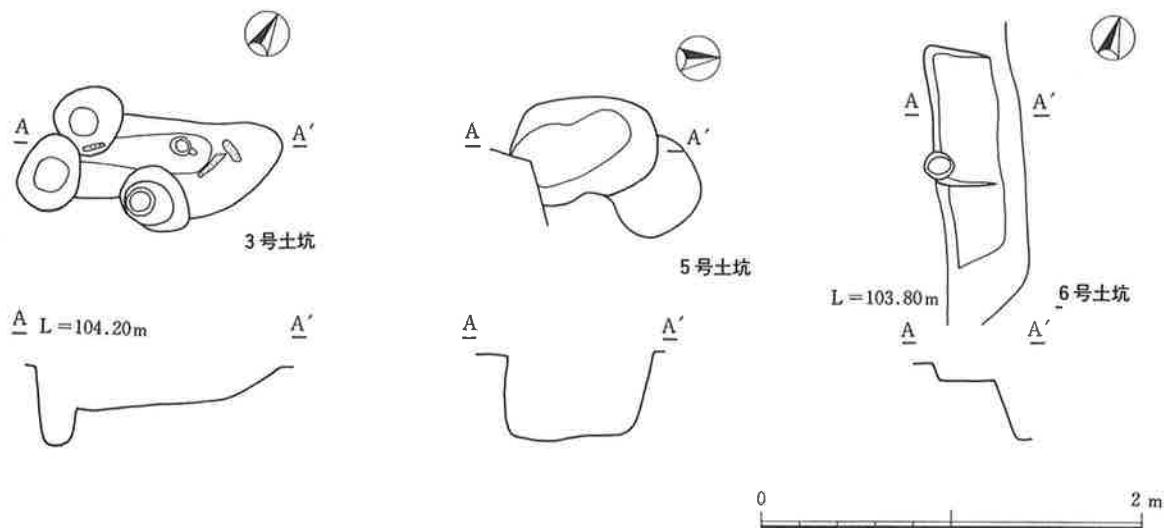
遺物は、土師器が出土している。

3号土坑 (第31図 図版6-4・10)

本遺構は、調査区の東部に位置し、ピット群を切っている。

形状は、長軸長1.35m×短軸長0.52mの不整形を呈し、深さ22cmの鍋底状断面となる。本土坑は中世の所産と考えられる。

遺物は、かわらけが出土している。



第31図 土坑（2）

4号土坑 欠番

5号土坑（第31図 図版6-5）

本遺構は、調査区の東部に位置し、南端が調査区外となる。

形状は、長軸長0.65m以上×短軸長0.55mの不整の橢円形を呈し、深さ42cmの鍋底状断面となる。本土坑は時期不明である。

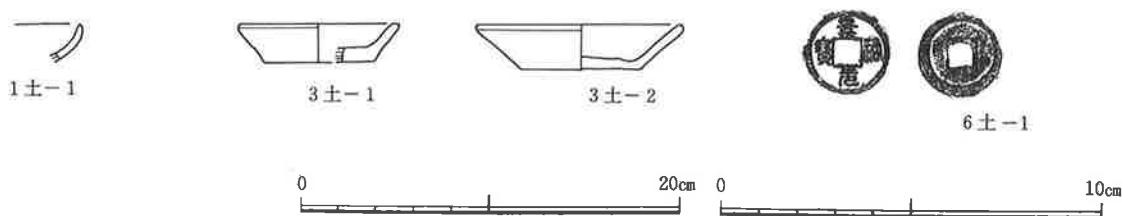
遺物は、出土していない。

6号土坑（第31図 図版6-6・10）

本遺構は、調査区の中央部に位置し、6号溝の中に存在するが、両者の新旧関係は不明である。

平面形状は、東側が確認できなかったため不明な点があるが、南北長0.72m×短軸長0.34m以上の方形もしくは長方形を呈すると思われ、断面形状は深さ26cmの箱状となる。本土坑は中世の所産と思われる。

遺物は、古錢が出土している。



第32図 土坑出土遺物

表19 1号土坑出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	土師器 壺	口 高 底	一 一 一	酸化 明赤褐色	砂粒 礫	内湾する口縁部。	口縁部横撫で。胴部外 面削り。	

表20 3号土坑出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	かわらけ 壺	口 高 底	(8.4) 2.1 (5.8)	酸化 明赤褐色	砂粒 礫 赤色酸化物	浅く、小型。	ロクロ調整。回転糸切 り。	
2	かわらけ 壺	口 高 底	10.8 2.4 6.3	酸化 明橙色	砂粒 礫 赤色酸化物	外反する口縁部。	ロクロ調整。回転糸切 り。	

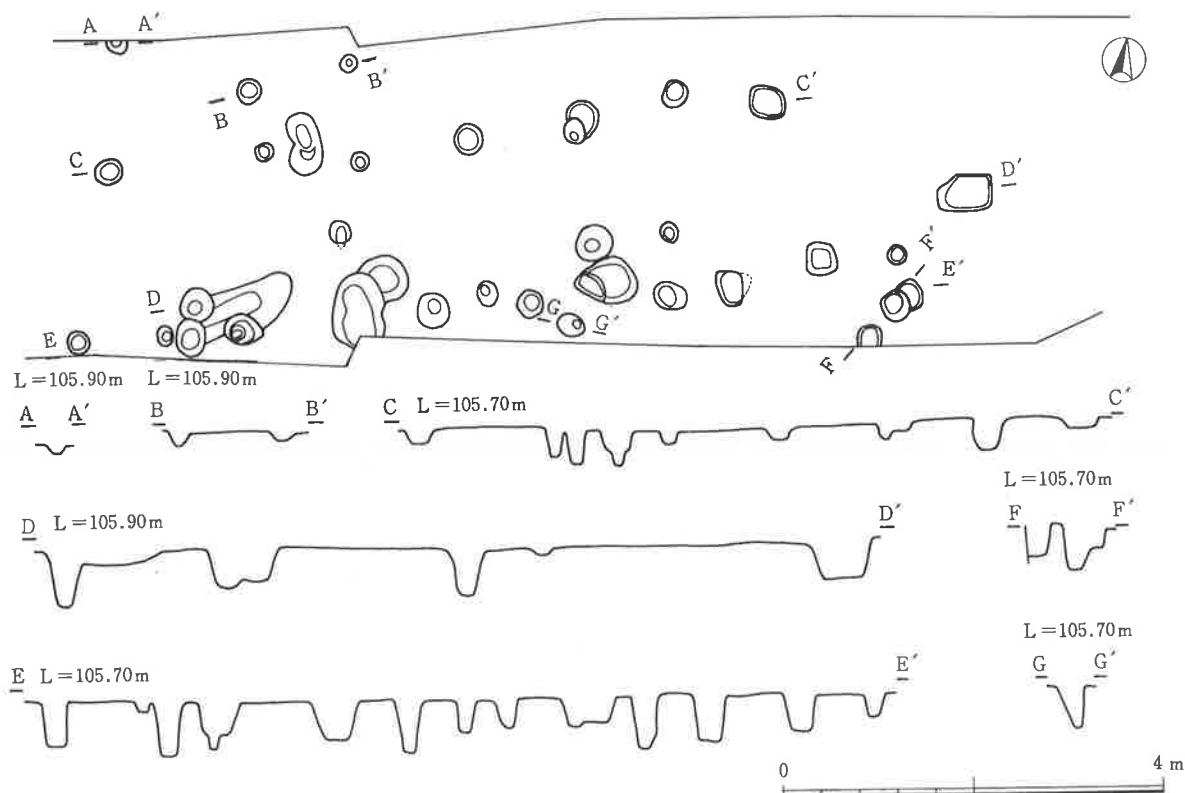
表21 6号土坑出土遺物

番号	器種	特徴
1	古銭	景元通寶。

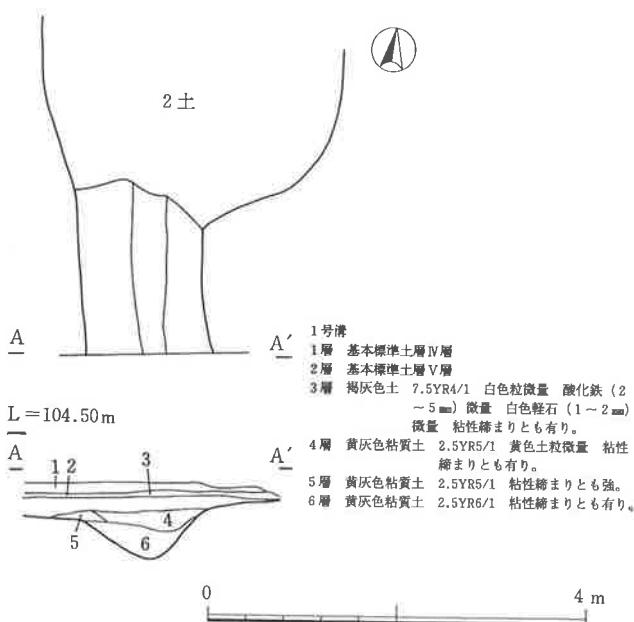
ピット群（第33図 図版6-7・8）

本ピット群は、調査区の東部に位置する。ピット群には3・5号土坑が存在するが、いずれもピット群よりも新しくなる。

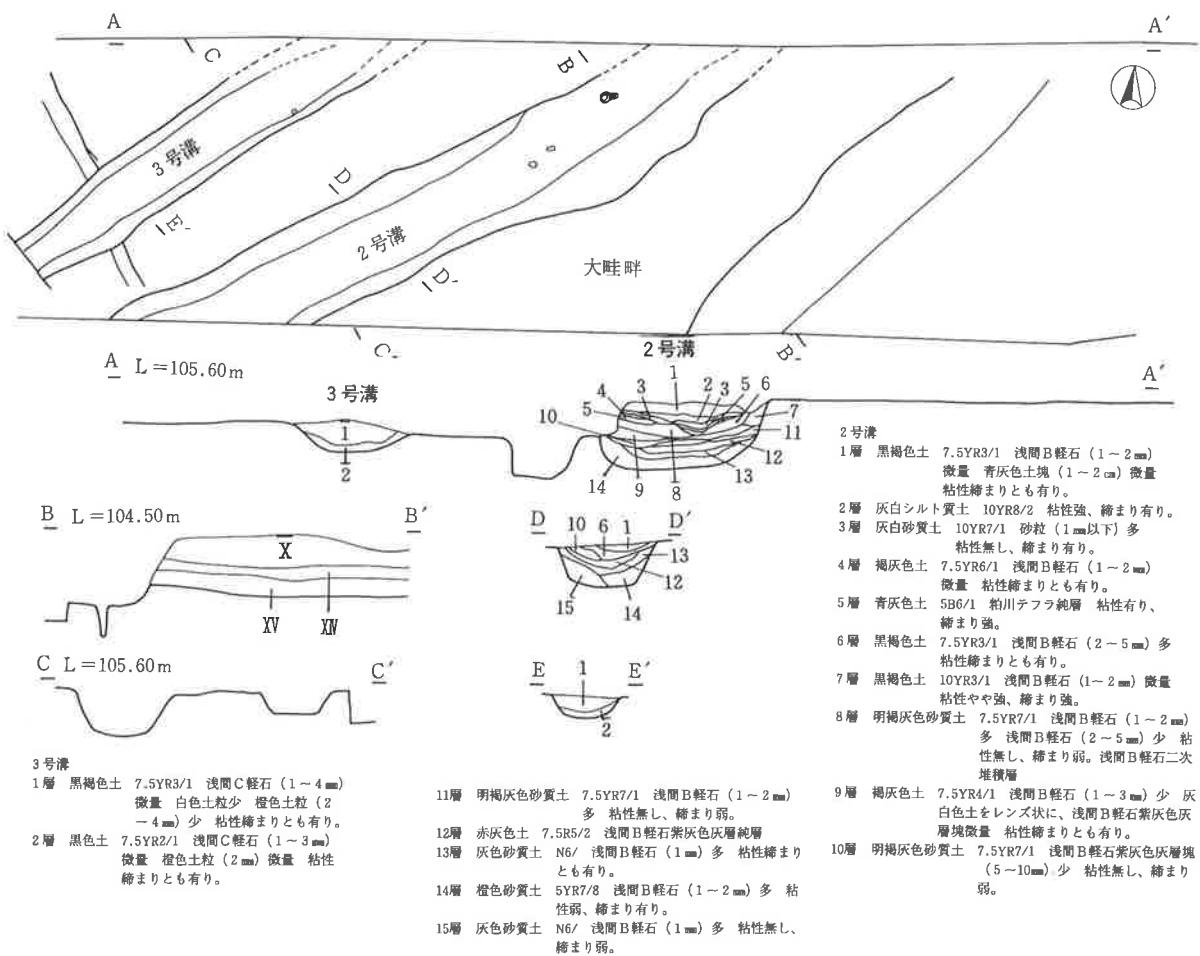
ピット群は、径20~60cm・深さ15~55cmの円形や方形を呈すピットが計32基が検出され、分布状況から調査区外の南方と北方にも広がると推定される。ピット群の性格はやや乱雑な配置で、建物を組めるほど整然としていないが、2~3列の直線的な配列とも認識できることより建物等を含めた構築物の柱穴と推定される。



第33図 ピット群



第34図 1号溝



第35図 2・3号溝・大畦畔

B軽石下水田 (第35図 図版7-8)

本遺構は、調査区の東部に位置する大畦畔の存在より確認される。大畦畔は基本土層X層褐灰色粘質土により構成され、幅260~280cm×高さ20cmとなる。大畦畔の西側には平行して2・3号溝が存在しており、関連するものと思われる。

1号溝 (第34図 図版7-1)

本溝は、調査区西部に位置し、北部を2号土坑により切られている。

幅1.32cm×深さ52cmのV字状断面を持ち、ほぼ南北方向に走行する。南北両端は調査区外に延びる。底面は南へと傾斜する。本溝は時期不明である。

遺物は、土師器細片が1点出土している。

2号溝（第35図 図版7-2・10）

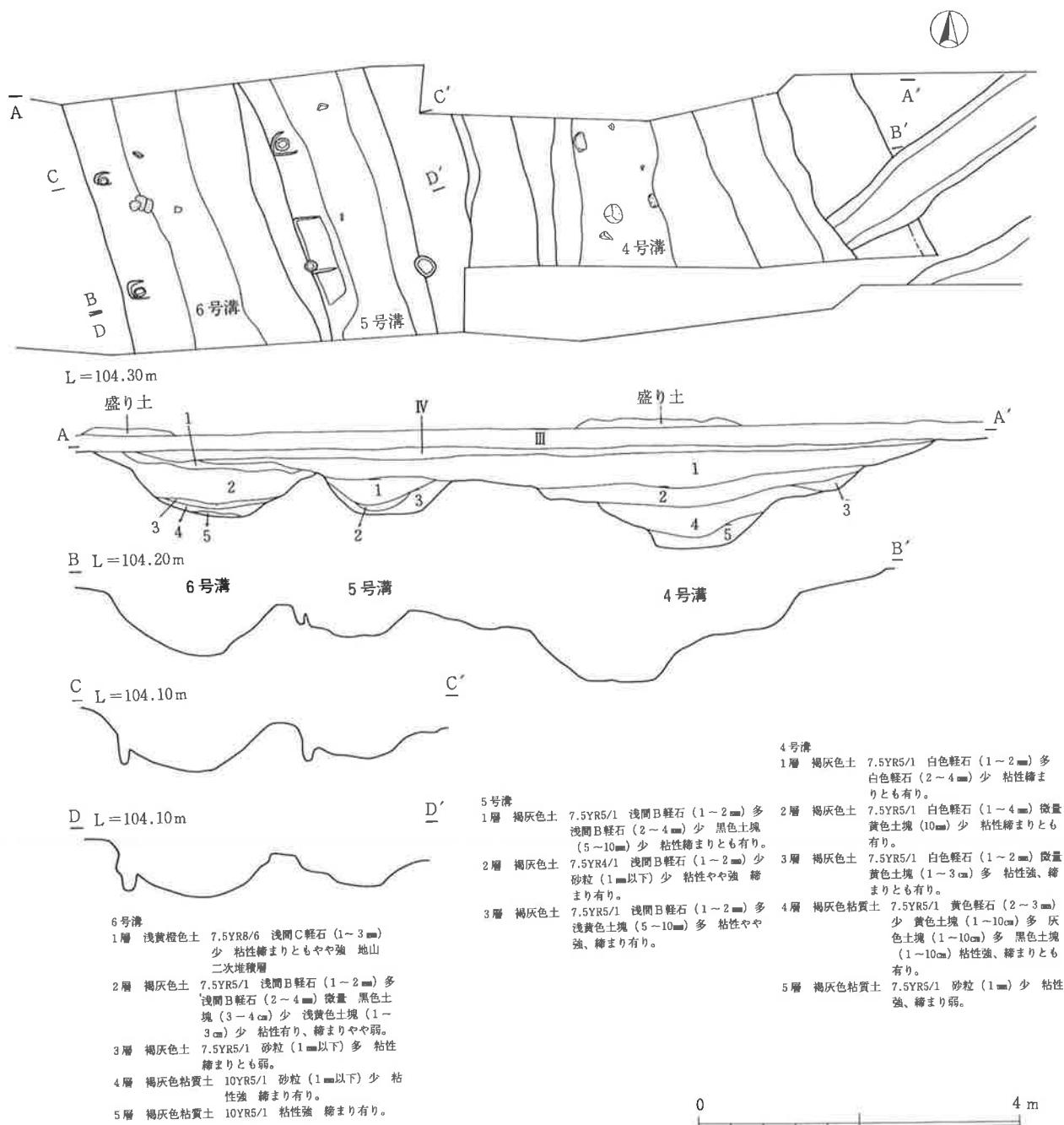
本溝は、調査区中央部やや東寄りに位置し、西部を4号溝により切られている。

幅103～130cm×深さ48cmの箱形状断面を持ち、北東から南西へと緩やかな傾斜を持って走行する。南西と北東の両端は調査区外に延びる。覆土下層～底面には浅間山B軽石層が堆積しており、これより本溝は平安時代の所産と考えられる。遺物は土師器が出土している。

3号溝（第35図 図版7-3）

本溝は、調査区中央部やや東寄りに位置し、西部を4号溝により切られている。

幅75cm×深さ25cmの箱形～皿状の断面を持ち、北東から南西へと緩やかな傾斜を持って走行する。南西と



第36図 4～6号溝

北東の両端は調査区外に延びる。覆土下層～底面には浅間B軽石層が堆積しており、これより本溝は平安時代の所産と考えられる。遺物は土師器が出土している。

4号溝（第36図 図版7-4・10）

本溝は、調査区中央部に位置し、東部で2・3号溝を切る。

断面形は幅500～590cm×深さ140cmの規模を有し、平坦面を2か所に持つ形状を呈する。北北西から南南東へと緩やかな傾斜を持って走行する。南北の両端は調査区外に延びる。覆土等より中世の所産と考えられる。遺物は土師器・須恵器が出土している。

5号溝（第36図 図版7-5・10）

本溝は、調査区中央部に位置し、4・6号溝と平行して走行している。

断面形は、幅130～150cm×深さ48cmの碗状を呈する。北北西～南南東へ走行し、傾斜は無い。南北の両端は調査区外に延びる。遺物より中世の所産と考えられる。遺物は陶器・土師器・須恵器が出土している。

6号溝（第36図 図版7-6）

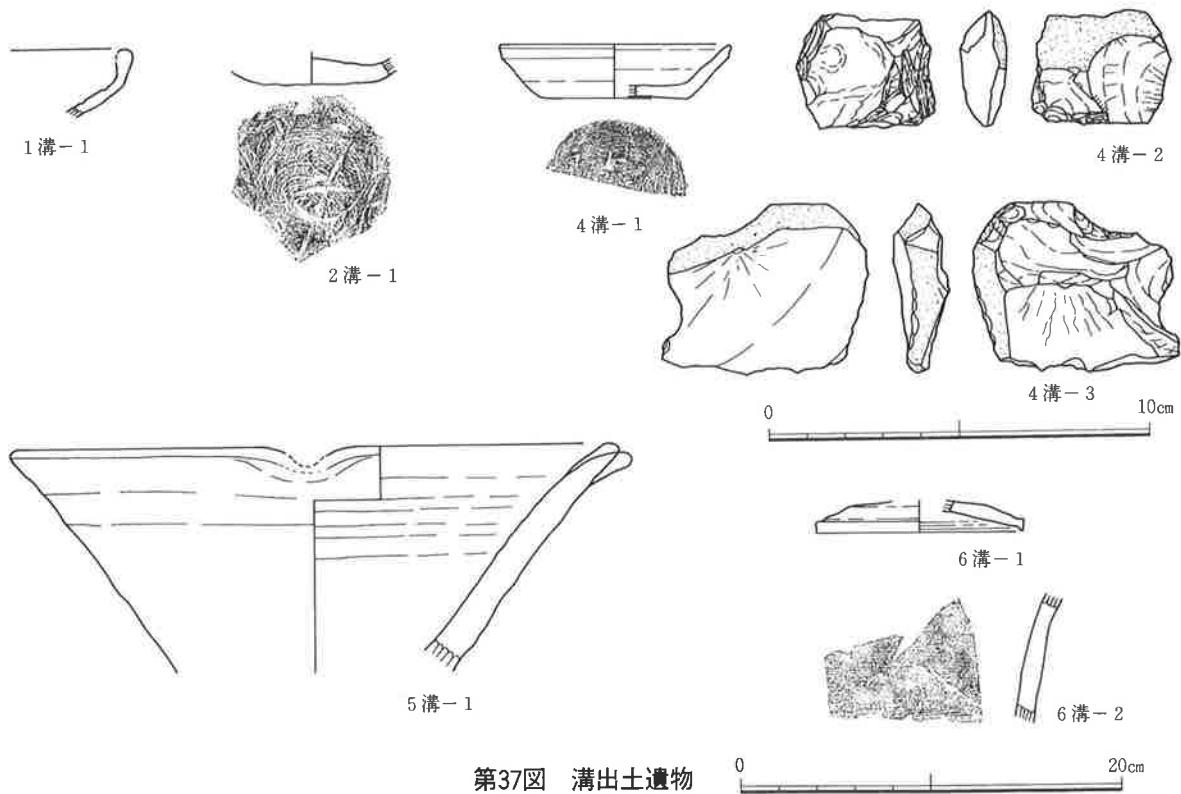
本溝は、調査区中央部に位置し、4・5号溝と平行して走行している。

断面形は幅214～230cm×深さ60cmの碗状を呈する。北北西から南南東へとやや傾斜する。南北の両端は調査区外に延びる。覆土上部には地山の二次堆積層が認められ、5号溝掘削時の排土と思われ、これより本溝が5号溝より古いと推定される。遺物より中世の所産と考えられる。遺物は陶器・土師器・須恵器が出土している。

橋脚状遺構（第36図 図版7-7）

本遺構は、調査区の中央部に位置する5・6号溝中より検出されている。

本遺構は、4本の柱穴が長軸長2.15m×短軸長1.48mの長方形に配置され、6号溝を横断する形となり、橋脚の可能性が推定される。所産時期は中世で、6号溝と同時期と思われる。



第37図 溝出土遺物

表22 1号溝出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	特徴	備考
1	鉢	口 高 底	一 一 一	還元	黒色	砂粒 肥厚する口縁部。	

表23 2号溝出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	土師器 壺	口 高 底	一 一 6.5	酸化	明褐色	砂粒 礫 平底。	ロクロ調整。回転糸切り無調整。	赤彩

表24 4号溝出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	土師器 壺	口 高 底	(12.2) 2.8 (7.6)	酸化	明赤褐色	砂粒 礫	短く外反する口縁部。	ロクロ調整。回転糸切り無調整。
2	剝片	岩。	一部に自然面が残り、不定型で、打撃痕がある。					
3	剝片	岩。	一部に自然面が残り、不定型で、打撃痕がある。					

表25 5号溝出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎	器形の特徴	備考
1	片口鉢	口 高 底	(31.0) — —	還元	黒灰色	砂粒	ロクロ調整 内面下部 が摩耗。

表26 6号溝出土遺物

番号	器種	法量	焼成	色調	胎土	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
1	須恵器 蓋	口 高	(10.8) —	還元	灰色	砂粒 礫 黒色粒多	直角に屈折する口縁部。	ロクロ調整。
2	鉢	口 高 底	— — —	還元	黒灰色	砂粒	ロクロ調整	外面に煤。

4まとめ

紅雲村東遺跡では、古代および中世の遺構が検出されているが、中でも中世の遺構に興味が持たれる。中世遺構は溝とピット群により構成され、ピット群は明瞭にはできなかったが建物跡の可能性が高く、溝には橋が存在していた可能性が有り、これらを総合すると館跡を想像することもできる。この点については今後の調査の課題と言える。

VII 自然科学分析

石倉下宅地遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物含有層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層や遺構が検出された前橋市石倉下宅地遺跡において、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ検出分析や屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、標準土層断面、9号住居跡中央部、9号住居跡柱穴の3地点である。

2. 土層層序

(1) 標準土層断面

標準土層断面では、下位より灰色砂層（層厚15cm以上）、黄色軽石混じり灰色砂層（層厚13cm、軽石の最大径7mm）、灰色砂層（層厚9cm）、黄色軽石混じり黄褐色砂層（層厚16cm、軽石の最大径9mm）、灰色砂層（層厚16cm）、黄色軽石混じり黄色砂層（層厚16cm、軽石の最大径2mm）、黄褐色砂質土（層厚12cm）、黄灰色軽石を多く含む暗褐色土（層厚11cm、軽石の最大径4mm）、整地層（層厚19cm）が認められる（図1）。

(2) 9号住居跡中央部

石田川式土器を伴う9号住居址の中央部では、下位より灰色軽石を多く含む黒色土（層厚2cm、軽石の最大径7mm、貼床構成層）、灰色軽石を多く含む暗褐色土（層厚11cm、軽石の最大径7mm）、灰色軽石を多く含む黒灰褐色土（層厚19cm、軽石の最大径8mm）、整地層（層厚21cm）が認められる（図2）。

(3) 9号住居跡柱穴

9号住居跡の柱穴の覆土は、暗灰褐色土（層厚12cm）である。その上位に、下位より灰色軽石を少量含む黒色土（層厚15cm、軽石の最大径4mm）、灰色軽石を多く含む暗灰褐色土（層厚18cm、軽石の最大径11mm）、灰色軽石を多く含む黒灰褐色土（層厚17cm、軽石の最大径11mm）、整地層（層厚23cm）が認められる（図3）。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

テフラの特徴とその降灰層準を把握するために、上述3地点において基本的に5cmごとに採取された試料のうち、23点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80%で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。標準土層断面では、試料2と試料1に灰白色軽石（最大径4.8mm）

が含まれている。この軽石はスポンジ状に比較的よく発泡しており、班晶に斜方輝石や单斜輝石が認められる。9号住居跡中央部では、いずれの試料からも灰白色軽石（最大径5.8mm）が検出される。この軽石はスポンジ状に比較的よく発泡しており、班晶に斜方輝石や单斜輝石が認められる。貼床構成層の試料7には、より多くの軽石が含まれている。9号住居跡柱穴でも、いずれの試料からも灰白色軽石（最大径6.6mm）が検出される。この軽石はスポンジ状に比較的よく発泡しており、班晶に斜方輝石や单斜輝石が認められる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

砂層中に認められた黄色軽石およびテフラ検出分析により検出された灰白色軽石について、岩石記載学的な特徴を把握するために、標準土層断面の5点の試料について温度一定型屈折率測定法（新井、1972, 1993）により、テフラ粒子の屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。試料6、試料5、試料4、の3試料に含まれる重鉱物は、斜方輝石や单斜輝石である。斜方輝石（γ）の屈折率は、いずれも1.705-1.710である。試料1に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.515-1.521である。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.707-1.711である。

また、9号住居跡中央部の試料7に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.515-1.521である。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.707-1.710である。

5. 考察

標準土層断面の試料1や9号住居跡中央部の試料7に含まれる灰白色軽石は、その特徴から4世紀中葉^{*1}に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C、荒牧、1968、新井、1979）に由来すると考えられる。したがって、ほかの9号住居跡の2地点のほかの試料から検出される軽石についても、As-Cに由来すると考えられる。これらのことから、9号住居跡の層位はAs-Cより上位にあると考えられる。

また、標準土層断面で認められた黄色軽石混じり黄色砂層以下の水成層については、層相やAs-C含有層のすぐ下位にあることから、総社砂層（早田、1990）と考えられる。

6. まとめ

石倉下宅地遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、総社砂層の上位に浅間C軽石（As-C、4世紀中葉^{*1}）を含む土層の堆積が認められた、本遺跡において検出された9号住居跡の層位は、As-Cより上位にあると考えられる。

* 1 現在では4世紀を遡るとする説が有力になっているようである（たとえば、若狭、2000）。しかし、具体的な年代観が示された研究報告例はまだない。現段階においては「3世紀後半」あるいは「3世紀終末」と考えておくのが妥当なのかも知れないが、土器をもとにした考古学的な年代観の変更については、考古学研究者による明確な記載を待ちたい。

文献

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究、11, p.254-269.
新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
荒牧重雄（1968）浅間火山の地質。地団研専報, no.45, 65p.
町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
早田 勉（1990）群馬県の自然と風土。群馬県史通史編, 1, p.37-129.
若狭 徹（2000）群馬の弥生土器が終るとき。かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

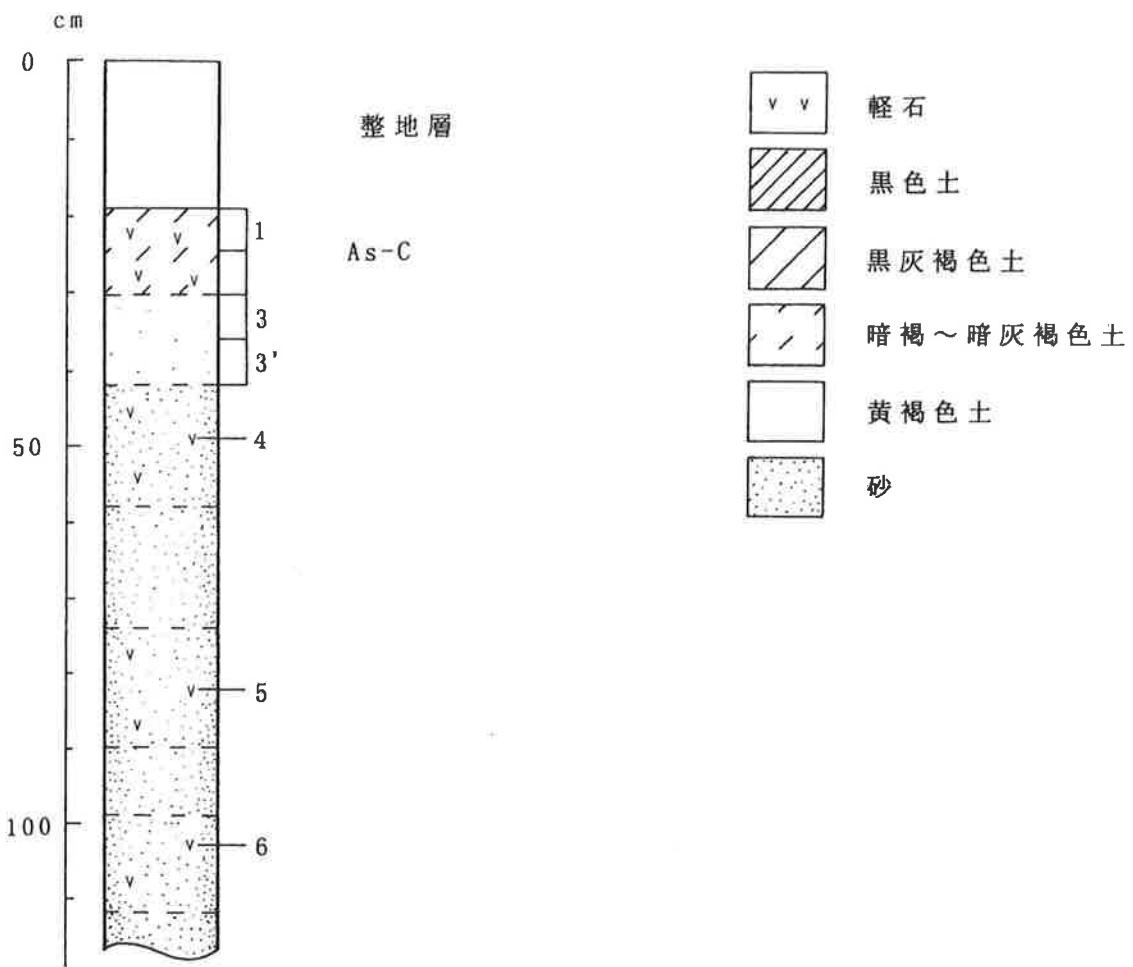


図1 標準土層断面の土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号

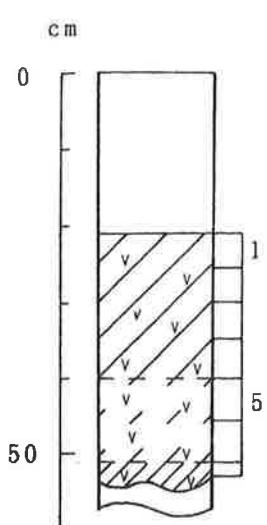


図2 9号住居跡覆土の土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号

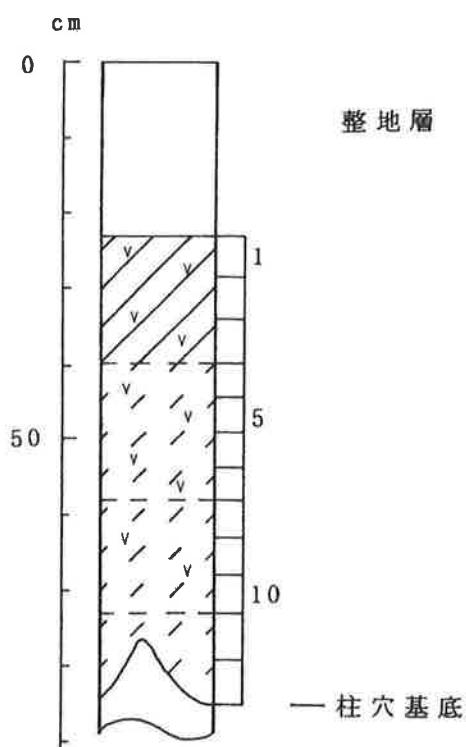


図3 9号住居跡柱穴覆土の土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
標準 土層断面	1	++	灰白	4.8
	2	+	灰白	2.2
	3	-	-	-
	3'	-	-	-
9号住居跡 中央部	1	++	灰白	5.5
	2	++	灰白	4.1
	3	+++	灰白	5.8
	4	+++	灰白	3.8
	5	+++	灰白	4.7
	6	++	灰白	4.1
	7	+++	灰白	4.3
9号住居跡 柱穴	1	++	灰白	4.1
	2	++	灰白	5.2
	3	++	灰白	5.0
	4	++	灰白	4.4
	5	++	灰白	5.0
	6	++	灰白	6.3
	7	+++	灰白	3.8
	8	++	灰白	4.6
	9	++	灰白	5.3
	10	++	灰白	6.6
	11	+	灰白	3.1
	12	+	灰白	4.9

++++：とくに多い， ++：多い， +：中程度， +：少ない，
-：認められない。最大径の単位は、mm。

表2 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	斜方輝石 (γ)
標準土層断面	1	1.515-1.521	opx> cpx	1.707-1.711
標準土層断面	4	-	opx> cpx	1.705-1.710
標準土層断面	5	-	opx> cpx	1.705-1.710
標準土層断面	6	-	opx> cpx	1.705-1.710
9号住居跡中央部	7	1.515-1.521	opx> cpx	1.707-1.710

屈折率の測定は、温度一定型測定法（新井，1972, 1993）による。opx：斜方輝石，cpx：单斜輝石。

石倉下宅地遺跡

図版
1



1. 1区全景 西から



2. 2区全景 西から



3. 3区全景 西から



4. 4区全景 東から

石倉下宅地遺跡

図版
2



1. 1号住居跡 北から



2. 2号住居跡 北から



3. 3号住居跡 西から



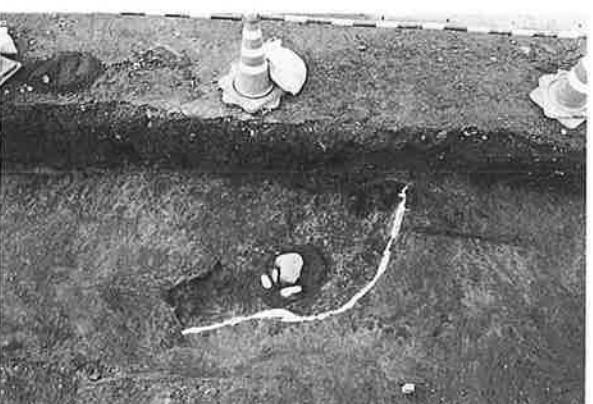
4. 4号住居跡 南東から



5. 5号住居跡 北から



6. 6号住居跡 南西から



7. 7号住居跡 北から



8. 8号住居跡 南から

石倉下宅地遺跡

図版
3



1. 9号住居跡 南から



2. 1号井戸 南から



3. 2号井戸 南から



4. 3号井戸 南から



5. 4・5号井戸 南から



6. 6号井戸 南から



7. 7号井戸 北から



8. 1号溝 南から

石倉下宅地遺跡

図版
4



1. 1号土坑 東から



2. 2号土坑 北から



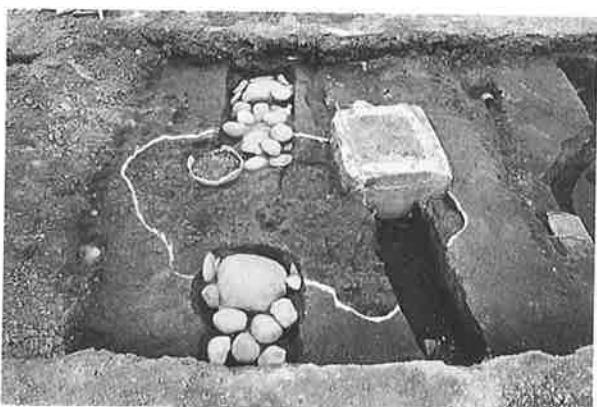
3. 3号土坑 北から



4. 4号土坑 西から



5. 6号土坑 北から



6. 7号土坑 南から



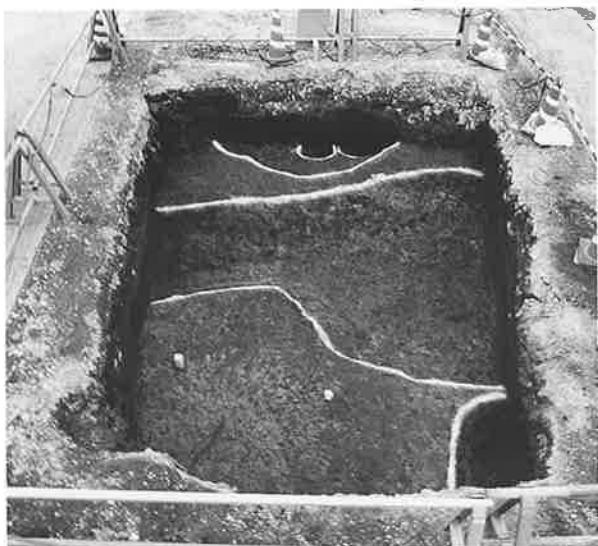
7. 8号土坑 南から



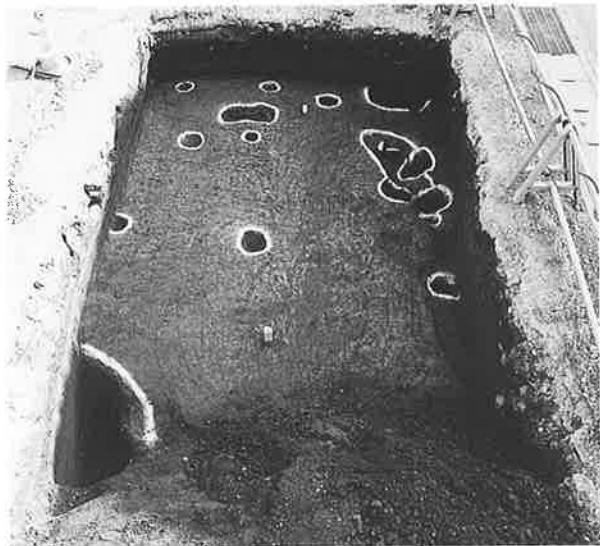
8. 9号土坑 北から

紅雲村東遺跡

図版
5



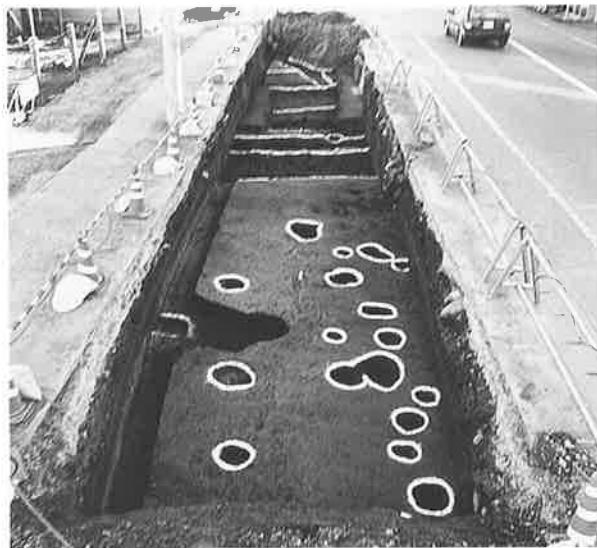
1. 1区全景 東から



2. 2区全景 西から



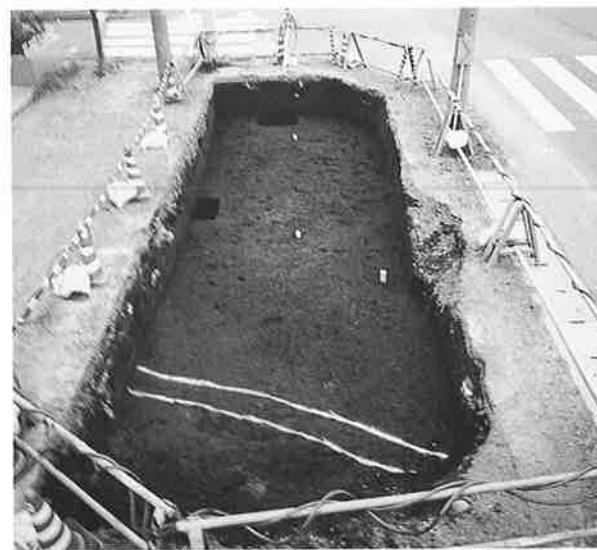
3. 3区全景 東から



4. 4区全景 西から



5. 5区全景 西から



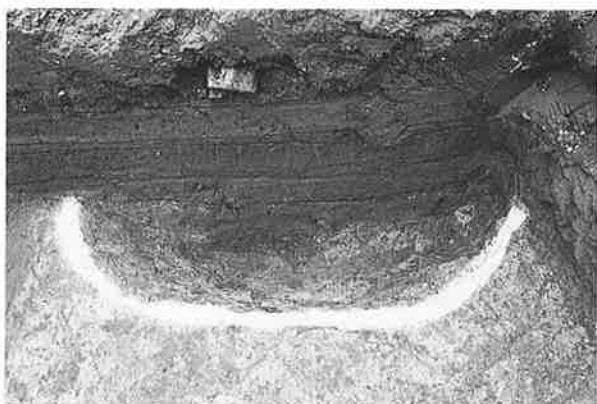
6. B軽石下水田 西から

紅雲村東遺跡

図版 6



1. 1号住居跡 南から



2. 1号土坑 南から



3. 2号土坑 南から



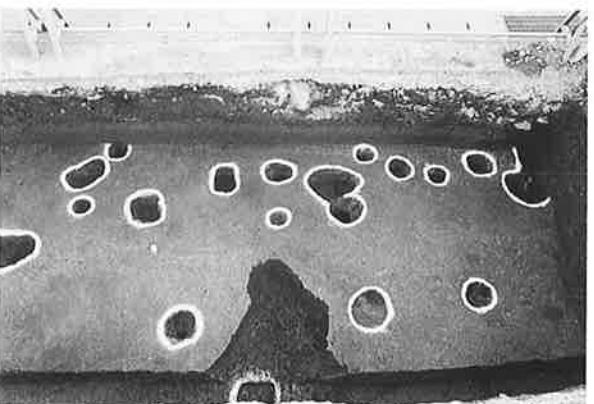
4. 3号土坑 北から



5. 5号土坑 東から



6. 6号土坑古銭出土状況 南から



7. ピット群全景 北から



8. ピット群全景 西から

紅雲村東遺跡

図版
7



1. 1号溝 北から



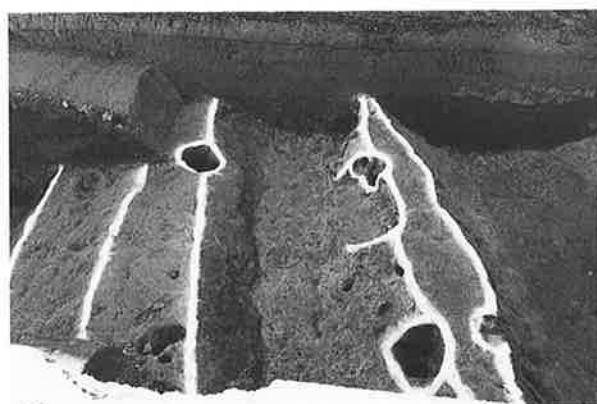
2. 2号溝 北東から



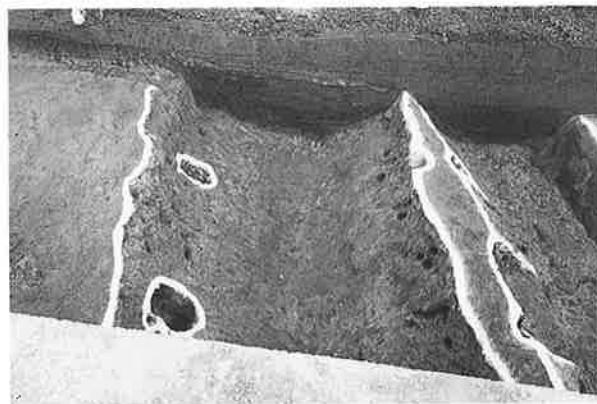
3. 3号溝 北東から



4. 4号溝 北から



5. 5号溝 北から



6. 6号溝 南から



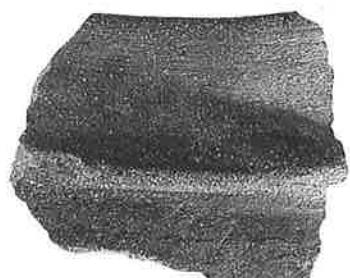
7. 6号溝 北から



8. B軽石下水田 大畦畔 南西から

石倉下宅地遺跡

図版
8



1住-1



2住-1



2住-2



2住-3



2住-5



3住-1



3住-2



3住-3



5住-1



6住-6



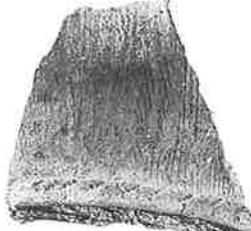
6住-8



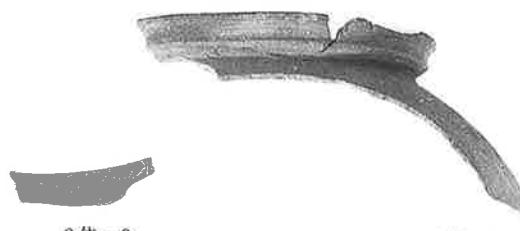
4住-1



8住-1



8住-2



8住-3

8住-6



9住-1



9住-2

出土遺物（1）

石倉下宅地遺跡

図版
9



1 井戸ー写真のみ



2 井戸ー1



2 井戸ー2



2 井戸ー3



2 井戸ー4



2 井戸ー5



2 井戸ー6



2 井戸ー7



2 井戸ー8



2 井戸ー9



4 井戸ー3



7 井戸ー1



2 土ー1



2 土ー2



2 土ー3



2 土ー4



2 土ー5



2 土ー6

出土遺物（2）

石倉下宅地遺跡・紅雲村東遺跡

図版
10



遺構外-1



遺構外-2

石倉下宅地遺跡



1住-2



3土-2



6土-1



2溝-1



4溝-1



4溝-2



5溝-1

紅雲村東遺跡

出土遺物（3）

抄 錄

フリガナ	イシクラシモタクチイセキ ベニクモムラヒガシイセキ								
書名	石倉下宅地遺跡 紅雲村東遺跡								
編著者名	矢島博文・折原洋一								
編集機関	山武考古学研究所 〒286-0045 千葉県成田市並木町221 / TEL0476-24-0536								
発行機関	表町石倉線遺跡調査会 〒371-0026 群馬県前橋市大手町一丁目1番1号 群馬県教育委員会内								
発行年月日	西暦 2001年3月9日								
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
イシクラシモタクチ 石倉下宅地	群馬県前橋市石倉 マチ1丁目	市町村	遺跡番号	12A	36度 22分 47秒	139度 3分 35秒	20001016 ~ 20001117	600m ²	表町石倉線道路 改築事業
ベニクモムラヒガシ 紅雲村東	群馬県前橋市紅雲 マチ2丁目			12A	36度 22分 49秒	139度 4分 5秒	20001117 ~ 20001129	250m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項		
石倉下宅地	集落	古墳時代・平安時代・近世	住宅跡・井戸・土坑・溝			土師器・須恵器・陶磁器			
紅雲村東	集落	平安時代・近世	住宅跡・土坑・溝・水田跡			土師器・須恵器・陶磁器			

群馬県前橋市
石倉下宅地遺跡
紅雲村東遺跡

印刷 平成13年3月5日
 発行 平成13年3月9日
 編集 山武考古学研究所
 発行 表町石倉線遺跡調査会
 印刷 (株)文化総合企画
 TEL 0476-93-0593

坊山遺跡

前橋市市民分譲住宅建設事業予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和58年度

前橋市教育委員会

序

広瀬、朝倉地区周辺は、市内でも有数の古墳群地帯であり、古代東国の歴史を解明するためにも重要な地域であります。

しかし、近年、前橋市でも、人口の増加、核家族化の波が進むにつれて、住宅の不足が社会問題となっています。

そこで、前橋市市民分譲住宅建設事業に先立ち、遺跡の発掘調査を実施する運びとなりました。

本分譲住宅建設予定地は、昭和57年度に発掘調査の行われた「後閑団地遺跡」の北東約45mに位置しています。そこでは、古墳時代から平安時代にかけての住居址等の遺構を調査することができました。そのことから、本調査地は、「後閑団地遺跡」の成果を踏まえて、発掘調査を実施してまいりました。

その結果、古墳時代の竪穴住居址をはじめ、井戸や溝状遺構等が検出され、貴重な資料を得ることができました。

この調査を実施するにあたり、ご協力いただきました関係者のみなさん、ならびに直接調査に携わってくださった作業員のみなさんに厚くお礼申し上げます。

昭和59年3月31日

前橋市教育委員会

教育長 金井博之

例　　言

1 本報告書は、前橋市市民分譲住宅建設に伴い、発掘調査した坊山遺跡（58G2）の調査概要である。

2 調査主体は、前橋市教育委員会である。

3 発掘調査の要項

調査期間 昭和58年9月21日～昭和58年10月31日

調査場所 前橋市広瀬町一丁目1—9

調査担当者 布施和男 江部和彦 福田瑞穂

調査面積 1504.9m²

4 本書の編集・執筆は担当者の協議により福田瑞穂が担当した。遺物の実測、製図、及び写真撮影等は、調査担当者及び、主に湯浅たま江、湯浅道子、江部美鈴が分担して行った。

5 本発掘調査における出土遺物は、一括して前橋市教育委員会で整理・保管している。

6 地質の鑑定は、群馬大学教授新井房夫氏にお願いした。

7 発掘調査に参加した方々は、次の通りである。記して感謝する次第である。（順不同）

関根辰雄、木島茂雄、出澤トシ子、遠藤キヌ江、後藤照子、関根さち子、川和ウメ子、石川タカヨ、湯浅たま江、湯浅道子

目 次

序

例 言

I 遺 跡 の 位 置 と 環 境	1
II 発 掘 調 査 の 概 要	3
1 調 査 に 至 る 経 過.....	3
2 調 査 の 方 法.....	3
3 地 層.....	3
III 遺 構 と 遺 物	4
1 住 居 址.....	4
2 土 壤.....	10
3 溝 状 遺 構.....	11
4 井 戸.....	11
IV ま と め.....	12

I 遺跡の位置と環境

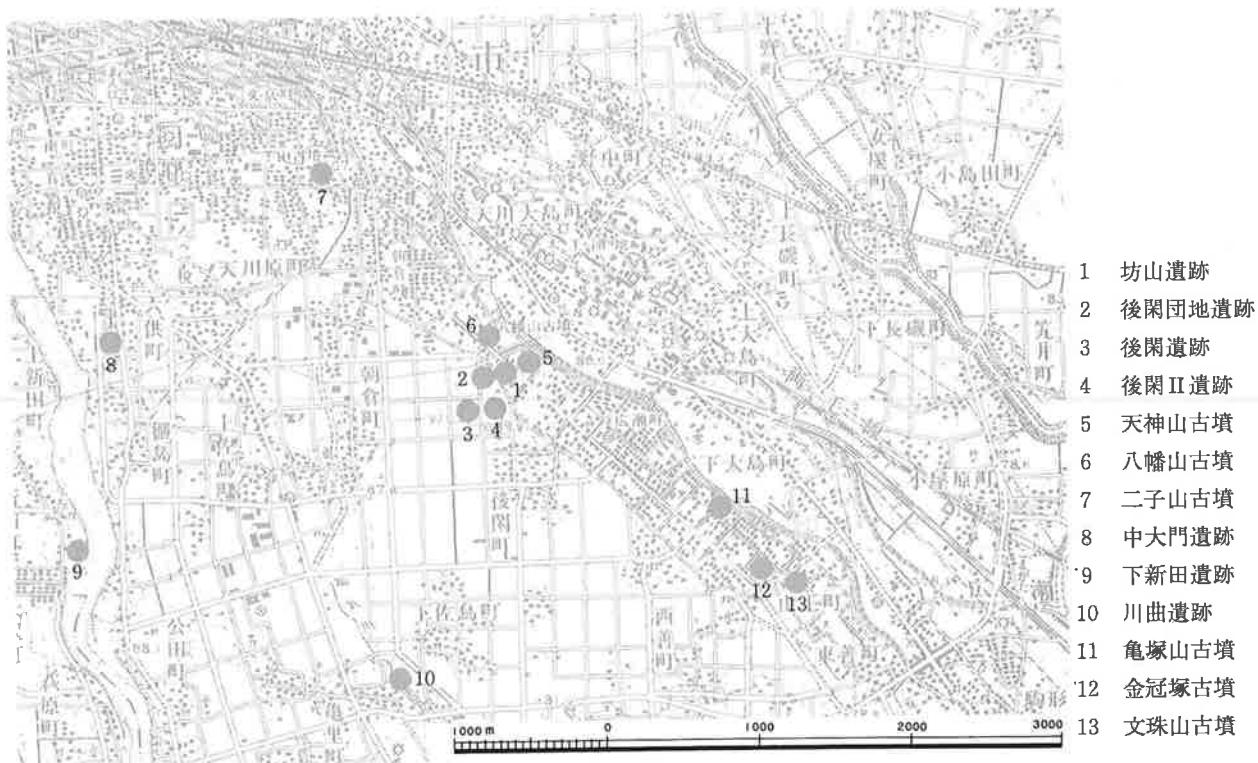
坊山遺跡は、前橋市広瀬町一丁目1—19にある。当所は、前橋台地の広瀬川右岸、市街地より南東へ約2km、八幡山古墳より南方150m、前橋市立朝倉小学校より東方約500mのところに所在する。前橋台地は、周知のように、火山泥流堆積物と、それを被覆する火山灰質シルト粘土から成り立つ洪積台地で、東側は、広瀬川の低地帯と直線的な崖をなし、西側は、藤川、端気川が流れている。標高は、90m50cm内外である。

前橋台地利根川左岸の水系をみると、主な河川として、広瀬川、端気川、桃木川、藤川があげられる。なお、台地を南流する藤川、端気川などの小河川沿いには、浅い浸食谷もみられる。

次に、周辺の遺跡について考えてみると、昭和10年に実施された群馬県一斎古墳調査では、「旧上川淵村」において、113基の古墳が確認されている。広瀬川右岸の低い崖の上には、市街地から東善にかけて、帶状に連なる古墳群が存在し、市内でも有数の古墳群地帯であった。全国でも数が少ないといわれている前方後方墳の「八幡山古墳」は、その大きさは、全国一といわれている。その「八幡山古墳」をはじめ、現存している古墳は、「後閑天神山古墳」、「亀塚山古墳」、「金冠塚古墳」、「文珠山古墳」などである。

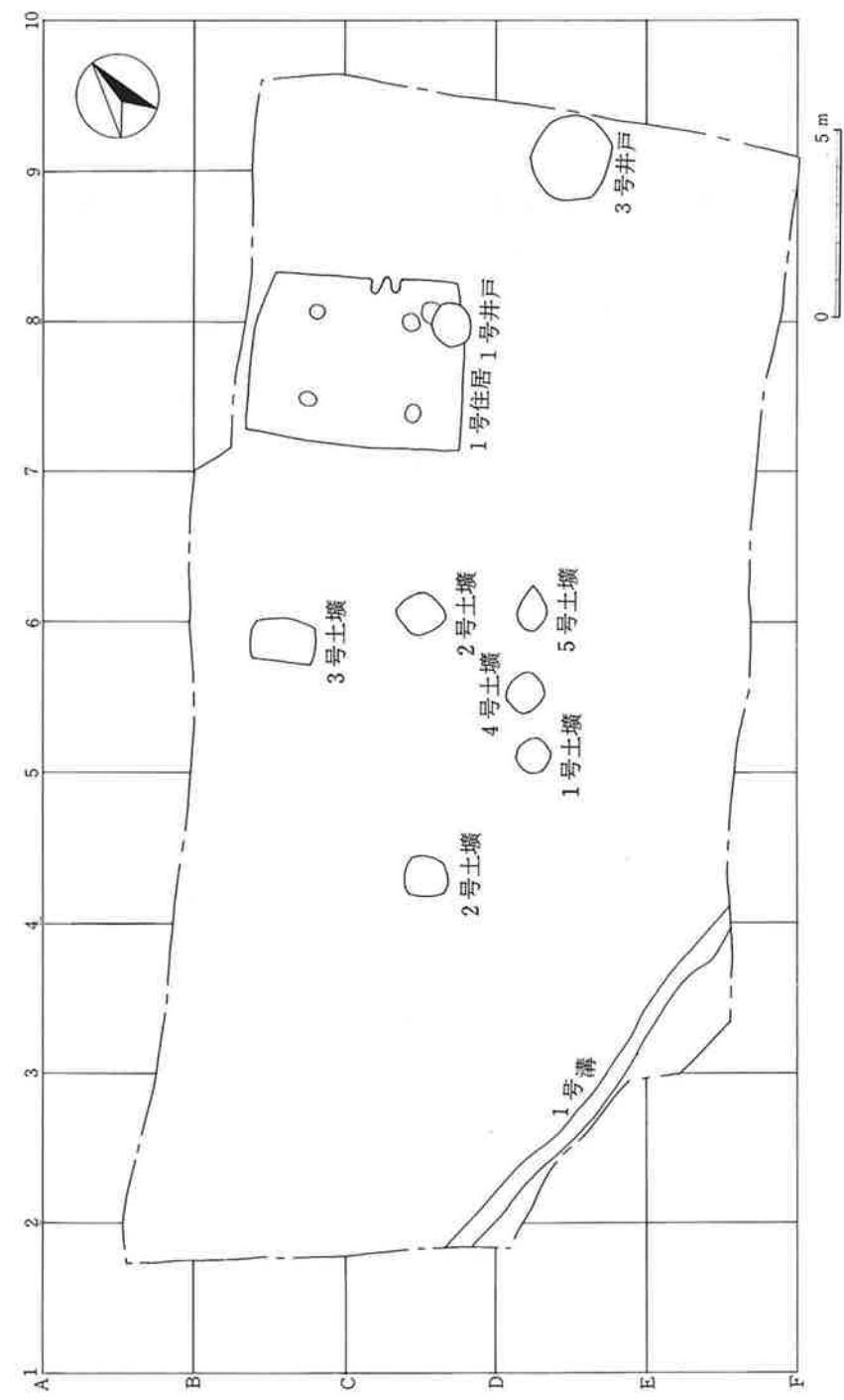
また、坊山遺跡近辺でも、上川渓公民館建設や住宅建設にともなう発掘調査が進められており、「後閑団地遺跡」や「後閑II遺跡」、「中大門遺跡」からは、古墳時代から平安時代の住居址や水田址が発掘調査されている。

昭和57年度に、前橋市が行った「後閑団地遺跡」は、「坊山遺跡」から西方向に約45mと、極めて近い距離にある。その遺跡からは、古墳時代の堅穴住居が5軒、奈良、平安時代の堅穴住居が12軒確認されている。また、7世紀後半から8世紀後半にかけての石槨墓が一基検出され、その他には、溝状遺構10、井戸跡1などが報告されている。



第1図 坊山遺跡の位置と周辺の遺跡(5万分の1)

遺構全体図 ($S = 1/200$)



第2図 遺構全体図

II 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

昭和57年7月15日付で前橋市都市再開発課より、広瀬町市民分譲住宅用地の表面調査についての依頼がある。7月16日に表面調査を実施した結果、本調査地は古墳時代から奈良、平安時代の遺跡地である可能性が極めて高いことがわかった。そのため7月22日に都市再開発課と協議をもち、8月8日に確認調査を行った。調査地区に対して、東西方向に9m間隔に幅1mのトレンチ4本を設定し試掘を行った。その結果、一番北側のトレンチに竪穴住居と井戸跡を確認することができた。そこで、前橋市都市再開発課から9月16日付で委託を受け、発掘調査を実施することになった。

2 調査の方法

発掘調査は、まず大小のゴミのかたづけから始まった。次に、調査区全体に入れたトレンチにより南側半分には遺構が確認されなかつたので、北側半分について行うこととした。調査区は、FA混じりの黄褐色土層の面まで、バックフォーにより掘り下げ、全面にわたり剝ぎとつた。調査にあたっては、一辺が4mのグリットを基本単位として、東西をA・B・C……南北を1・2・3……と呼称した。遺構調査は、プラン確認、セクションベルトの設定、メッシュ及び平板測量による実測、写真撮影等の順序で行った。

3 地層

本遺跡地の標準層位は、以下のようになる。遺構及び遺物の関連からして、土師器、須恵器を使用する、竪穴住居の確認面は、III層上面であった。

I層 盛土

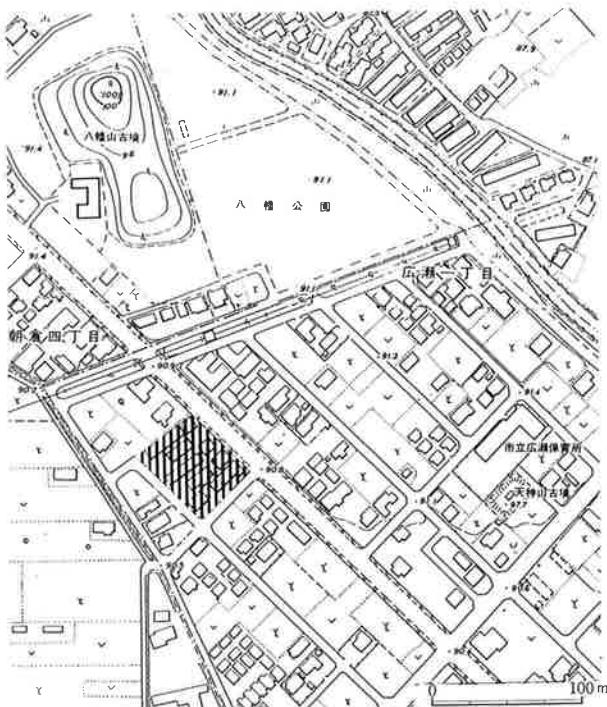
II層 暗黒褐色土層。天仁元(1108)年降下とされる浅間B軽石を含む砂質土層。

III層 暗黄褐色土層。6世紀前半の榛名二ッ岳の噴火による降灰(FA)を主体とする層。

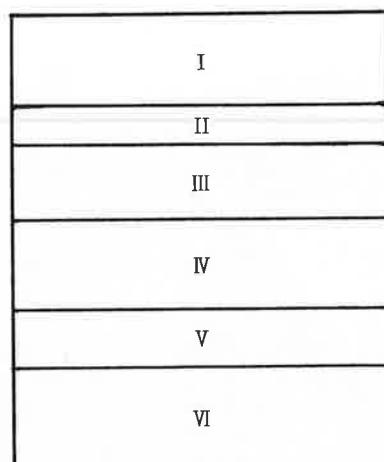
IV層 暗黒褐色土層。4世紀中頃、浅間山噴火により降下した軽石(C軽石)を少量含む層。厚さは20cm~30cm程度。

V層 暗黄褐色土層。IV層の漸移層。

VI層 黄褐色土層。ロームを主体とする層で、極めて固くしまっている。厚さは20cm~30cm前後。所々に鉄分の凝縮した赤茶褐色土を含む。



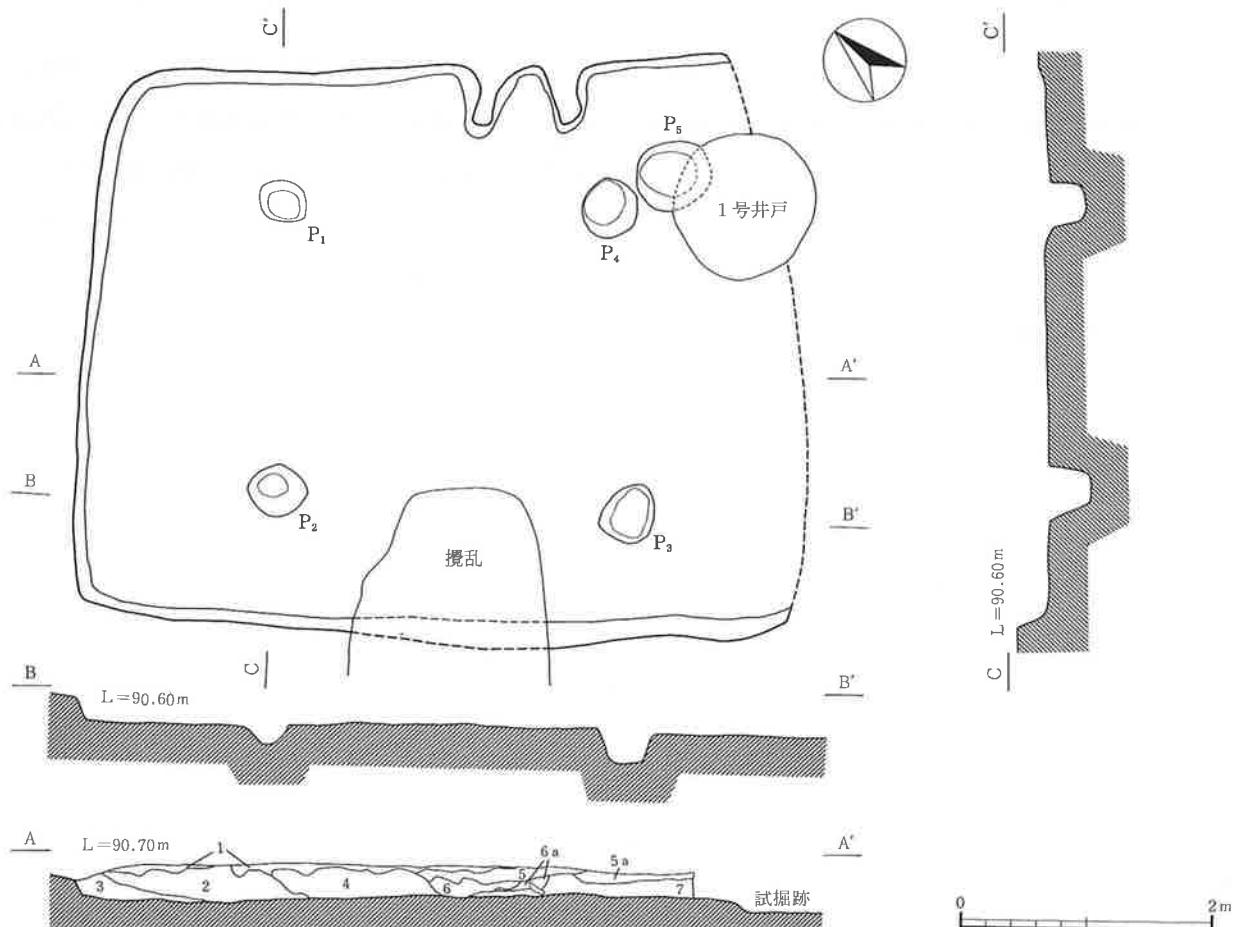
第3図 調査区域



第4図 土層柱状図

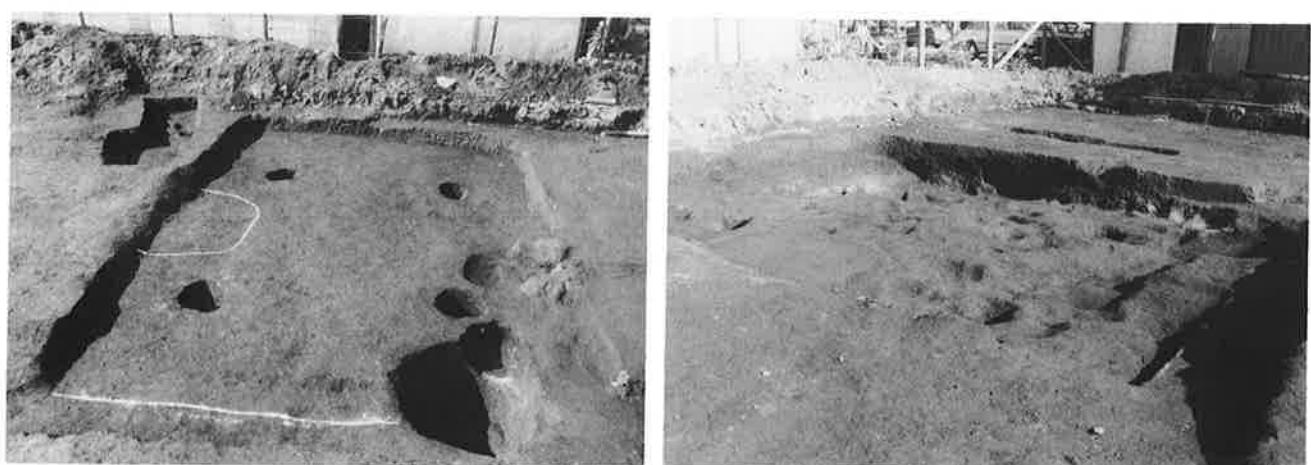
III 遺構と遺物

1 住居址



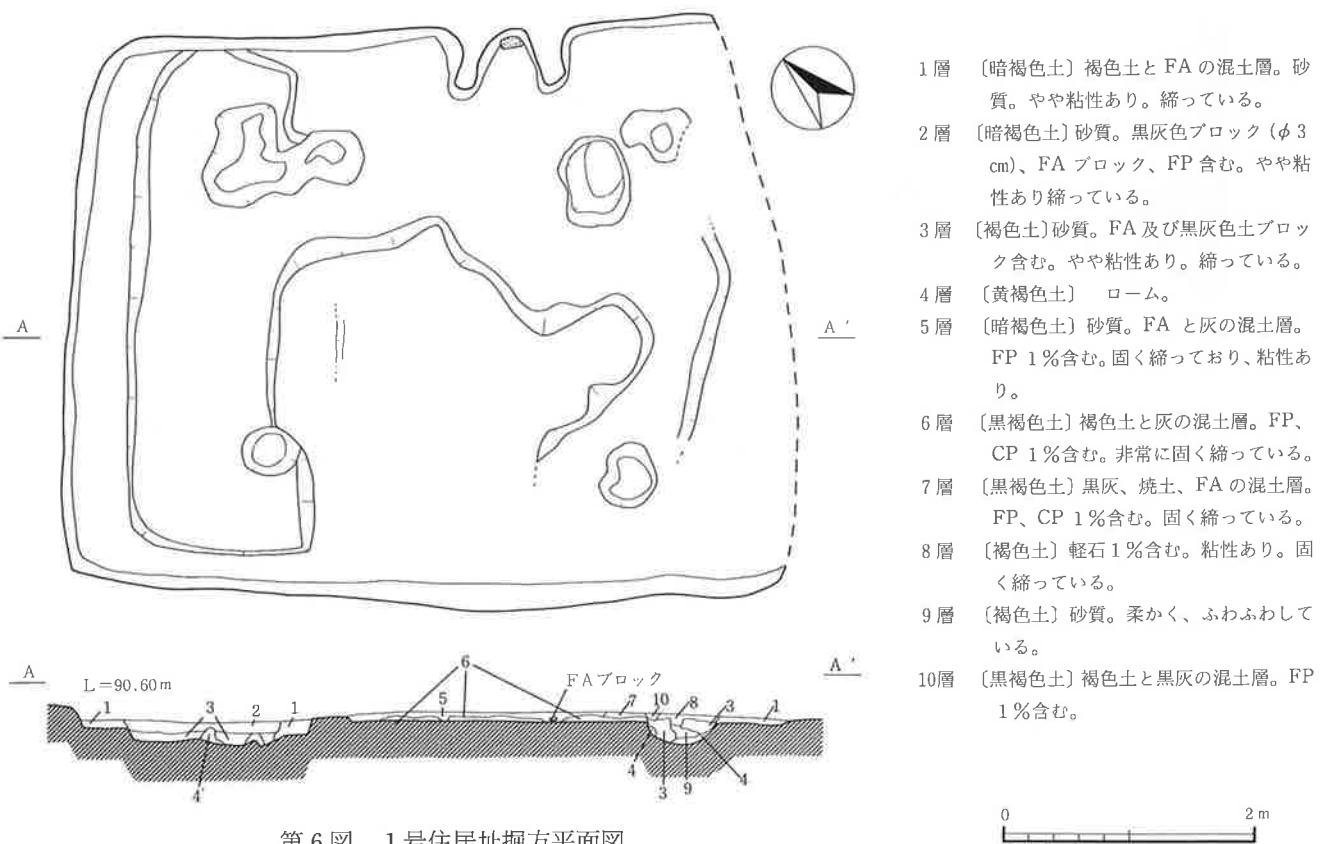
- 1層 [褐色土] 客土。砂質。わずかに軽石を含む。固く締っている。
- 2層 [暗褐色土] 砂質。FP、CP ($\phi 1\text{ mm} \sim 3\text{ mm}$) 3%含む。ブロック状のFA ($\phi 3\text{ cm}$ 前後) がまだらに混入。やや粘性あり。締っている。
- 3層 [黒褐色土] 砂質。FP ($\phi 1\text{ mm}$) 1%含む。締っている。やや粘性あり。
- 4層 [褐色土] 砂質。FP ($\phi 1\text{ mm} \sim 2\text{ mm}$)、ブロック状のFA ($\phi 2\text{ cm}$)、黒色土ブロック ($\phi 2\text{ cm}$) がまだらに入っている。締り、粘性あり。
- 5層 [淡黄褐色土] 砂質。FP ($\phi 2\text{ mm}$) 2%含む。やや粘性あり。締りあり。褐色土中に、FA ブロックがまだらに入っている。
- 5a層 [淡黄褐色土] 砂質。FP ($\phi 1\text{ mm}$) 2%含む。5層よりも FA の混入が少ない。
- 6層 [黄褐色土] FA の二次堆積層。やや柔かく、やや粘性あり。
- 6a層 [褐色土] 6層に褐色土が混入。
- 7層 [暗褐色土] 砂質。FP ($\phi 1\text{ mm}$) 4%含む。ブロック状のFA ($\phi 4\text{ cm}$) がまだらに混入。

第5図 1号住居址遺構平面図



1号住居址全景

1号住居址掘方全景



第6図 1号住居址掘方平面図

唯一発見された住居址は、南壁を試掘のときのトレンチにより床面すれすれまで削り取られ、また西壁の中央部は、攪乱により床面をぬいて掘り込んでいた。そのため住居のプランは、床面の追跡によって認定することにした。平面形で、約5.8m×4.7mを測る不正長方形を呈する。主軸方向は、N—46°05'—Eを示す。住居の掘り込みは、当時の地表面（土層柱状図第IV層）とみられる地点から23cmぐらいである。床面は、全体に平坦で凸凹は少なく、5cm内外のレベル差でおさまる。硬質な床面は、住居中央部が顕著である。貼床は、住居の全面にわたっており、その厚さは、10cm～20cmである。掘り方は、カマド、中央部を残して周辺部が低く掘られている。

貯蔵穴は、カマドの右脇にあるが、南側を井戸により掘り込まれているので、正確な形はみることができない。しかし、推定すると、平面形は、径約55cm、深さ約30cmの円形プランを呈すると思われる。

柱穴は、4本検出できた。その規模は、表1のとおりである。

遺物は、土師器片150点、須恵器片2点、石製品1点を検出した。また、住居址内の遺物の分布には、顕著な特徴は認められなかった。土師器は、その大部分が甕や壺であり、須恵器は、壺であった。いわば一個体と思われる甕や壺が破片で散乱していると考えられる。カマドからは、つぶれたかたちで、小形甕が一個体分、また、左袖からは、長胴甕が出土した。

カマド

カマドの主軸方向は、N—46°05'—Eで住居址のそれと同じである。

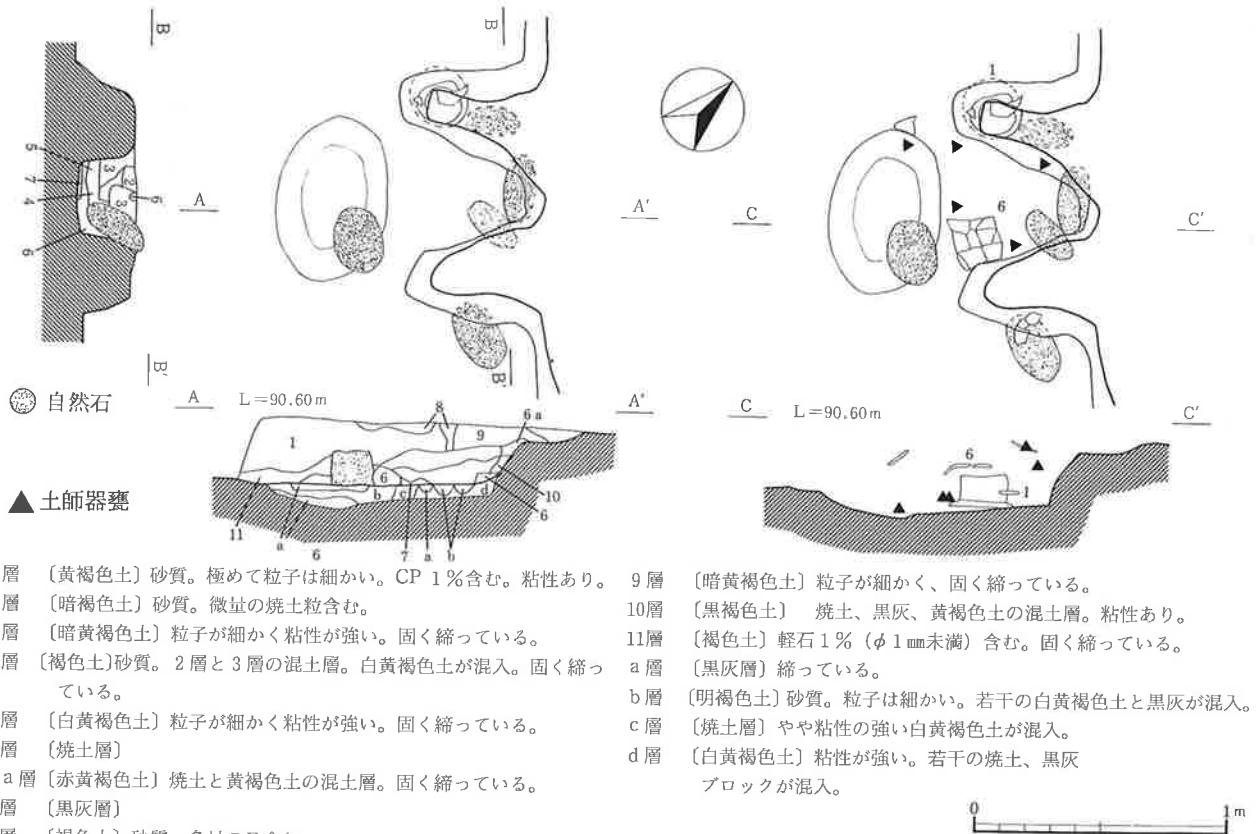
- 1層 [暗褐色土] 褐色土とFAの混土層。砂質。やや粘性あり。締っている。
- 2層 [暗褐色土] 砂質。黒灰色ブロック(Φ3cm)、FAブロック、FP含む。やや粘性あり締っている。
- 3層 [褐色土] 砂質。FA及び黒灰色土ブロック含む。やや粘性あり。締っている。
- 4層 [黄褐色土] ローム。
- 5層 [暗褐色土] 砂質。FAと灰の混土層。FP 1%含む。固く締っており、粘性あり。
- 6層 [黒褐色土] 褐色土と灰の混土層。FP、CP 1%含む。非常に固く締っている。
- 7層 [黒褐色土] 黒灰、焼土、FAの混土層。FP、CP 1%含む。固く締っている。
- 8層 [褐色土] 軽石1%含む。粘性あり。固く締っている。
- 9層 [褐色土] 砂質。柔かく、ふわふわしている。
- 10層 [黒褐色土] 褐色土と黒灰の混土層。FP 1%含む。



表1 柱穴等の寸法

No	平面形	長径	短径	深さ
P ₁	楕円形 (主柱穴)	38	33	27
P ₂	円形 (主柱穴)	47	42	32
P ₃	円形 (主柱穴)	47	46	26
P ₄	円形 (主柱穴)	48	44	33
P ₅	(貯蔵穴)	実測不能	56	30

(単位 cm)



第7図 1号住居址カマド平面図及び遺物分布図

次に、カマドの構造についてふれてみたい。このカマドは、両袖がかなり良好に残存している。しかし、煙道部は、その形状が明らかでない。両袖の長さ約55cm、右袖の最大幅約35cm、左袖の最大幅約40cmである。外形の幅約100cm、長さ約55cm、焚口の幅約50cm、奥行約40cm、掘り方から天井部の外面までの高さ約30cmを測る。

燃焼部から煙道部へかけては、ほぼ平らで、煙道部で28cmの深さとなる。袖部は高さ、21cm～26cm程残存している。袖の断面を見ると、左袖の内部には、石及び長胴甕を、奥には、石（川原石）を芯として使っている。また、右袖にも石を使った可能性がある。要するに袖は、石と甕を核にしてFAを使用して作られている。



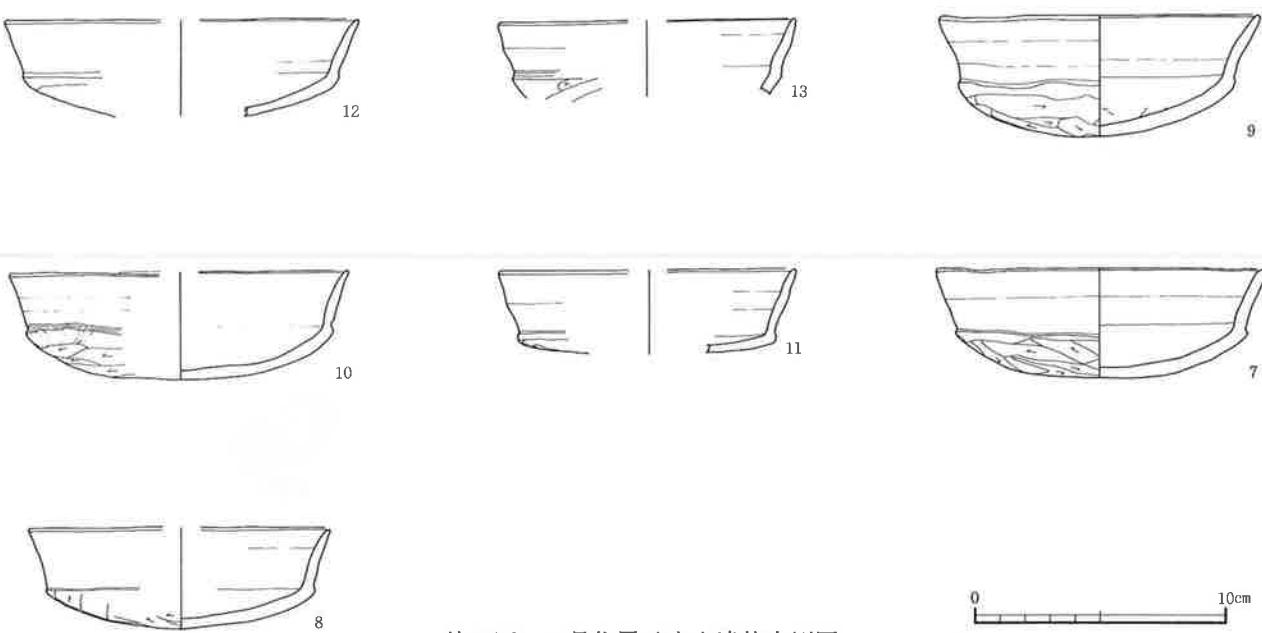
1号住居址カマド遺物出土状態



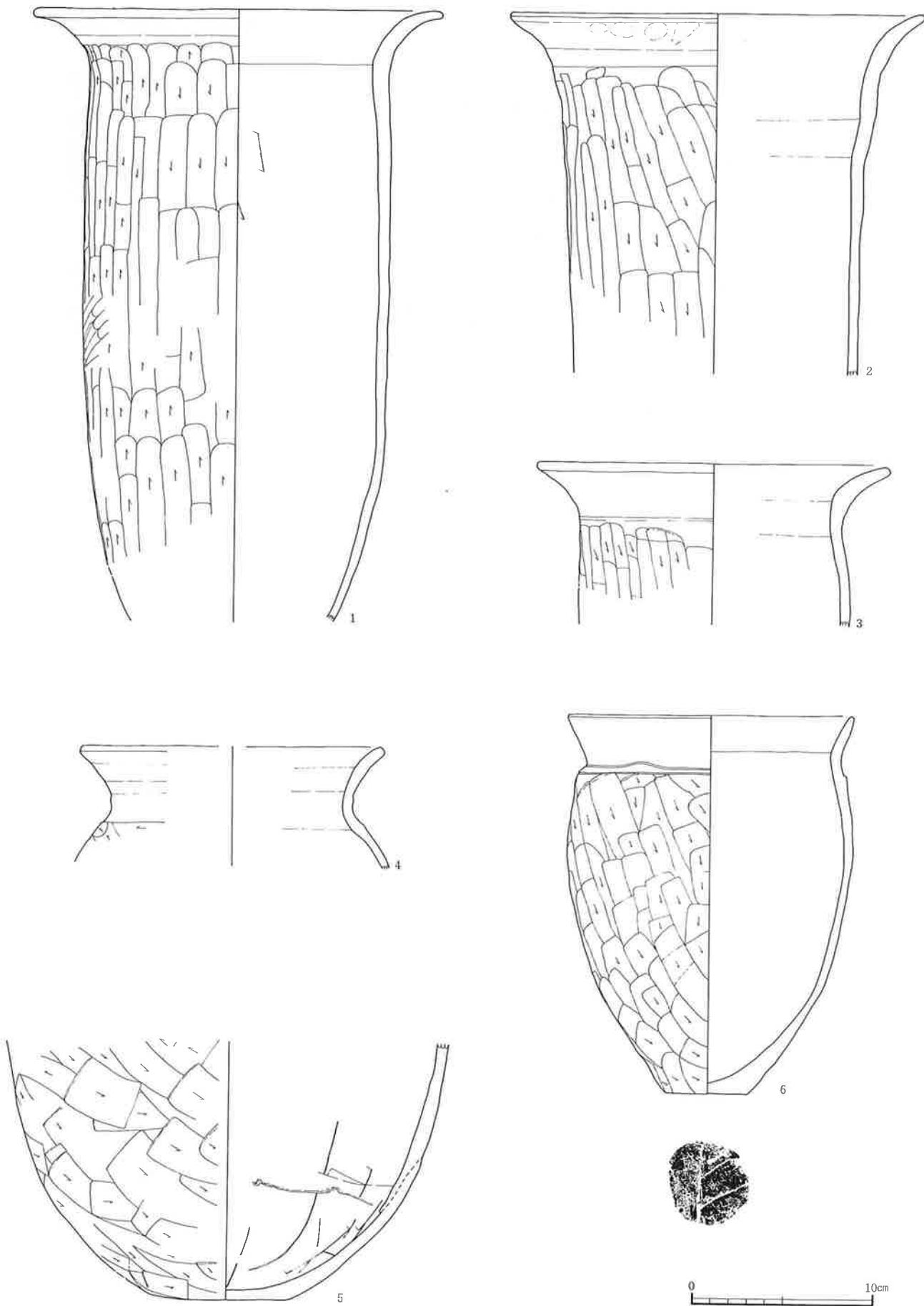
1号住居址カマド



第8図 1号住居址遺物分布図



第9図 1号住居址出土遺物実測図



第10図 1号住居址出土遺物実測図

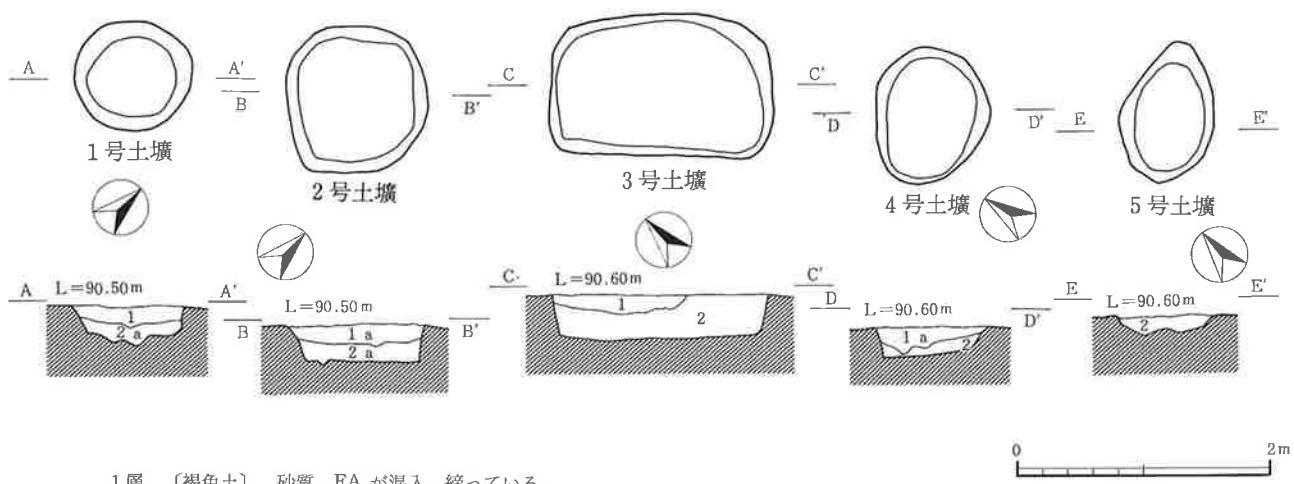
表2 1号住居 出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等(外面)	技 法 等(内面)	胎 土	色 調・焼 成・その他
1	甕	口径 22.0	口縁部 横ナデ 胴部 縦方向ヘラ削り	口縁部 横ナデ 胴部 ナデ	小礫・砂粒含有	色調 明褐灰色 5 YR7/2 焼成 良好、 90%残存
2	甕	口径 22.8	口縁部 横ナデ 胴部 縦方向ヘラ削り	口縁部、胴部 ナデ、輪積痕残る	小礫・砂粒含有	色調 淡橙色 5 YR8/3 焼成 良好、 50%残存
3	甕	口径 19.4	口縁部 横ナデ 胴部 縦方向ヘラ削り 器面 やや荒れている	口縁部 横ナデ 胴部 ナデ	多量の小礫砂粒 含有	色調 浅黄橙色 7.5YR7/4 内面 にぶい橙色 7.5YR6/4 焼成 良好、 口縁部残存
4	甕	口径 16.2	口縁部 横ナデ 胴部 不定方向ヘラ削り	口縁部 ナデ 胴部 ナデ	小礫・砂粒含有	色調 にぶい橙色 5YR7/4 焼成 良好、 口縁部残存
5	甕	底径 約5.0	胴部 不定方向ヘラ削り 底部 不定方向ヘラ削り	胴部、底部 ナデ 輪積痕、ヘラ痕残る	小礫・砂粒白色 粒子含有	色調 にぶい橙色 5 YR6/4 内面 灰褐色 5 YR5/2 焼成 良好、 底部残存
6	小形甕	口径 15.7 底径 4.5 器高 21.1	口縁部 横ナデ 頸部 2~3本の沈線 胴部 斜下方向ヘラ削り 底部 葉脈痕残る	口縁部 横ナデ 胴部 ナデ 底部 ナデ	小礫・砂粒白色 粒子含有	色調 明赤褐色 2.5YR5/8 内面 胴部上中半 暗赤灰色 2.5Y R3/1 焼成 良好、 ほぼ完形
7	坏	口径 13.1 器高 4.4	口縁部 横ナデ、口縁部と底 部の境に沈線と稜を持つ 底部 不定方向ヘラ削り	口縁部 横ナデ 底部 ナデ	小礫・砂粒含有	色調 淡橙色 5 YR8/4 底部 明灰褐色 5 YR7/2 焼成 良好 完形
8	坏	口径 12.0 器高 3.7	口縁部 横ナデ、口縁部と底 部の境に沈線と稜を持つ 底部 ヘラ削り	口縁部 横ナデ 底部 ナデ	小礫・砂粒白色 粒子含有	色調 にぶい橙色 5 YR7/4 焼成 良好 70%残存
9	坏	口径 12.8 器高 5.0	口縁部 横ナデ 稜を持つ 底部 不定方向ヘラ削り	口縁部 横ナデ 底部 横ナデ	小礫・白色粒子 含有	色調 にぶい橙色 5 YR6/4 焼成 良好 70%残存
10	坏	口径 11.8 (推定) 器高 4.3	口縁部 横ナデ 沈線あり口 縁部と底部の境に沈線と稜を 持つ 底部 ヘラ削り	口縁部 横ナデ 底部 ナデ	小礫・砂粒白色 粒子含有	色調 にぶい橙色 5 YR7/4 底部 若干黒ずむ 焼成 良好 40%残存
11	坏	口径 11.8 (推定) 器高 3.6	口縁部 横ナデ 口縁部と底 部の境に沈線と稜を持つ 底部 不定方向ヘラ削り	口縁部 横ナデ 底部 ナデ	小礫・砂粒白色 粒子含有	色調 橙色 5 YR7/8 底部 黒色 焼成 良好 20%残存
12	坏	口径 14.0 (推定) 器高 3.8	口径部 横ナデ 底部 ヘラ削り	口縁部 横ナデ 底部 横ナデ	小礫・白色粒子 含有	色調 橙色 5 YR6/6 焼成 良好 20%残存
13	坏	口径 11.8 (推定)	口縁部 横ナデ 2本の沈線 を持つ 口縁部と底部の境に 稜あり 底部 ヘラ削り	口縁部 横ナデ 底部 ナデ	小礫・白色粒子 含有	色調 にぶい橙色 5 YR7/4 内面 橙色 2.5YR7/8 焼成 良好 20%残存



1号住居址出土遺物

2 土 壤



1層〔褐色土〕 砂質。FAが混入。締っている。
 1a層〔褐色土〕 砂質。FA及びA輕石の混土層。締っている。
 2層〔暗褐色土〕 砂質。輕石(CP, FP)、FAブロック(Φ1cm)含む。やや粘性あり。締っている。
 2a層〔暗褐色土〕 砂質。FAブロック(Φ1cm)含む。やや粘性あり。締っている。

第11図 1号～5号土壤平面図

表3 土 壤 一 覧 表

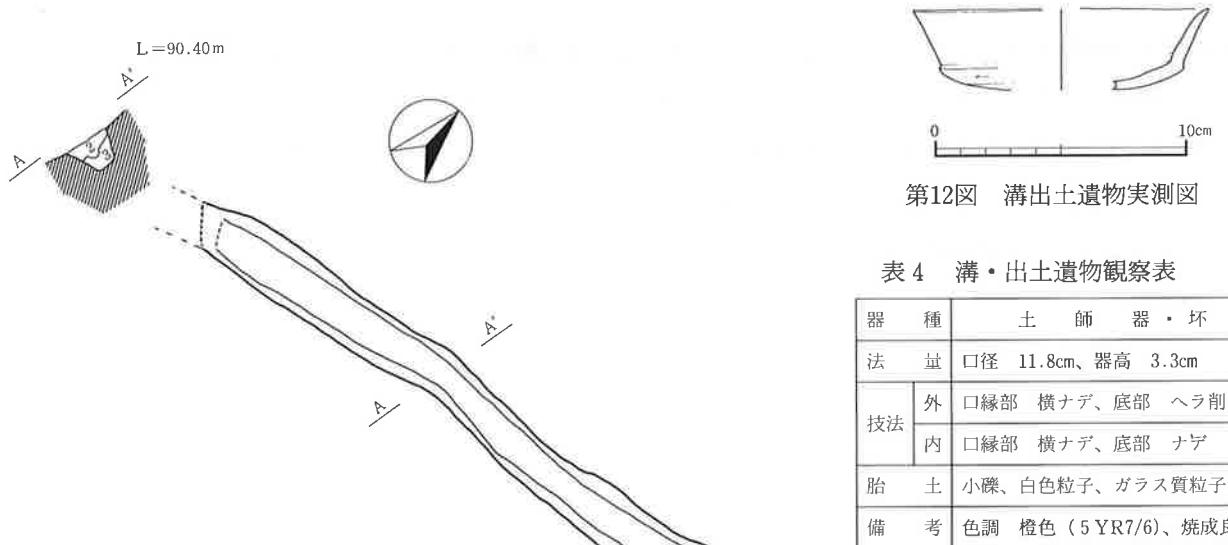
名称	平面化	長径	短径	深さ	名称	平面化	長径	短径	深さ
D-1	円形	95	90	30	D-4	楕円形	108	93	24
D-2	円形	118	115	30	D-5	楕円形	108	78	23
D-3	長方形	180	116	35					

(単位 cm)

3 溝状遺構

一号溝は、N—100°—W方向を走り、確認面において溝上幅約40～50cm、深さ約20～30cmの規模である。覆土は、上部が砂質を主体とする暗褐色土層で、中央が FA を主体とする黄褐色土層、下部は FA ブロックを含んだ褐色砂質土層である。

溝の中の遺物としては、土師器片 2 点である。



第12図 溝出土遺物実測図

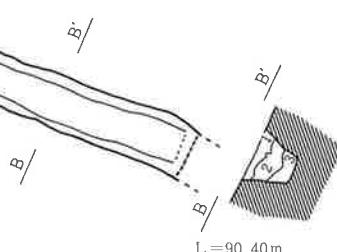
表 4 溝・出土遺物観察表

器種		土 師 器・坏
法	量	口径 11.8cm、器高 3.3cm
技	外	口縁部 横ナデ、底部 ヘラ削り
法	内	口縁部 横ナデ、底部 ナデ
胎	土	小礫、白色粒子、ガラス質粒子含有
備	考	色調 橙色 (5 YR7/6)、焼成良好

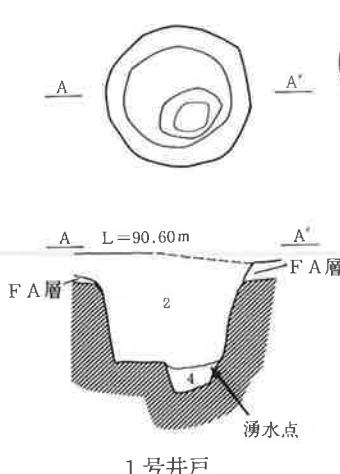
- 1層 [暗褐色土] 砂質。軽石 (CP) 1%含む。
- 2層 [明黄褐色土] FA 層。固く締っている。
- 3層 [褐色土] FA ブロック ($\phi 5\text{ cm}$) 含む。粒子は細かい。締っている。やや粘性あり。

0 2m

第13図 溝平面図及び断面図



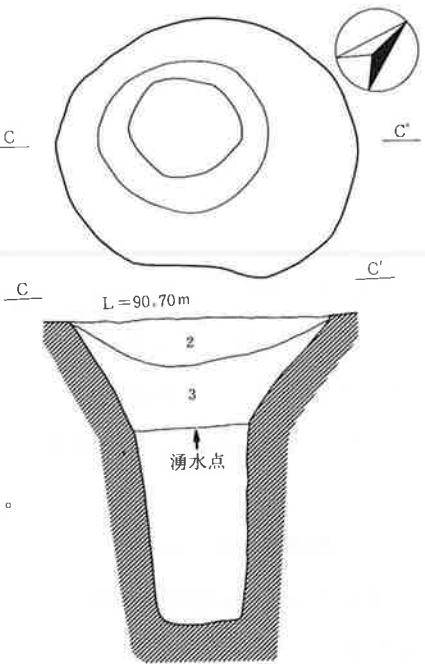
4 井 戸



1号井戸

- 1層 [暗褐色土] 若干のB軽石含む。やや固く締りあり。
- 2層 [黒褐色土] B軽石含む。
- 3層 [黒色土] 多量のB軽石含む。
- 4層 [黒褐色土] やや砂質、黄褐色土ブロック含む。

第14図 井戸 平面及び断面図



3号井戸

井戸は、3基検出されている。いずれも住居のそばに位置する。3基とも、調査中にかなりの湧水が認められた。出土遺物はない。

1号井戸

1号住居を切っている状態で確認された。素掘りの井戸で、確認面における平面形は、115cm×113cmの円形を呈し、以下85cmまで緩やかにすぼまり、そこで一端平らな面を作り、そこからまた橢円形を呈し、深さ105cmで底面に至る。掘り方は、礫層まで掘り込まれていて、調査時にも湧水が認められた。

2号井戸

1号住居の西側4mに位置する。平面形は、125cm×113cmの橢円形を呈し、以下底面まで緩やかにすぼまっていた。素掘りの井戸である。深さ132cmを測り、底面は、55cm×48cmの橢円形を呈し平坦であった。調査時にも湧水があり、湧水面は、底面から約50cmのところを保っていた。覆土は、3層に分けられるが、どの層も粘性が弱く、また、直径0.5mmから1mmのB軽石を含む。遺物の出土は認められなかった。しかし、第3層でも底面近くには、大量の礫を含んでいた。投石によるものと思われる。

3号井戸

1号住居の南東3.5mに位置する。素掘りの井戸で平面形は、240cm×211cmの橢円形を呈し、以下85cmまでロート状にすぼまり、更に、深さ240cmの底面まで円筒状に掘り込まれていた。底面は、93cm×42cmの橢円形で平坦であった。調査時にも豊富な湧水が認められ、底面から155cmのところに湧水点があった。出土遺物はないが、湧水点以下には人頭大の河原石40個を確認した。投石によるものと思われるが、井戸底部をみると、下部は、意図的に石を敷きつめたとも思われる。

IV まとめ

本調査対象地区は、住宅が立ち並んでいた跡地である。今回の発掘調査により、古墳時代の遺構、遺物を有する遺跡であることが分かり、前章までに述べたような成果を得た。

本遺跡地に隣接する地域の調査は、「後閑団地遺跡」、「後閑II遺跡」があり、いずれの調査においても古墳時代の竪穴住居を数軒確認している。しかし、古墳時代後期の住居は、未確認である。

1 住居址について

住居址は、一軒検出され、出土した土師器から鬼高III式に位置づけられる。住居址の特徴を列記すると、不整長方形プラン、4本柱穴、川原石及び長甕を構築材としたカマド、カマドの右に付設する貯蔵穴があげられる。この中で、川原石のカマド構築材使用例は、後閑II遺跡でもみられた。しかし、後閑II遺跡の住居は、奈良時代から平安時代にかけての住居であることから、同時期のものではない。また、後閑団地遺跡では、そのような使用例は確認されていない。次に、川原石の供給先であるが、当地は、広瀬川右岸上の前橋台地であるからして、広瀬川付近と考えられる。また、鬼高III式前後の住居の類例は、「西大室遺跡群」^{註3}の第1工区D区（北山地区）、「桧峯遺跡」^{註4}があげられる。

2 溝状遺構について

本遺跡地は、「後閑団地遺跡」と、となり合わせになっている。だから、その関係も踏まえて、一号溝について解釈してみる必要がある。

一号溝は、N—100°—Wに走り、確認面での溝上幅40～50cm、溝下幅20cm前後、今回の調査区域内で、長さ

8.5m検出された。FAは、自然埋没が完了しない時期に降下し、底部より10cmの高さに堆積していた。また、溝底部には、砂や礫などを含む層は認められなかった。後閑団地遺跡の溝との関係は、FAの堆積状況と走行方向の様子からみて、W-1と称されている溝につながると考えられる。今回の調査では、明確な時代決定を下すことはできないが、FA降下以前ということは確かである。

3 土壌について

各土壌については、埋土に、砂質の褐色土を含んでいるという共通点はあるものの、今回の調査では、遺物の出土もみられず、時代決定及び使用目的を考えるまでには至らなかった。

4 井戸について

3基とも、埋土中にB軽石を含む。1号井戸については、住居を切っていることと、覆土の状態からみて住居が埋まつた後に掘られたと思われる。また、覆土中にFAを含まない。時期については、出土遺物を伴なわないので、FA降下以後からB軽石降下以前としか考えられない。これと覆土状況が似た井戸は、後閑団地遺跡の1号井戸である。

本遺跡地における遺構の順序性については、最初に溝ができ、次に住居が作られ、その後に井戸が掘られたと考えられる。

住居は、一軒しか確認されなかつたが、おそらく、本遺跡地の北側に集落は存在したと思われる。そして隣接する「後閑団地遺跡」から、本遺跡地の住居と同時期のものが出ていないということが、時代に伴なう集落の区域を想起させる。

註1 「後閑団地遺跡」(昭和57年度、前橋市教育委員会)

註2 「後閑II遺跡」(昭和58年度、前橋市教育委員会)

註3 「富田遺跡群、西大室遺跡群」(昭和56年度、前橋市教育委員会)

註4 「桧峯遺跡」(昭和56年度、前橋市教育委員会、佐田建設株式会社)

坊山遺跡

昭和59年3月26日 印刷

昭和59年3月31日 発行

発行者 前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12番1号

印刷所 朝日印刷工業株式会社
